
流星のロックマン4 Operation Shooting Star

デスサイズ・0

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流星のロックマン4 Operation Shooting
Star

【Nコード】

N1057S

【作者名】

デスサイズ・0

【あらすじ】

メテオGの事件から約半年…
彼らの新たな物語が始まる…

作者は流星1・2をまともに覚えていない上に3の裏シナリオも途中でやめているヘタクソで、色々違う部分があるかもしれません

よろしくお願いします。

なお、読者が流星を知っていると言う前提で書いていきます…

さらにキャラ崩壊します…さらに悪ふざけネタがちよこちよこはいります…

プロローグ（前書き）

プロローグです

プロローグ

220X年、地球は三回の危機に襲われた。

一回目は地球外の星、「FM星」からの侵略の事件。

二回目は「ムー大陸」と「オーパーツ」を利用した事件。

三回目はノイズの流星、「メテオG」を利用したMr.キングの事件。

しかし

全て一人の少年…「シューティングスターロックマン」こと星河スバルとその相棒ウォロックと仲間達によって阻止された。

そして…

220X年…

4月…

メテオGの事件から約半年…

新たな彼らの物語の始まりは…

ここから…

プロローグ（後書き）

またしばらくしたら第一話を投稿します

【第1章・出逢い】第一話 始まり（前書き）

えくと…まず更新は不定期です…それから凄まじい駄文です…所々
おかしい所があります…すいません…

【第1章・出逢い】第一話 始まり

??? 『うおおおおおい!!! おきろおおおお!!!』

朝からコダマタウンに大声が響く

??? 『うゝん…あと5分…ZZZ…』

『うおおおおおおおい!!! 早く起きねえと遅刻するぞ!!!』

叫んでいるのはウォーロック、FM星育ちのAM星人だ。

「んゝ…今なん…じ…!? ヤバい! 8時!? 遅刻するー!!!」
今叫んだのは星河スバル、まあこの物語の主人公だ。

そしてこの二人が電波変換するとシューティングスターロックマンとなる。

ロック 『まったく…コイツを朝起こすのは疲れる…』

ウォーロックはブツブツ言っている。

スバル 「うわあああ! 急がないと委員長たちがくるううう!!!」
と言いながら全速力で着替えている。

ウォーロック 『まったく…今日から6年生だろうが…』

そう今日は始業式。今日からスバル達は6年生だ

スバル 「ウォーロック! もう少し早く起こしてよ!!!」

ウォーロック 『あのなあ!!! 俺はお前を起こすために30分近く絶叫してんだよ!!! まずお前が10分だけでも早く起きれるように

なりやがれ!!!』

スバル 「ごめん…」

30分ときいて驚き、謝ったスバルだった

ウォーロック 『んなことより時間をみろ!』

スバル 「8時10分…ヤバiiiiiiii!!!」 ドタドタドタ!
スバルは階段を走り降りる。

茜「おはよう、スバル」

スバル「おはよう！母さん！」

茜「早く食べて行かないと遅刻するわよ」

スバル「いただきます！」

スバルは朝飯を急いで食べ始めた。ちなみに朝食は焼魚にご飯と味噌汁だ。

ピンポン

スバル「ヤバイ！委員長きたあ！」

スバルはギリギリで朝食を食べ終えた

スバル「行ってきます！」

茜「いつてらっしゃい。」

ガチャ…

???「おそおおおおおい！！！」

スバル「すいませでした！」

いま叫んだのは白金ルナ、みんなからは委員長とよばれている。彼女のウィザードはモード。

スバルは土下座で謝った。

???「相変わらずおせえな！牛丼を食ってたのか？」

今のは牛島ゴンタ。縦にも横にも一番の少年だ。ウィザードはウォーロックと同じ元F M星人のオックス。彼は電波変換してオックス・ファイヤになれる。

???「ゴンタ君：君じゃないんですから…」

今のは最小院キザマロ。知識はすごいが、背が小さい。彼のウィザードはペディア。

ウォーロック『お前ら…急がないと遅刻だぜ？』

現在8時20分。学校は8時30分からだ。

ルナ「急ぐわよ！」

こうして4人は小学校へ走っていった。

続く
…

【第1章・出逢い】第一話 始まり（後書き）

あとがきでは新キャラなどが登場した場合はそのキャラの解説 and 裏事情などを書いていきます。それ以外の場合は小説内のキャラをよんでのあとがきトークとなります。

次回からですが。

それではさようなら

第二話 転校生（前書き）

王道展開です。

所々文がおかしくなりますがすいません。

第二話 転校生

スバル 「なんとか間に合ったね……」

ルナ「全く…アナタが早く起きないからよ!! アナタを待っている私達の身にもなってみなさい!」

スバル「すいませんでした！」

で、始業式も終わっている。いまはHRの時間。ちよつと前ってぐらい

キザマロ「そう言えば今日は転校生が三人も来るらしいですよ。」

ゴンタ「それは楽しみだぜ！」

スバル「一体どんな人が来るんだらう。」

ルナ「じゃあ私は委員長としてなかよくしなきゃね！」

ガラガラガラガラ

ドアが開いて先生が入ってきた。ちなみに先生は去年と同じ育田道徳だ。さらにクラスのメンバーも変わっていない。

「今日は3人も転校生がきてるぞ！入ってきてくれ！」

ガラガラ……

一人目は長い緑の髪の少年

二人目は黒髪のツンツン頭の少年

三人目は…エメラルドグリーンの瞳で茜色の髪のかわいい少女

「久し振りだね、双葉ツカサです。」

「ジャツクだ。元氣にしてたかオマエら？」

「初めましていいのかな？響ミソラです！」

クラス全員が思考停止状態に陥っている

まあ仕方ないが。なんせミソラは超国民的アイドルでありそんな人が自分たちのクラスに転校してきたのだから：

「なんだ？せっかく自己紹介してるのに拍手もなしかな？」

「「「「「はっ！」「」」」」」　パチパチパチ：

「「「「「すごい！ミソラちゃんがこのクラスにっ！」「」」」」」

ジャック「えーと：俺らもいるぜ…」

「「「「「ツカサ君、ジャック、お帰りー！」「」」」」」

ツカサ「戻って来れてよかった。」

ジャック「全くだ。」

この二人は結構仲良くなってるようだ。

「でー3人の席だが…」そのとき！！クラスの男子の目が光ったっ

！（スバルとツカサとジャック以外の男子である）

「先生！ぜひミソラちゃんを僕の隣に！」

「いや！ぼくの隣に！」

ゴンタ「いや！俺の隣に！」

キザマロ「いえ！僕のとなりに！」

スバル「みんな欲望丸出しじゃん…」

ツカサ「僕はどこでもいいです、先生。」

ジャック「俺も。どこでもいいぜ。」

ミソラ「：私：スバル君の隣がいいです！！」

スバル「へっ！？ぼ、ボク！？」

「スバル君…ってことは二人は友達か？星河、かまわないか？」

その時男子（ツカサとジャック以外のだが）から凄まじい殺氣が送られた。さらに「断れ！」と言うオーラがでている

スバル「（なんか凄まじい殺氣だなあ…）かまいませんよ…」

そう言うミソラはスバルの隣に走ってきて

ミソラ「よろしくね！スバル君！」

といってスバルに向かってウインクした。

スバル「よ、よろしく…（何か大変な事になりそうだな…）」

ちなみにツカサはスバルの後ろ、ジャックはルナの隣だ。

ツカサ「久し振りだね！スバル君！」

スバル「うん！久しぶりツカサ君！」

ルナ「久しぶりね！ジャック！」

ジャック「ああ、久しぶりだな。」

「じゃあHRは始めるぞ」

HRなどはすっ飛ばして：

放課後（午前中で終わったので昼）

帰り道：

スバル「びっくりしたよ：まさかミソラちゃん達が転校してくるなんて：でもどうして？」

ツカサ「僕はヒカルとの和解に成功したからね。」

ヒカルと言うのはツカサのもう一つの人格だ。

ジャック「俺は暁のおかげで出て来れたんだが学校に行けって言われたんでな。」

ジャックはメテオG事件の時ディーラー言う犯罪組織に所属していた。

で、暁と言うのはサテラポリス遊撃隊の隊長でかつてディーラーのアジトでジョーカーの自爆を一人で受けて死んでしまったと思われていたが、スバルがメテオサーバーから帰ってきてから三日後、WAXAのメインコンピュータールームにもたれ掛かって意識を失っているところを発見された。いまもサテラポリスで働いている。

ミソラ「私は前の学校では友達と言える人がいなくて：それでスバル君達がいるここに転校してきたの。」

ウォーロック（…ミソラがいると言うことは…間違いない…！やつが…いる…！）

『ポロロン、久し振りねウォーロック！』

ウォーロック『やっぱりな…ハープ…』

ハープ『当たり前でしょ。私はミソラのウィザードなんだから。』

で、

ルナ「じゃあ私はこっちだから。じゃあね！」

スバル、ツカサ「バイバイ委員長。」

ミソラ「バイバイルナちゃん。」

ゴンタ「じゃあ俺らはこっちだから。」

キザマロ「さようなら。皆さん。」

スバル「うんバイバイ！」

ジャック「さて、おれはWAXAだからこっちだ。じゃあな。」

で、

スバル「ツカサ君、ヒカルとの和解に成功したんだね。」

ツカサ「うん。僕はヒカルと共に生きていくと決めたんだ！さらに…」

『俺はツカサのウィザードになっちまったぜ！』

ツカサ「ヒカルは多分ジェミニの影響でウィザードに…しかも電波変換でジェミニ・スパークになれるんだ。」

ミソラ「何か二人一緒に立ってたらどっちか分かんなくなりそうだね…」

そう、ヒカルはもろに見た目が人の状態でウィザードになったので並んで見ると分かんなくなりそうになる。ツカサ「あ、じゃあ僕はこっちだから、バイバイ！」

二人「バイバイツカサ君！」

スバル「ミソラちゃんはどこに住んで…ってベイスайдシティか。」

ミソラ「ううん、私、コダマタウンに住むの。」

スバル「へえ、家はどこ？」

ミソラ「それはね……」

続くっ！！

第二話 転校生（後書き）

ほい、あとがきトーク第一回。ゲストはスバル&ウオーロックです。ウオーロック「おい作者！俺の出番少なくてねえか！？」

作者「すまん。行き当たりばったりで作ってっから…だが次回は1, 5倍には増えるぜ！」

スバル「行き当たりばったりで作ってたの…作者さん…」

作者「まあな…ノビハザと平行でやってるし。もしかしたらこっちがメインになりかねないがな。」

／おいそれは困るぞ！！

スバル「何！？いまの声！？」

作者「多分のび太かドラえもん。今から刀でぶった斬ってくるわ。俺の愛刀、悪一文字「斬左」で。このネタわかる人には解るはず。じゃあ今回はこの辺で。さようなら」

オリヤアアア？

第三話 もう一つの朝……そして……家族（前書き）

…前回にミソラちゃんがハープ・ノートに電波変換出来るとかくの
忘れました…スイマセン…

後半は王道展開2です…

第三話 もう一つの朝……そして……家族

「……スバルが学校へ行ってしばらくたった頃……」

ピンポン

スバルの家のインターホンがなった：

「あら？誰かしら？こんな朝早くから…」

ガチャ：

「すみません。朝早くから。」

そこに居たのは長い銀色の髪にアイスブルーの瞳の結構美人な少女だった

「あ、私近くに引っ越してきた、涼宮アリサ、と言います。宜しく願います！あとこれ：つまらないものですがどうぞ。」

「ありがとうございます。どの辺りに引っ越してきたのかしら？」

「少し向こうの方です。ここから歩いて：5、6分位ですね。」

「へえ…あ！もしよければウチにあがっていかない？」

「（うーん…まあこの家が最後だったし予定は今日はもう無いからいいですね…）じゃあお言葉に甘えて：お邪魔します。」

「どうぞ。」

「紅茶でいいかしら？」

「ハイ、大丈夫です。」

「どうぞ。」

「ありがとうございます。」

「そう言えば涼宮さんはおいくつなのかしら？」

「スバル君のお母さんから聴いてなかった？」
「一回も聴いてないよ……」

で、スバルの家について…

ガチャ…

「ただい…ま…?」

スバルは驚いた。なぜなら丁度スバルの家を出ようとしているアリスと鉢合わせになったからだ。

「あつ、すいません！」アリスはすぐにスバルの家を出て帰って行った。

「…母さん…今の人は？」

「ああ、涼宮アリスさんといって近くに引っ越して来られたのよ。それで挨拶に来てらしてね、あがってもらって話してたのよ。」

「そうなんだ…ってそんな事より母さん！！なんでミソラちゃんにくること教えてくれなかったのさ！」

「だってその方が面白いじゃない！」

(全く…)

スバルはあきれていた

(スバル君のお母さんてこんな人なんだ…)

ミソラは若干驚いていた『はあ…コレで俺の人生真っ暗だな…』

『あら？それはどう言う意味かしら？』

『何でもない。気にするなっ！』

そう言っってウォーロックはウィザードオフした。

「そんな事より早く家に上がりなさい。二人とも。」

「うん。」

「お邪魔しまゝす。」

「ミソラちゃん。今日からこの家に住むんでしょ？だったらお邪魔

します　じゃなくて…？」

「え…あ…た、ただいま…」

「おかえり、二人とも。」

（おかえり…か…もう聞けないと思っていたなあ…）

「ごめんね…さっきまで喋っていたから今からお昼ご飯作るから二階で待ってて。」

「はい。」

続くっ！！

第三話 もう一つの朝……そして……家族（後書き）

はい、新キャラ登場したので解説をします。

まず見た目。モチーフはGOD EATERのアリサです。服はさすがに違います：

あ…服の描写忘れた…何やってんだろ俺…
で、名前。

決め方はたまたま机の上に友達から借りたハルヒとGOD EATER BUSTの攻略本があってテキストにめくって決めました。性格は優しいです。

今はこんなものでしょうか。

またいつか補足で同じキャラで何回もやるかもしれません。

で、次回のあとがきルームは…ミソラちゃんとハープの予定です。

第四話 特に何もない昼下がり。(前書き)

バトルはしばらく先になりまーす！

『なんだって！俺の見せ場がっ！！』

なんなら俺と戦うか？悪一文字「斬左」で相手するぜ？

『よっしゃあ！食らえビーストスイング！』

ふっ…当たらんよ！飛天御剣流、龍巻閃・旋！

『ぐへっ！』

ありや…峰打ちとは言ってもやりすぎたか…気絶しちゃったよ
…あ、龍巻閃はよく使う俺の技でもあります。無論棒でやりますが。

第四話 特に何もない昼下がり。

ガチャ…

「さ、はいつて！」

「うん。」

スバルはミソラに自分の部屋にはいつてもらっている

「わぁー宇宙の本ばかりだね！」

「うん。ミソラちゃんも読んでみる？」

「うーん…またこんどにね…」

「そう？じゃあ今から何しようか…」

「うーん…どうしよう…」

で。

「スバルーミソラちゃんーご飯できたわよー」

「何するか考えてる内にご飯出来ちゃったね…」

スバルは苦笑しながら言った

「まあいいんじゃない？早く食べに行こうよ！」

「うん。」

で。

今日の昼ご飯は蕎麦だった。

「ねえミソラちゃん？」

「はい？」

「今日からこの家にすむからこれから私の事を“お母さん”ってよんで、私も”ミソラ”って呼ぶから。」

「あ、はい…」

「それと敬語じゃなくていいからね。」

「…うん…」

ミソラは涙目だった。それもそうだろう…ミソラの両親は何年か前に亡くなっているのだから…

で。

「ねえ…スバル君…」

「どうしたの？ミソラちゃん？」

「お母さんはどうして“お母さん”って私に呼ばせるのかな…」

「それはきつとミソラちゃんを“家族”と思っているからだよ」

「でも私は居候だよ…」

「でも同じ家に住んでいるんだからもう家族だよ。」

「う…うううう…」

ついにミソラは泣き始めた…

「大丈夫だよこれまで一人で頑張って来たんだからこれからは父さん、母さんやボクにだって甘えなよ…」

スバルはミソラの肩を軽く叩いて言った

『オイオイ、俺も忘れんなよ！』

「…もちろんウオーロックもね…」

（俺はついで…なのか…？まあいいか…）

『ミソラ、よかったわね！』

「うん！」

「フフッ、じゃあ色々して遊ぼうか！」

続くっ！！

第四話 特に何もない昼下がり。(後書き)

ほい、後書きルーム第二回。ゲストはミソラちゃんとハープです。

「ねえ、作者さん！アノ話はいつ書くの！？」

ああ、アレね、次か次の次ぐらいだな。

「ホントに！絶対だよ！」

ああ！アレは必ず3話以内に書く！その時はハープ！前書きで気絶してるがさつをたのむぜ！

『まかせといて！あのがさつは私が拉致つとくわ！！』

「ってか“気絶してる”じゃなくて作者さんが気絶させたんでしょ…」

まーね…やりすぎたぜ…旋じゃなくて木枯にしとけばよかったかな…ま、いっか。

じゃあ今回はこれで、次回のゲストは…未定です！

ではさようなら！

第五話 星空の下で（前書き）

後半は流星の小説お約束のアレですぜ…

相変わらずの駄文ですが…

第五話 星空の下で

現在時刻は6時30分頃。

二人は：

「……………」。

スバルは本を読んでいる

「うゝ…暇ゝ…」

ミソラは暇を持て余してゴロゴロしている。

「ねえゝスバル君ゝ」

「……………」

『オイ、ミソラ、コイツは一つの事にハマると完全に自分の世界に入り込んで周りが見えなくなるから呼んでも無意味だぜ…諦めろ…』

「そうなんだ…」

で。

「二人ともゝ晩御飯ができたわよゝ」

「だってさ！スバル君！」

「……え…？なんて？」

「だから！晩御飯出来たって！」

「あ…うん。」

で。

「ただいま」

大悟が帰ってきた

ちなみに大悟はメテオGから帰ってきた後、WAXAで働いている。

「おかえり、父さん。」

「お帰りなさい、大悟さん。」

「お帰りなさい、お、お父さん…」

「フフフツ、ミソラ、少しずつ慣れていけばいいのよ。だから緊張しなくていいわよ。」

「そうだぞ、それとこれからよろしくな!!」

で。

「」「」「いただきます」「」

晩御飯はカレーだ。

「お母さん! おかわり! 大盛りで!」

「茜、俺も!」

「はいはい、ちよつとまってね!」

「二人ともよく食べれるね…」

「お母さん! おかわり!!!!」

「ミソラちゃん…凄すぎる…（ミソラちゃんの胃はブラックホールなのか？）」

で、晩御飯を食べ終わって…。

「じゃあボク、展望台に行くね。」 「あ…スバル君…」

「どうしたの？ミソラちゃん？」

「その…」

「…ミソラちゃんも一緒に行く？」

「うん！！」

「行ってきます。」

歩いて行こうとして家をでた。すると…

「あれ？スバル君…ミソラちゃん！？」

ツカサがいた。

「あ、ツカサ君。どうしたの？」

「散歩だよ、で…何でスバル君の家からミソラちゃんがでてくるの？」

「私がスバル君の家に住み始めたからだよ。」

「ふーん…、じゃ、僕はそろそろ帰るよ、おやすみ。」

「うん。おやすみ。じゃあ行こうか。」

「うん。」

『なあ、ツカサ。お前も気づいたのか？』

「まあね、あの時ミソラちゃんの顔が少し赤かったからね…」

『と言うことは…アノ二人は…いや、スバルは気づいてなさそうだが…』

「だろうね…」

『明日は面白いことになりそうだな！』

「そうだね！」

なんて会話をしながらツカサとヒカルは帰って行った

で。

展望台に着いた二人は…？

「……………。」

「……………（どうしよう…今言おうかな…）」

『（頑張りなさい！ミソラ！私が邪魔者…じゃなくてウォーロックを拉致して二人きりにしてあげるから！！）』

「（うん…！わかった！）」

『だあああああ！！暇だ！！スバル！ちよつとウイルスぶっ飛ば

してくる！ハープお前も来い！！』

『え…！？わ…わかったわよ…（頑張ってね！ミソラ！）』

「ス、スバル君…」

「…ん？どうしたの？ミソラちゃん。」

「大事な話があるの…」

大事な話と聴いてスバルの顔が少し真剣になる

「あのね…わ、私…す、す、スバル君のことが…」

だんだんミソラの顔が紅くなっていく。

「スバル君のことが好きです！つきあってください！（言えた…！）」

ミソラはうつむいて手を出した

「ミソラちゃん…」

スバルはその手を取っていった。

「ボクでよければ喜んで…！」

「ありがとう！スバル君！」

ミソラはスバルに抱きついた

「うわっ！ミソラちゃん！？」

スバルは顔が紅くなっていく

『フツ…よかったなスバル！』

「ウォーロック！まさかわかって二人きりに…」

『まあな。』

『ほんとビックリしたわよ！あのウォーロックが空気を読むなんて！』

『ハープ…馬鹿にしているのか？』

『違うわよ！褒めてるの！』

『そうか。ならいい。』

そう言って二体はウィザードオフした。

「ねえ…つきあい始めた記念に…キスしてよ。」

「ええええええっ!？」

「嫌？」

ミソラは上目使いで言った。

「(うっ!か、可愛い…)嫌じゃないけど…その…は、恥ずかしくて…」

「大丈夫だよ!今は誰も居ないから!」

「う、うん…じゃあ行くよ…」

「うん…」

二人は目をつむり…

「ミソラちゃん…大好きだよ…」

そう言ってスバルは

キスした…

その瞬間…

夜空を

流星が駆け抜けた

二人を祝福するように…

続く
⋮

第五話 星空の下で（後書き）

ほい、後書きルーム今回のゲストはスバル君&ミソラちゃんであ。

「……………／／／／／」

どうしたあ？スバル？顔真っ赤だな…

「……………／／／／／」

ミソラちゃんもか…

やっぱ最後のアレはやりすぎたか…俺も書いてて恥ずかしかったかな…

で？どうよ？お二人さん。付き合うことになって、感想は？

「私はとっても嬉しい！！／／／／／」

「ぼ、ボクも…／／／／／」

そりゃあよかった。

俺も恥ずかしい思いして書いた甲斐があったぜ。

んじゃ今回はこれくらいで、次回のゲストはツカサ君&ヒカルの予定です。さようなら！

第六話 ラブラブ?の二人? (前書き)

相変わらずの駄文

第六話 ラブラブ?の二人?

「……」

少したってから二人は唇を離した。

「ありがとスバル君!／／／／／／／／」

「どういたしまして／／／／／／／／／／」

「そろそろ帰ろっか♪」

「そうだね!」

二人は自然と手をつないで歩き始めた。すると前から人が歩いてきた。

「あれ? 貴女はたしか…」

「あ、涼宮アリサです。宜しくお願いします。」

「ボクは星河スバルと言います。」

「私は響ミソラです。」

「あ、やっぱり本物のミソラちゃんでしたか。帰るときに似てるな」と思いましたから……とところで…お二人は付き合ってるんですか?」

「えっ!? いや! 別にそう言う訳では…」

「じゃあどうして手をつないでるんですか?」 「あっ!／／／／／／」

「／／／／」

「やっぱり付き合っているんですね♪」

「「はい…／／／／／／」」

「と言うかさっき私が告白してokしてくれたんですけどね…／／／／／／」

「それはよかったですね! じゃあ私は邪魔にならない内に…さようなら」

アリサは走って展望台に行った。

で。

『なんか で。が多くねえか?』

それは俺の力不足だ…すまん…大目に見てくれ…

閑話休題

で。

「お帰り…あら?二人とも顔が紅いし、手つないでどうしたの?♪」

「あ、これはね私が「ミソラちゃん!ボクの部屋に行こう!!!」

「あ!待ってスバル君!」

スバルはミソラを引っ張って自分の部屋に行った。

「そんな事しても無駄よ♪」

「危なかった…」

「なんで?」

「ボクらが付き合っていることがバレたら間違いない問題が…」

「あら！？二人は付き合ってるの！？よかったわね！」

「母さん！いつの間に！！」

「大悟さんにも教えなきゃ！♪」

「何故にこんなことに？」

「私は付き合ってるのバレてもいいけど？／／／／／」

「いや：それだとボクの命が：それにミソラちゃんの仕事にも影響が……。」

そう、ミソラと付き合うと言うことはミソラちゃんファンほぼ全てを敵に回すと言うことになりかねない。

さらにミソラの仕事にどんな影響がでてくるのかわからない。

「大丈夫だよ！私達の愛はそれだけじゃ崩れないよ！！」

「そうきましたか……。」

「それに私、次のライブでしばらく活動休止するの。」

「え？なんで？」

「だってさ、勉強出来ないと駄目でしょ？だから最低でも中学校、もし行けるなら高校卒業までは勉強に集中したいから：ね。それにスバル君とデートもいきたいし：」

ミソラは最後の方は小声で言った。

「そうなんだ：じゃあそのライブには絶対行くね！！」

「うん！ありがと！ライブはゴールデンウィークの初日だからね！」

「わかったよ、明日みんなに伝えるね！」

「スバル！ミソラ！どちかお風呂入りなさい！それとも二人で入る？」
（笑）」

「なっ！？／／／何言ってるの！？そんなの：／／／／／」

「／／／私は別にいいけど…？／／／／／」

「いや、これは駄目でしょ！！」

「じゃ、じゃあスバル君…一緒に…寝よう…？／／／／／」

「いやいや…駄目でしょ…」

「嫌なの…？」（上目使い＋涙目 無論演技）

「うっ！わ、わかった…じゃあ先にお風呂入ってくるね！」

で、ミソラは…

「ねえねえ！ミソラはスバルのどんな所が好きなの♪？」

「そんな…／／／／／いっぱいありすぎて…」

「いくつか挙げてみてよ♪」

「うーん…優しい所とか…かっこいい所とか…かな／／／／／」

茜にからかわれてたとき。

「ミソラちゃん、お風呂空いたよ」

「わかった！すぐ入ってくるね！！」

「ねえスバ」さうてボクは部屋に行くでしょう！！」
スバルはわざと茜の言葉を遮って部屋に逃げた。

「あ、逃げられちゃった…」

「よし！ここは男同士で聴いてみるか！」

「大悟さんよろしくね♪」

「まかせとけ！！」

大悟は二階に上がっていった。

「はあ…なんとか逃げれた…」

『オフクロは最強だな…』

「ロック、今までどこにいたの？」

『そりゃあ、お前、月曜日の夜8時つつたら水戸黄門しかねえだろうが。』

「要はテレビ見てたんだね…」

『そう言うこった。』

と言ってウィザードオフした。

ガチャ…

「よおスバル！」

大悟が若干ニヤけながら部屋に入ってきた。

「あ…父さん…」

「で…どうなんだ？ミソラと付き合う事になって？」

「そりゃ嬉しいよ…けどバレたらえらいことになりそうで…」

「大丈夫だ！お前は地球を三回も守ったんだ！お前達ほどお似合いのカップルは居ないぞ！」

「そうかな…？」

「で？どっちが告白したんだ？」

「それはミソラちゃんから…」

「そうか。しっかりミソラを守ってやれよ！！」

「うん!!」

「いい返事だ!それでこそ俺の息子だ!じゃあもう遅いから寝ろよ!お休みっ!」

「うん、お休み。あ、布団取って来なきゃ。」

「要らないだろ?さっきミソラから聴いたぞ?一緒に寝るってな!じゃ!お休み!」

ガチャ!

「言っちゃったのか…ミソラちゃん…」

『諦めろ…』

で。

「スバル君、寝よう♪」

「ハイ…」

二人は一緒にベッドで寝始めた

「あの…ミソラちゃん?なんで抱きつくの?／／／／」

「いいじゃん♪／＼／＼付き合ってるんだしさ♪」

「はぁ…」

続くっ!!

第六話 ラブラブ?の二人? (後書き)

ほい、後書きルーム、今回のゲストはツカサ君&ヒカルです。

さすがにツカサ君とヒカルは鋭いねえ!

「まあね!」

あの中でミソラちゃんの表情を見切るとはいいセンスだ!

『当たり前だろうが。』

話変わるけどツカサ君は俺が三番目にお気に入りのキャラクター何だよね〜

「何故三番目?」

一番はミソラちゃんだろ。

二番はスバルだ。

だから三番目だ!

「ふ〜ん…」

だからスバルとミソラを除いて結構出番は用意するZE!

『そりゃありがたい。』

んじゃ今回はこれくらいで。次回のゲストは…未定です! さようなら!

第七話 **A r i s a , s n i g h t** (前書き)

今回は微妙に？謎が多いです。

そして最後は完全パクリです…O R Z

第七話 Arisa's night

「はぁ…」

アリサは展望台で溜息をついている

（一体…貴方は何処にいるの…？私を助けてくれた貴方は…）

「って…また溜息着いちゃってる…」

『彼にそんな所見られたら何言われるかわからないわよ！！』

「うん…バタフライ…」

彼女のウィザード、バタフライが出て来て話しかける。

見た目はその名の通り蝶のような見た目だ

「ホントに何処にいるんだろうね…」

『最後に彼に会ったのはいつだっけ？』

「たしか…7年前だったはず…」

『けど二週間位しかいなかったよね…』

「うん…しかもその後私たちも…ね…。会いたいなあ…もう一度…
一分でも十秒でも…せめてお礼が言いたいよ…。」

『しかも別れる少し前に「俺達は必ずまた会える、だから待っている。」なんて格好いいセリフ残して行っちゃったもんね…』

「まったく…いつまで待たせるつもりよ……………」

デュオ…

第七話 **A r i s a ' s n i g h t** (後書き)

えー…新キャラ登場、アリサのウィザード、バタフライ。見た目はピンクと黄色の蝶と人を会わせた感じです。

実は5分の2は即興だったり…

性格は優しいけど結構きついと言う性格

で、何処が即興かと言うと見た目と名前。

いいのと思いつかなくてたまたま外を見たら蝶がいて決めました。

こんなもんでしょうか。ではさようなら！

第八話 “彼”（前書き）

短い…けど重要な話…

第八話 “彼”

深夜…コダマタウン…展望台で…

「ここは…よく星が見えるな…」

『ああ…』

一人の少年とウィザードがいた…

少年は黒い詰襟の牧師服のような服を着ていて、長い緑がかった黒髪でかなり長い髪だ。そして長い髪を一周りにしている

ウィザードの体は赤と黒の二色に長い金髪で頭は赤いヘルメットの
ようなものを付けている

『……わかってるのだろう…？電波変換したとき気付いたはずだ
……彼女がこの街にいること…』

「ああ…それに気付いたからここに来たんだよ…」

『いいのか？会ってやらなくて。』

「かまわんさ…愛想つかされてるだろう…七年もほっといたんだからな…」

『じゃあ何で此処にきたんだ？会いたいからじゃないのか？』

「違う…会う必要はない…ただ…一目…一目離れて見るだけでいい…それで十分だ…」

『そうか…』

「さて…寝る場所を探そうか…ゼロ…」

『そうだな…デュオ…』

二人は深夜の街に消えていった…

続く……

第八話 “彼”（後書き）

今回はデュオとゼロについて…ホントはもっと後に書こうと思いましたが少しだけ今書きます…

まずデュオ

名前は新起動戦記ガンダムWのデュオ・マックスウェルから。

見た目は顔はヒイロ・ユイ目はアイスブルー

髪は色はヒイロ、見た目はるろうに剣心の緋村剣心の追憶編の髪型。

服はデュオ・マックスウェル

こんなもんですか…いまは…

で。

ゼロ

気付いた方は居るかもしれませんが…

ロックマンゼロのゼロです。

ロックマンXにも出てきましたがあくまでロックマンゼロのゼロです…中身同じですけど…

この小説のゼロは…本人です…何故此処にいて電波変換できて何故デュオのウィザードになったかは…またいずれ…明かすと思います。

実はこのデュオ…この小説のもう一人の主人公です。そしてアリサはもう一人のヒロインと言った所です…

ゆえに出番超多いです。

では…

さようなら…

第九話 次の日の朝（前書き）

何やってんだろ俺……

第九話 次の日の朝

「…うーん…」

ミソラが目を覚ました

『ポロロン ミソラ、おはよう。』

「おはよう、ハープ。」

『ミソラは早起きだな！スバルとは大違いだぜ！』

「おはようロック君！」

『おう！』

現在時刻7時15分

「スバル君…まだ寝てるの？」

『ああ…コイツを起こすのは疲れるんだが…』

「いつもどうやっておこしてるの？」

『ひたすら絶叫だ…まあ、最終手段は一つあるが使うと怒られるからあんまり使いたくないんだよ…』

『あら？一体何するの？』

『拳で起こす。』

『そりゃ怒るわね…』

『だから最終手段だ。』

「起こすのにどれくらいかかる？」

『だいたい…20分くらいだな。』

「…ロック君、今日は私が起こすよ！」 『そうか！じゃあたのむ！』
と言ってウィザードオフした。

「スバル君！起きて〜」

「ZZZZ…」

「起きないね…よし…」

ミソラはスバルの鼻をつまんで頬にキスした。

「ZZZZ…」

「駄目か…じゃあ♪」

今度は唇にキスした。

「……………っ!？」

「あ、起きたあ？」

「ミソラちゃん…朝から心臓に悪いよ…」

で。

「おはよう♪お母さん。」

ミソラは上機嫌だ。

「おはよう…母さん…」

スバルはLOWテンションだ。

「おはよう。あら…スバル、顔真っ赤だけど何かあったの？」

「いや…別に…」

ちなみに大悟は朝早くから出勤したようだ。

で。

「あ…しまった…」

「どうしたの？」

「ミソラちゃんがボクの家に住んでるってバレたら委員長にどんな

目に会わされるか…」

「大丈夫だよ♪ちゃんと説明したらわかってくれるよ！」

「だいたいけど…それとボクらが付き合ってるってことは絶対に秘密でお願い…」

「なんで！？いいじゃん別に！」

「いや…ボクの命が…」

「ヤダ」

「いや、冗談抜きでお願いします…」

ピンポン…

「きた…内緒にしてね…お願いだから…」

ガチャ…

「「……………」」」

ルナ、ゴンタ、キザマロの三人は驚き過ぎて思考停止に陥っている。

「僕は夕べみて聴いたから知ってたけど…」

「俺は大悟から聴いた。」

「なんでスバル君の家からミソラちゃんがでてるのとおおおお！？」

ルナは黒いオーラを出しながら叫んだ。

「それはね、私がスバル君のお母さんに頼んだからだよ♪」

「そ、そうなの…。まあ、貴方達がこれ以上変な仲にならないならいいわ。」

「大丈夫だよ♪」

「ミソラちゃん……それだけは止めて……お願いだから……」

「私たち、付き合ってるから♪」

「何ですってええええええええええ！！??？」

ルナが黒いオーラをさらに出し、叫んだ。

ちなみにこのオーラをノイズ率で表すなら99.9%を超えてもはやエース、ジョーカーPGなしでファイナライズ可能な領域に達している。

ちなみにゴンタとキザマロは放心状態、ジャックは大爆笑、ツカサは「やっぱりね」と言いながら微笑んでいる。

『お取り込み中悪いが：お前ら急がないと遅刻するぜ？』

「ヤバい！」
「」
「」
「」
「」
「」
「」
「」
「」
「」

「」

続
く
つ
!
!

第九話 次の日の朝（後書き）

後書きルーム。今回はスバル君とミソラちゃんでさあ。

「またボくら？」

ああ。ネタが無かったんでな。

「ってことはネタが無いときは私たちが呼ばれるんだね…」

そーだな。

「で？どうするの？ネタ無いんでしょ？」

そーだな…ミソラちゃんは好きな音楽とかはあるか？

「私？ドリカムとかかな？」

ほお…いいねえドリカム。

あ、スバルには聞く気はないよ。

「何故に！」

お前どうせミソラちゃんだろうが。

「まあそうだけど…」

「作者さんは？」

俺はB・Zかアニソンかクラシックだな。

「クラシック聞くの？」

まあな

クラシックならカノンが一番俺は好きだぜ。

アニソンならWHITE REFLECTIONかLast Impression

B・Zならultra soulかもう一度キスしたかった

だな。

「ウルトラソウルなら聴いた事あるよ！」

だろうな。名曲だからな！じゃ。今回はここまで。さようなら！

第十話 色々すっ飛ばして（前書き）

…色々すっ飛ばしまくります…何やってんだろ俺…

第十話 色々すっ飛ばして

「ハア…ハア…ハア…ハア…な…なんとか逃げ切った…」

今日も学校は昼で終わりだ

で、なにがあったかというと

・スバルとミソラは男子（ツカサとジャック以外）とルナに質問責め。

・スバルは逃げる。無論ミソラ連れて。

・男子とルナの嫉妬ゲーMAX

・スバルを見つめるべく学校中を搜索

・ゆえにリアル・メタルギアソリッド状態

・なんとかツカサとジャックの助けにより脱出

という訳である

「ハア…ハア…ハア…ハア…も、もう動けないよ…スバル君…」

「何かスネークの大変さがわかった気がするよ…」

それもそのはずスバルが敵？の目をごまかすために使った手は

ロッカーに隠れる

ダンボール箱を使って隠れながら進む。

ホフク体制で進む

ダクトを通る↑え!?

といったメタルギア感満載の方法だった…

「あれ？スバル君…でしたよね…」

アリサがいた。制服なので中学校の帰りだろう。

「えっと…涼宮さんでしたっけ…」

「ええ…アリサでいいですよ。…随分疲れてますけど大丈夫ですか？」

「一応…大丈夫です…ちょっと学校がアウターヘブン化…いや…シヤドーモセス化しただけですから…ハイ…」

「いや、それ…かなりヤバいと思いますけど…」

「アハハ…」

「…まあ…大方、ミソラちゃんとの関係に質問責めにあってそれから逃げて学校がシャドーモセス化したってところでしょうか…？で、脱出できたのは戦友…じゃなくて友達の助けでってところですか？」

「「その通りです…」」

「……ま、まあ…頑張ってください。」

アリサは苦笑いしながら言った

「じゃあさようなら」

「「さようなら」」

で。

「「ただいま」」

「おかえりー。…二人とも随分疲れてりわねえ…何かあったの？」

「「お腹…空いた…」」

『ポロロン、茜さん、実はですね…』

「それは大変ねえ…（笑）すぐお昼ご飯作るわね。」

「うん…」

で。

「「いただきます」」

今日の昼ご飯はチャーハンだ。

余談だが、俺の得意料理もチャーハンだ。

閑話休題

で。

『……ここは、やはりダンボールに頼るか…ブツブツ…』
ウォーロックは明日からの対策を学校の見取り図をみて練っているのだろう。

ちなみに電波変換すりゃ良かったんじゃない？と思うかもしれない

が。隠れる場所がなくて電波変換する事が出来なかったうえに男子達が狂経脈を浮かび上がらせているのかのごとく通常の三倍以上のスペックを発揮していたので

トランスコード

と叫ぶと瞬時に飛んでくるので電波変換出来なかったのである。

「ウォーロック…何故に潜入する事を考えてるの…？」

『そのほうが楽しそうだからな。』

『やっぱりがさつねえ…。』

で。

色々すっ飛ばして

夜、

展望台

第十話 色々すっ飛ばして（後書き）

色々すっ飛ばしたので後書きルームもすっ飛ばしです。↑オイ！

第11話 展望台で（前書き）

そろそろアイツを…

第11話 展望台で

「ミソラちゃん…まさかずっとこのまま？」
「もちろん！」

え？今どう言う状況かって？
ミソラがスバルの腕に抱きついてるのさ。

そのまま展望台に向かう二人。

しかし…

「見つけたわよ…二人とも…!!！」

どう言う訳かルナがいた

「委員長！？なんでここにっ!？」

「窓の外を見たらアナタ達が見えたから出て来たのよ!!…さあて…ミソラちゃんとの関係を詳しく話してもらいましょうかねえ…!!！」

「は…はい…」

で。

二人で色々説明して…

「……そう…。」

「「……」」

「…スバル君…最後に確認しておくわね…貴方はミソラちゃんを絶対を守るのね？」

「うん…。」

「ミソラちゃんも？」

「うん。」

「そう…じゃあ…アナタ達のこと…認めるわ…そこまでなら…ね…。」

「ありがとう…委員長。」

「じゃあね…スバル君…ミソラちゃん…」

「うん。バイバイ…ルナちゃん。」

で。

「なんで…認めるなんだろう…」

（まさか気づいてなかったの…？ルナちゃんのコト…）

「わかんないや…」

（鈍感過ぎだよ…スバル君…）

「スバル君…鈍感にも程があるよ…」

「え…？」

「ルナちゃんはね！スバル君の事が好きだったのよ！」

「…え…ええええええええ！」

「ハア…鈍感だね…」

「すいません…」

「でも…私はスバル君のそんな所も好きだけどね♪／／／／／」
そう言ってミソラはまたスバルの腕に抱きつく。

「み、ミソラちゃん！／／／／／」

スバルは顔が紅くなっていく。

で。

展望台に着いて…

「「……………」」

無言で星を眺めていた。

「…いい雰囲気だから…こっそり帰ろう…」
いつの間にかアリサがいた。

「……あれ？アリサさん？」

ミソラが気づいて話しかける。

「……………」

スバルは夢中になりすぎて気づいてないが…

「あ…私帰りますよ…いい雰囲気みたいですし…」

「いえ、スバル君は夢中になりすぎて周りが見えてませんから大丈夫ですよ。」

「そ、そうですか…」

で。

「アリサさんは好きな人とかいないんですか？♪」

「…いる…いや…いた…かな？」

「え…？」

「どこにいるかわからないですよ…」

「どうして…？」

「わかりません…しかもその人と最後にあったのは七年前ですし…」
「……」

「でもね…彼は別れる少し前に…凄く格好いい事言っていなくなっちゃったんですよ…」

「一体どんな事言っただけで別れたんですか？」

星を眺めていたはずのスバルが突然尋ねた。

「スバル君…星を眺めていたんじゃないの？」

「ボクはある程度なら周りの状況を把握出来るからね。そんな事よ

り何て言ってくれたんですか？その人は？」

「俺達は必ずまた会える、だから待っている。って言ってくれました。」

「格好いい…」

「でも七年間も想い続けけるなんてよっぽどなんですね。」

「ええ…彼は私を助けてくれましたから…」

最後の方は聞こえないように言った

「…もう結構遅いですけど大丈夫ですか？」

「「あっ！！さようなら！」」

二人は走って帰った。

「ハア…本当にどこにいるのよ……………デュオ…」

「アリサ…」

「……………！！」

続く!!

第11話 展望台で（後書き）

後書きルーム。今回はスバルとウォーロックでさあ。

「ハアアアア…」

どうしたあ…もしかして学校がシャドーモセス化したことか？

『だろうな。』

「どうしよう…」

…麻酔銃Mk2 Pistoolがあるけどつかうか？

「銃なんて使い方わかんないし…」

教えてやろう。

敵に狙いを付けて引き金をひく。そしてサプレッサー組み込み式だから手動で排弾をする。それだけだ。後、弾は∞だ。

「一応貫つとくよ…」

まあMGS1、2でもやれよ…そしたらヒントがアルかもしれないぜ。

「作者さんMGS2持ってないでしょ…1は有るみたいだけど。」

いや、YouTubeで全部見たし。

まあ頑張ってくれ。

そろそろバトルが始まると思います。

『やっど電波変換か。長かったな。』

ではさようなら

第12話 再会（前書き）

…どうぞ…

第12話 再会

……俺は……彼女に会わない……

いや……

会えない……

七年間もほっといたんだ……

会えるわけがない……

愛想つかされてる……

そう思っていた……

けど……

今日

彼女の言ったこと…

俺が別れる前に言ったセリフを覚えていて…

七年間俺を想い続けていたこと…

それを俺は聞いてしまった。

そして…

彼女がちゃんと他人を信じられるようになったこと…

そこに俺は安心した…

そして彼女は俺の名をつぶやいた

「デュオ…」

「アリサ…」

俺は思わず話しかけてしまっていた。

「……!!」

彼女は驚いているようだ。

「デュオ……」

アリサは涙目になりながらその名をいった

「……すまない……。」「
デュオはあやまった。」

「バカ……何時まで待たせるのよ……」

「……愛想つかされてると思ってたからな……」

「そんな事ないわよ……絶対に……」

「ああ……さっきの話……聞こえたからな……」

「嬉しいよ……また……貴方に会えて……」

「すまなかった……」

「謝らないで……貴方から会いに来てくれた……それで……それだけで……」

アリサはデュオに抱き付いて泣き始めた……

「そうだ……まだ七年前のお礼……ちゃんと言ってなかったね…………ありがとう……デュオ……」

「……どういたしまして……。」

二人は抱き合った……

しばらくして二人はベンチに座った

「ねえ…デュオ…貴方は今、何をしてるの？」

「昔と同じさ…変わったのは…一人になったただけだ…」

「やっぱり世界中を旅をしてるんだね…」

「ああ…」

「…あの時一緒にいた人はどうしたの？」

「アインか…アインは…死んだ…」

「…どうして？」

「お前とわかれて二年位…南米あたりでだな…伝染病にかかったまま…
つてな…ワクチンを打ったんだが…手遅れでな…死んじゃった…
まあ仕方ないさ…」

「…そこからずっと一人…？」

「いや…俺はコイツと出会った…」

『ゼロだ…よろしく…』

「そう…」

「お前は今は何をしてるんだ？」

「普通の生活よ。学校に行ってるの…でも一人で暮らしてるの。」

「どうして？」

「私がパパとママに言ったの。」

「そうか…大変だな…」

「デュオ程じゃないよ。だから全然平気。デュオはどこに住んでるの？」

「テント生活だ。」

「…ねえ…だったらウチに来ない…？」

「…迷惑でないなら…しばらく…よろしく頼む…」

「しばらく…じゃなくて…ずっと…ずっと一緒に…／／／／／」

「……………」

「い、行こう！こっちだよ！」

「ああ…」

第二章に…

続く…

第12話 再会（後書き）

第一章…完結…という訳で…第一章を振り返って…

まず、スバル達。

キャラ崩壊を前提に書いてきましたが…大丈夫でしたでしょうか？
作者はスバミソ派なのでこうしました…

てか…ほとんどスバルとミソラと……しかでてませんが…しかも
で。

で何とかつないだりするという強引な方法を用いてしまいましたが
…すいません…ずっとこれはつかいます…

ストーリー展開は早いんだか遅いんだかわかりましたね…

デュオとアリサについては小説の構想をしてるときに思いついた二人
なんです。そして二人はスバル達と絡んで行ってもらいます。

もう一人の主人公とか言いながらわずかに二話しかデュオの出番が無
かったのはあえてなんです…実は…ね…

二人の過去はまたいずれ書いていつて、それだけで章一つ使う予定
です。

おそらく第三章か第四章になると思います。

ちなみに途中で出てきた“アイン”と言う名前ですがこれはドイツ語で1を意味します。

まあ“デュオ”も二重奏という意味があるんですけどね。

さて、そろそろ第二章の予告をしますか…

まず戦いが始まります。

あまり長いわけではありません。

そして変化が色々起こります。

では…第二章でお会いしましょう…さようなら…

【第二章・復讐鬼】第一話 学校で（前書き）

第二章です

【第二章・復讐鬼】第一話 学校で

今は4月中頃

昼休み

スバル達は昼ご飯を食べている

「そうだ！みんな、ゴールデンウィークの初日って空いてる？」

「私は空いてるわよ。」

「俺も空いてるぜ！」

「僕も大丈夫です。」

「僕も空いてるよ」

「俺は解らん、WAXAの仕事があるからな。」

「ゴールデンウィークの初日にね、ライブがあるの、だからねみんなに来て欲しいの。」

「わかったわ！みんなも行くわよね！！」

「「「もちろん！！」」」

「俺は暁に休み貰えるかきいてみる。行けるかは”スバルに”連絡する。」

ジャックは何故か“スバルに”を強調して言った

「何故にそこを強調するんだよ…？」

「細かいことは気にすんな。」

ドオオオン!!

「何だ!？」

『スバル!電波ウイルスが暴れてるぞ!それも200体以上はいる!!』

「なんだって!!」

『ゴタゴタ言ってる暇はねえ!行くぞ!』

「うん! トランスコード! シューティングスターロックマン!」

「トランスコード! ハープ・ノート!」

「トランスコード! オックス・ファイア!」

「トランスコード! ジェミニ・スパーク!」

「トランスコード・ジャック・コーヴァス!」

「あれ:なんでジャックが電波変換出来るの?」

「ああ、ヨイリーの婆さんにコーヴァスを再構築してもらったんだ。」

『そう言う訳だ。つと、くるぞ!』

電波ウイルスがこちらに気づいて突っ込んできた。

「いくらなんでも…」

「これはさすがに…」

「お:多すぎでしょ…」

読者の方にだけ明かすが、ウイルスは全部で346体、え?数の意味?特になし。思いついたからです。

閑話休題

続
く
っ
！

【第二章・復讐鬼】第一話 学校で（後書き）

後書きルーム。今回はスバルとウォーロックでさあ。

『H A H A H A H A !』

「ウォーロック：テンションおかしいよ…」

『H A H A H A H A ! バトルD A !』

どうやら戦闘狂と化したようだな…

「元からだけどね…」

粛正が必要だな…

「よろしくお願いします…」

またコイツを斬るとはな…

「殺さない程度で…」

行くぜ！飛天御剣流、龍巻閃・旋、木枯、嵐！

『ぐはあっ！』

「速いっ！見えなかった…」

安心しろ、峰打ちだ…

「これでまともになるかな…」

多分な。

『あれ？俺は何を？』

「まともになったね」

じゃ、今回はここまで。さようなら！

第二話 戦闘（前書き）

THE 戦闘！

第二話 戦闘

「ロックバスター！」

ロックマン達は撃つなり斬るなり殴るなりそれぞれ応戦しているが一向にウイルスは減らない。

「と言うか…なんか増えてる気がするんだけど…」

「ジャック！ 暁さんはまだ！？」

「知らん！ つかまだ呼んで10分もたってねえぜ！」

『マジかよ…』

「キャアアアア！！」

「っ！ ミソラちゃん！」

ミソラがウイルスに連続で攻撃を受けている。

「ミソラちゃん！」

「スバル君！ ミソラちゃんのところに行って！ ボクらが道を切り開くよ！ ヒカル！ いくよ。」

『オウ！』

「『ジェミニサンダー！！』」

ジェミニスパークは両手を組んで極太の電気を放った。

「いまだよ！」

「ありがとう！ ツカサ君！」

「オイ！ こっちも頼む！ 手をかしてくれ！」

ゴンタが囲まれているようだ。

「ペインヘルフレイム！」

紫色の炎が飛んでいき、ウイルスをデリートする。

「いててて！ 俺にも当たってるぞ！ ジャック！」

「あ、悪い。」

「誰を撃ってる！ふざけるなああ！」

と、どっかの新世界の神のセリフを吐きながら抗議するゴンタだった。

で

「ミソラちゃん！くそっ！バトルカード！エアスプレッド！」

敵にヒットした攻撃が拡散し周囲のウイルスをデリートする。

「ミソラちゃん！大丈夫！？」

「う、うん…ゴメンね…」

『スバル！ミソラ！避ける！』

「え？うわぁ！」

ウイルスが一斉に攻撃してきた！

「バトルカード、オーラ！」

間一髪スバルがオーラで攻撃を防いだ。

「今の内に…」

ビキッ オーラにひびが入った

「ヤバッ…」

ビキッ

さらにひびが大きくなる

「うおおおおっ！」

ギリギリのところでオーラが割れる前にミソラを抱きかかえて脱出した。

しかし…

『スバル！後ろだ！』

「え！うわあああ！」

ウィルスが真後ろから至近距離から攻撃を放つ！
スバルはミソラを守るようにして…

続くっ！！！！

第二話 戦闘（後書き）

超いいところで切る俺（笑）

え？後書きルーム？ネタ切れだからすっ飛ばし

第三話 零（前書き）

ゼロの武装が3つしか思い出せない…

第三話 零

スバルはミソラを守り…攻撃を……………

受けなかった。

「え…？」

ウイルスはデリートされていた。

そしてそこには…

赤いと黒の体…黒く、長い髪…手には薄い緑の剣を持った電波体がいた。

顔はうつむいてるのでうまく見えない。

「え…？」

その電波体は手にした剣でウイルスを超高速で斬り始めた…だが…

「全く見えねえぜ…」

「なんだ…アイツは…」

「でも…敵では無さそうだね…」

ドンドンウイルスはデリートされていく、しかもその電波体の剣の太刀筋が全く見えないのだ。それほどまでに速いのだろう。

「凄い…もうほぼ全滅…」

「……………」

「あ、あの…」

チャキッ

赤い電波体は何も言わず左手にハンドガンのような武器を構えてスバルたちに向ける。

「っ!!」

スバルたちは身構える。

バシユン!

ハンドガンのような武器からエネルギーが撃ち出された。

そして

真後ろにいたウイルスに当たった。

「え…」

「……………」

何も言わず、スバルたちを見る赤い電波体。

「あ…あの…」

「オイ…」

「え？」

「ここ…どこだ…？」

「……………え？」

続くっ！！

第三話 零（後書き）

えー…ゼロの武装がゼットセイバーとブラスター？とゼロナックルだっけ？4でそんなのがあったような…敵の武器を奪えるやつだったはず…あと槍？みたいなのとワイヤー？みたいなのとあったはず…名前分かんないけど…

と言うことでわかる方…教えてください！お願いします！感想でもメッセージでも何でもいいんで！よろしくお願いします！

第四話 思いつかないからサブタイトルはすっ飛ばし（前書き）

特にないのですっ飛ばし

第四話 思いつかないからサブタイトルはすっ飛ばし

「……………どこだ……………?」

「え……………?」

で。

「えーと…つまり…ごく最近この街に来て…」

「散歩に出かけたら…」

「道に迷って…」

「仕方ないから電波変換してウェーブロードから帰ろうとしたら…」

「余計に道にまよった…」

「そうだ。」

「そんな事より…」

「「「「何で電波変換できるんですか!?!」」」」

「まあその辺はあとで説明するとしてだ。本当にここコダマタウンの何処なんだ?」

「えーと…その前に電波変換を解除しませんか?」

「ああ、それもそうだな。」

で、電波変換を解除したソイツは…

長い黒髪に詰襟の牧師服のような服を着た少年、デュオだった。

「まず何処か目印になる物がありますか？」

「……展望台からなら帰れるな。」

「展望台はここから………」

「なるほど、そっちな。逆行ってたな…俺………」

で、

「ありがとう。じゃ、またいつか会おう。」

「はい、さようなら…」

で。

「おゝい…お前ら大丈夫かゝ?」

「暁さん! 遅いですよ!」

「すまん! 来る途中で大量のウイルスに襲われてな! …ってかお前ら…助けを頼んで自分たちで全滅させてんじゃねえか…」

「あゝこれはですね…:…ってことなんですよ…:…ってあああああああああ! …! 何で電波変換出来るかと名前聞くの忘れたあああああああ! …!」

『ですが…凄まじい残留電波が残ってますね…:残留電波で弱いウイルス並はありますよ…:』
とアシッドが分析結果を言う。

「スバル、ソイツの特徴を教えてください。

「はい、まず…髪が長いです…かなり…:色は緑がかった黒、服は…黒い…詰襟の…何て言ったらいいのかな…:まあそれぐらいですね…」

「わかった。サテラポリスに戻って調べてみる。」

「分かりました。お願いします。」

「それと、明日確か土曜日で学校休みだろ? だからみんなを連れてWAXAに来てくれ。あと、もしソイツがみついたら連れてきてくれ。」

「わかりました。」

続くっ!!

第四話 思いつかないからサブタイトルはすっ飛ばし（後書き）

やっぱりすっ飛ばし

第五話サブタイトルは特にない…以下略（前書き）

必殺！すっ飛ばし！

第五話サブタイトルは特にない…以下略

「どうしてあんなにたくさんウィルスが発生したのかな…」

「確かに気になるね…」

「そうだな…その辺は俺が調べとくよ。」

「よろしく頼むよ。ジャック君」

「そんな事よりアイツは何者何だ！」

「確かに…あれだけのウィルスを二分くらいで全滅させてしまったからね…ただ者じゃあない事は確かだね…」

「でも…私達を助けてくれたから少なくとも敵ではなさそうだね！」

『しかし…何というか…殺気のような物はあまり感じなかったな…』

「そうなの？」

『ああ、あれだけ激しい戦いで殺気を感じなかったのは変だ。』

「よくわかんないや…」

で。学校終わって。

「さて、みんな帰るわよ！」

で、帰り道

「悪い、今日はちょっと急ぐから俺、電波変換して帰るわ。」
「ん、バイバーイ。」

「オウ！じゃあな！トランスコード！ジャック・コーヴァス！」
ジャックは飛んで行った。

「それにしても皆さん大丈夫でしたか？」

「うん…」

（私はスバル君とあの人に助けてもらわなかったらちょっと危なかったかも…）

「まあ…ね…」

『デュオ…そう言えばさっきの奴らに電波変換出きる理由を聴かれてなかったか？』

「……わざわざ言う必要も無いだろう。」

『お前…忘れてただろう…』

「まあな…またいつか聴かれたら話せばいいだろう。まあ向こうが忘れてくれる事に越したことはないが。」

『ほっとけば忘れるだろう。それまで家で大人しくしとけ。』

「だな。」

ちなみにこの二人は大量のウイルスを瞬殺したことは何とも思っていないので忘れる事など不可能だが忘れてくれると思いついてる。さらに言うなら殺気を感じなかったのも何とも思っていないからであ

る。

……ある意味バカである。

で。

「「ただいま」」

「おかえりー。」

続くっ！！

デュオ「何か…区切るところおかしくないか？
気にすんな。」

「『了解』」

第五話サブタイトルは特にない…以下略（後書き）

デュオについての補足1

性格など

他人と感覚が少しズレている

若干間抜けなところもあり

以上

第六話 オーバーヒート（前書き）

頭が…

第六話 オーバーヒート

「……………」

「……………」

スバルとミソラは宿題をやっている

「……………？ スバル君…ここわかんないんだけど…」

「どれどれ…これはね、こうして…」

「なるほど！ ありがとうスバル君！」

スバルはミソラに教えながら宿題をやっている。ちなみにスバルの成績は35人中10番位にはいるので結構賢い。

ミソラは15番位だ

さらにトップ3はルナ、ジャック、キザマロの三人である。

ツカサはスバルと同じ位、

ゴンタは…ほぼ最下位である。

閑話休題

「「終わったあゝ」」

「うゝん…」

ミソラは伸びをしている。

「……………」

スバルはミソラに見とれていた。

『スバル君、ミソラに見とれていたでしょ。』

「へっ!?! いや! そんな事は…」

『スバル…声が裏返ってるぞ…全く説得力ないな…』

「うっ!…」

『で? 見とれていたの?』

「…:はい／／／／」

「もう…スバル君…／／／／」

ミソラはスバルに抱きついた。

「っ!／／／／／」

スバルは顔が真っ赤だ。

「フフフ…」

「ミ、ミソラちゃん…／／／／／」

「何?」

「その…出来れば離れて欲しいんだけど…／／／／／」

「何で? 私のこと嫌なの?」 (涙目、無論演技)

「い、嫌じゃないけど…」

「けど?」

「は…:恥ずかしくて…」

「そろそろ慣れてよ」

「そう言われても…」

『完全にノックアウトだな…（笑）』

「どうしよう…」

『休憩させてあげれは？』

「そうだね…」

で。一時間くらいたって

「あれ…？ボクは一体何をして…！！／／／／／」

スバルは先ほどの事を思い出し、顔が真っ赤になった。

「…ミソラちゃんは？」『ミソラなら下だぜ。』「あ、ウォーロック、ボクは一体どうなったの？」

『ミソラに飛びつかれて、恥ずかしさで脳がオーバーヒートして気絶してた。』

「や、やっぱり？」

『……と言うのがハープの見解だ……しかし！！実際は違うっ！！』
「へ？」

『お前はミソラに飛びつかれた時こけたな！』

「うん。」

『その時お前は後頭部を床に打ちつけた！俺はみたっ！それが真実だ！』

「確かに後頭部が痛い…」

『あの二人は気づいてなかったがな。』

「ウォーロック…このことはミソラちゃんや母さんたちには内緒に…」

『何で？』

「ミソラちゃんが聞いたら何か悲しくなりそうだし…母さんにバレたらからかわれそうだし…」

『わかった。』

「ウォーロック…何故ニヤけてるの…?」

『（なにっ!?）そ、そんなことないぜ!』

「母さんに言おうとしてたでしょ…」

『くっ…よく見破ったな…』

「引っかったね…ウォーロック!」

『なんだと…』

「フフフ…」

『くっ…』 「スバル君…」

「!ミソラちゃん…今までの話…」

「う、うん…ゴメンね…」

「……………」

「……………」

『……………』

『……………』

THE・沈黙…

続くっ!

第七話 ニヤニヤ（前書き）

ニヤニヤ

第七話 ニヤニヤ

「す、スバル君…頭…」

「あゝ…大丈夫だよ。（ちよつと痛いけど）」

「そう…ゴメンね…」

『（暗い！この状況を打破するいい方法は……くそっ！考えろ俺！）』

で。

『（仕方ない…意味なさそうで怒られそうだがやるしかねえ！）スバル！』

「なに？」

『布団が…吹っ飛んだっ！』
と言って布団を投げた

『「………………。」「』

『何つままないこと言ってんのよあんたはああああ！！』
バコッ

『ガハッ！』

「ウォーロック…流石にそれは…」

「無いと思うよ…」

『暗い雰囲気はどうにかしようとしたんだ!』

「全く…」

「スバル君：ゴメンね：やっぱりいきなり飛びついたのはやりすぎたね。」

「ボクもなれなきゃだめだよ。」

「え？うわぁ！」

スバルはミソラを抱き寄せた。

「：／／／／／」

「：／／／／／」

「ありがとうスバル君／／／」

「どういたしまして／／／／／」

「フフフフフフフフ：いいものを見せてもらったわ〜♪」（ニヤニヤ）

「「……………!!!!!!」」

スバルはミソラを抱き寄せているところを茜に目撃された（笑）

「やるなあ！スバル！」（ニヤニヤ）

いつの間にか大悟も帰ってきていた。

「「じゃ、ごゆっくり〜」」（ニヤニヤ）

「あ！晩御飯出来てるからね〜」（ニヤニヤ）

「どうしよう：今行ったら確実にからかわれる…」

「でも晩御飯食べないとね…」

「ボクはいいや：あんまりお腹減ってないからね…」

「私も…」ぐ〜

「…ミソラちゃん……」

「仕方ない…二人で行こう……」

続くっ!!

第八話 展望台で… 以下略! (前書き)

何かながい?

第八話 展望台で… 以下略!

「はああああ…」

二人は凄まじい溜め息をつきながら展望台に向かって歩いている。

「全く…勘弁してよ…母さん…」

二人は晩御飯を食べながら茜に凄まじくからかわれた。大悟は終始ニヤニヤしていた。

「精神的に疲れちゃったよ…」

「うん…」

で。展望台に

「ん? 誰かいるみたいだね。」

「ホントだ…ん?」

「…何か見たことあるような…」

「あーーーーーっ!!」

「うん?なんだ?」

そこにいたのは長い黒髪の少年、デュオだった。

「ああ…昼間の…あの後ちゃんと家に帰れた、助かった。」

「どういたしまして…ってそんな事より!色々聴」断る

「速っ!」

「じゃあWAXA」断る。WAXAには行かん。」

「って何でわかってるんですか!」

「適当に言っただけ。」

「……………」

『オイテメエ!何故あの時殺気が無かったんだ!?!』

「……?…ああ…昼間な…いちいち殺気を出す必要ないだろう、ウ
イルスに。」

「半端ない数でしたけど!?!」

「そんなもんなのか?」

「じゃどうして私達を助けてくれたんですか?」

「人を助けるのにいちいち理由が必要か？」

「何で電波変「その質問は断る」」

「じゃあ名前は？」

「デュオ」

「貴方のウィザードは？」

『ゼロだ。』

「じゃあ何処に住んでますか？」

「テントで旅をしている。」

「デュオ」

「！！アリス…タイミング悪…」

「あ、スバル君にミソラちゃん。こんばんは」

「「こんばんは…もしかして…お二人は知り合い…」」

「そうですよ。この前に話ませんでしたっけ？」

「もしかして…七年前に別れた人って…」

「デュオのことですよ。」

「じゃあもしかして…住んでるのは…」

「私の家ですよ。」

「お前…せっかく面倒事を回避するためについた嘘を…」

「え？私、何か悪い事しちゃった？」

「…面倒事ができた……」

「えーと…デュオさん…明日WAXAに来てもらえませんか？」

「駄目だ…明日は予定がある。アリサの買い物について行かねばならない。」

「要するにデートに行くんですね♪」

「と言うかデュオのふくを買うんですけどね。」

「何故に？」

「俺はこの服ともう一つのパターンしかないからな。」

「ちなみにどんな服ですか？」

「濃い緑のタンクトップにジーパンとGジャンだ」

「……………」

「どこのWガンダム0パイロットですか…」

「服買いに行くから明日は駄目だ。」

『あ、でも買い物終わってからならいいんじゃない？』

「そうね、バタフライ！」

「お前ら……」

「ボク暁さんに聴いてみるね。」

で

「どうしたスバル、ミソラ。二人でいちゃついてるのを自慢するための電話か？（笑）だが俺は嫉妬しないぜ」クインティアがいるからな！」

「シドウ！／＼／＼」

「ティア」顔真っ赤だぞ」

クインティアと言うのはジャックの姉であり元ディーラーのメンバーだがジャックといっしょに出てこれた。電波変換でクイーン・ヴァルゴになる。

「暁さん…あの…結構真面目な話なんですけど…」

「そうか。そりゃ悪かった。で？用件は？」

「実は……」

すっ飛ばして

「あゝ別に構わんよ。無理に明日ではなくても明後日でもいいしな。」

「ちょっと聴いてみます…」

「デュオさん、明後日は大丈夫ですか？」

「別に構わんが面倒事はとっとすませたいから明日で。」

「だ、そうです。」

「わかった。じゃあお前が迎えにいつてくれるか？」

「わかりました。」

「じゃ、そーゆー事で。じゃあな。」

「はい。さようなら。」

「何時くらいなら大丈夫ですか？」

「そうですね：朝から行くから：三時か四時くらいには帰ってきて
ると思います。」

「どこにデートに行くんですか？」

「いや：デートではないんだが：」

「スピカモールです。」

「じゃあボクがスピカモールまで行きますよ。」

「私も！」

「わかった：」

で。

続くっ！！

第八話 展望台で… 以下略！（後書き）

デュオの服の別パターン…わかる人にはわかるネタ。

答えはヒロ・ユイです。

さらに言うならEndless Waltzのヒロ・ユイです。

第九話 カップル？（前書き）

何か戦闘すくねえな…

あ…多分第二章は長くなるかもしれません…

第九話 カップル？

展望台で

「で：俺はいつまでこうなっていればいいんだ…？」

「まだ5分しかたってない。」

「……………」

どういう状況かって？

デュオがアリサに抱き付かれてるのさ

「ミソラちゃん…まさかずっとこれ？」

「そうだよ♪」

こっちもスバルがミソラに抱き付かれている

「「はああああ…」」

二人の男は溜め息をついた

「「何で溜め息つくの！」」

「俺が疲れる…（精神的な意味で）」

「恥ずかしいから…」

「ミソラちゃん、時間も遅くなってきたから帰ろっか。」

「うん！」

「じゃあさようなら」

「さようなら。」

で。

「ただいま」

「「おかえり」」（ニヤニヤ）

「…二人ともずっとニヤけてるよ…」

「そう?」

「そうか?」

で。

「スバル君、寝よう。」

「また…一緒に?」

「もちろん! ♪」

「……………」 ↑もはや返す言葉がない

「さ、寝よ!」

「はい…」

「あの…ミソラちゃん?」

「何？♪」

「何で引っ付くの？」

「いいじゃん！別に♪」

と言って今度は抱きついた。ちなみに二人は横を向いて寝ていたの
でミソラは正面から抱きついた事になる

「み、ミソラちゃん……／＼／＼／」

「スー…、スー…、スー…。」

「っってもう寝ちゃったの！？」

その後スバルはなかなか眠れなかったとき。

「おい…ゼロ…何故俺の布団がないんだ…？」

『アイツがどっかに持って行ってたぞ。』

「何故に…？」

『知らん。』

「寝袋があるからいいか。」

「デュオ…その…い、一緒に…寝ない？」

「……お前…初めからそのつもりで布団隠したな…」

「…やっぱりバレた？」

「分かり易すぎる。」

『（最初は分からなかっただろ…って当たり前か…）』

「とにかく！一緒に寝よう！」

「……………」

『あー！もうじれったい！アリサ！連れて行っちゃいなさい！』

「うん！」

「ちょ…」

デュオの手を握りしめて、デュオをベッドに引きずって行った。

「さ、寝よう！」

「わかった…（逆らえないな……有無を言わせないオーラが出ている…）」

「何故抱きつく…」

「別にいいでしょ…七年ぶりだし…」

「…それを言われると、逆らえない…。」

「デュオ…」

「ん…？なん…！」

デュオはアリサに突然キスされた。

「七年ぶりのキス…か…」

「そうだよ…これで二回目だね…」

「ああ…」

続くっ！！

第九話 カップル？（後書き）

後書きルーム。デュオを呼んでみました、。

「……………」

……………。

作者（話題がねえええええ！）

「……………阿呆が。」

…………お前…アリサにひたすらいじられるように仕向けるぞ…

「好きにしろ。」

ラブラブだから悪くは無いつてか？

「……………」

チャキッ

冗談だ…悪かった…だからSOCOMを構えるな。

「お前も刀を抜くな…」

……………。

「……………」

次回に続く!!!

「無理やり逃げたな…」

第十話 WAXAで……andデート？（前書き）

明日から高校の授業開始…更新速度超低下確率100%…

「スバル君からキスしてくれるなんて…／／／／／」

「いや…今のはたまたま…／／／／／」

「恥ずかしがらなくてもいいのに…／／／／／」

「いや…そういう問題じゃ…」

「ま、いっか♪早く着替えてね♪今日はWAXAに行くんだから！」

「うん。」

現在時刻AM 5:30

「……………」

デュオが目を覚ました

「…流石に寝てるか…」

アリサを起こさないようにベッドから降りた。そして服を着替えるために自室（元空き部屋）に向かった。

ちなみに服は詰め襟の牧師服のようなこの死神ガンダムパイロットだ！と言う服ではなく、濃い緑のタンクトップにジーパン、にGジャンとどこのWガンダム0パイロットだ！と言う服だ。

ガンダムパイロットと言う言葉がやたら出てくるが気にしないで欲しい。

閑話休題

「アリサが起きるまで待つしかないか…朝食には早すぎる…」

で。

「あ、デュオ…おはよう。」

「ああ…おはよう…」

「あれ…朝ご飯…」

「俺が作った。」

朝食はハムに目玉焼き、サラダにコーヒーだった。

「じゃあいいただきまーす…」

「ああ。」

「…すごく美味しい！」

「そりゃ良かった。」

で。

「そろそろ行こっか♪」

「ああ。」

「じゃあ行こっか♪スバル君♪みんなも行ってるだろうし。」

「うん。じゃあ電波変換で…「ダメ！ウェーブライナーで行くの！」」

「なんで？」

「そのほうがカップルみたいでしょ♪」

「わ、わかったよ…」

で。

現在時刻 9 時 0 0 分

「あ、スバル君、あれって…」

「うん…デュオさん達だね…」

「早く来ないかな…」

「もうすぐだ。」

で

「ここか…スピカモールと言うのは…」

「そうだよ、…実は私も初めてなんだけどね…」

「……道に迷わんだろうな…」

「大丈夫！さ、服見に行こう。」

「ハイハイ…」

一方スバル達は…

「やっとWAXAについた…」

何か疲れてるスバル

理由は簡単

電車内でミソラに抱き付かれていたので周りの視線が痛かったから精神的に疲れたのさ。

「遅かったなスバル（笑）」

「ジャック…何故に笑ってるの…？」

「細かいことは気にすんな。」

で。

「よし、全員揃ったな！…ってまだ一人来てないか。」

「？誰か来るんですか？」

ツカサはデュオが来る事を知らないので誰か分からなかった

「ツカサ君、昨日のあの人だよ。」

「あの人見つけたんだ。」

「うん。」

「さて…そろそろ本題に入るか。」

「」「はい。」「」

「まず、大量に発生したウイルスの事だ。……どうやら自然発生した訳ではないようだ。」

「厳密にはあの場所で発生していないということよ。」

「ってことは…誰かが捕まえたりしたウイルスを意図的に放したってことか…?」

珍しくゴンタが鋭い。

「そうだ。俺と姉ちゃんて調べた所、あの周囲でウイルスは発生した形跡は無かった。」

「もう一つ、凄まじい残留電波が残っていたわ…」

「まあ、それはアイツの残留電波だろうな。アシッドも言ってたし。」

「まあ、問題は誰が、何のために、ウイルスを大量に放出させたか、だ。……と言っても何も残ってないから調べようがないがな。」

「そうですか…」

「まあ…全員十分注意してくれ。それと…同じ事態が起こった時の対処だが…それを考えるのは夕方になる。」

「わかりました。」

「それまでは一旦帰るなり、ここにいるなり自由にしてくれて構わない。」

「どうしようかな…」

「二人で遊びに行ってきたら？」

「ツカサ君…流石にそれは…」

「いいぞ、行ってこい！」（ニヤニヤ）

「何言ってるんですか暁さん…」

「行ってくればいいわよ。私もシドウと行きたいぐらいだし…」

「（で、その時は俺に仕事全部押し付けるつもりだな…暁と姉ちゃん…）」

「じゃあ行こう♪」

「わかったよ…」

で。

「何処に行くの…?」

「スピカモールに行こう♪。そのほうが早いでしょ?」

「まあ…そうだね…」

「じゃあ行こう♪」

続くっ!!

第十話 WAXAで……andデート？（後書き）

明日から更新速度超低下します……すいません……高校の授業開始なん
で……しばらくしたら多分部活もやるのでさらに低下……最悪だな……

第11話 Wデート? (前書き)

なんとか更新…

第11話 Wデート？

まずはデュオ and アリサ視点

二人はいまデュオの服を見ている

「これと、これと…」

「……………」

ほぼアリサが服をデュオに渡して似合ってるかみて決めている
理由は簡単

デュオが「俺に服の事を言われてもよくわからんから任せる」

と言ったからである

「ねえ、これ着てみてよ」

「わかった。」

手渡された服は…

薄い紫のワイシャツ

紺色のベスト 薄いオレンジのズボンだ。

「……。」

「なかなか似合うね。」

「そうか？」

「じゃあ次はこれを着てみてよ」

つぎは…黒いトレーナーにグレーのズボンの2つだ

「似合ってるね！」

で。

「……………。(金が……………)」

「ホントに良かったの？やっぱり私が出したらよかったかな…」

「大丈夫だ…」

「そろそろお昼ご飯食べようか。」

「ああ…」

スバル and ミソラ視点

「ねえスバル君。まずはどこ行こうかな？」

「そうだね…とりあえず歩いてみようよ。」

「そうしょっか♪」

「あ…これいいなあ…」

「どれどれ？」

そこにあっただのは…

蒼い流星とピンクの流星に小さな音符をかたどったペアネックレス
だった：

「いいね！これ…」

「ねえ…スバル君？これ…あんまり高くないから二人で買わない？」

「うん！」

で

「あ！ミソラちゃん、よく考えたらボクたちが付き合って初めての
デートだね！」

「ホントだ！」

「じゃあこれは記念だね！」

「そろそろお昼ご飯食べよっか！」

「うん、ボク、お腹空いたよ。」

「私も！」

で

「あ…」

「あ…」

「随時速いな…」

「いや…時間が夕方まで時間が余ったので…」

「デートにきました♪」

「なるほどな…」

「私達は今からお昼ご飯食べに行くつもりなんですすがもし良かったら一緒にどうですか？」

「じゃあお願いします。」

「何食べに行きますか？」

『俺は和食を希望する』

『アンタはだまってなさい！』

ボコッ

『ガハッ！』

「ウォーロック…いきなり出ないでよ…」

『すまん…』

「じゃあ…せっかくだから和食にしましょう！」

「俺もそれを希望する」

で。

「………」

「……!!……」

「……!」

「みんなどうしたの? 食べないの?」

「ちょっと……」

「それは……」

「食い過ぎだろう。」

「? そんなことないですよ。」

テーブルの上はほぼミソラの注文した料理でいっぱいだった。

で、三人はかなり驚いた。

……約一名冷静なのがいるが……

で

4人はスピカモールをいろいろ見て回って…

『そろそろ時間だ。』

「ああ……わかっている。」

「アリサ…お前は先に帰っている…」

「わかった…なるべく早く帰ってきてね…」

「ああ…」

「そろそろ行くか。」

「はい。」

で。相変わらずいろいろすっ飛ばして

WAXAへ：

続くっ！！

第11話 Wデート? (後書き)

デュオが購入した服…

相変わらずわかる人にはわかるネタ

答えは最初がカトル、あとがトロワの服です

五飛はちょっと難しいな…アレンジしないと…

第12話 WAXAで：

「暁さん、連れてきました。」

「…デュオ…です。」

「俺は暁シドウ、サテラポリス遊撃隊隊長をしている。よろしく。」

「…はい。」

で。何やかんやで全員の自己紹介も終わって。

「で…今後の対策だが…」

「難しく考える必要はない。なあ…ゼロ。」

『ああ…………。』

目の前に敵が現れたなら…………たたき斬るまで…』

「まあ…全員注意しながら普段通りの生活を送ってくれば問題ないだろう。…今のところはな。」

「基本俺とゼロがウイルスなどは対処する。もし強力な電波体が現れた場合、他のメンバーで対処してくれ。」

「オイオイ…いくらなんでも一人でウイルスをほぼ全て対処は厳しいだろう。」

「…俺の得意戦術は1対多数だ…一人の方がやりやすい。味方を巻き込まないしな。」

「……まあ…全員臨機応変に動いてくれ…敵がだれで何の目的かわからないからな。」

「「「「「了解！」」「」「」「」」」」

「じゃあこれで今日は解散！あ、スバルとデュオはヨイリー博士の所へ行ってくれ。」

で。

「ようこそスバルちゃん、と…はじめましてね。」

「…はじめまして…デュオ…です…。」

『ゼロだ…』

「よろしくね。さっそくだけどね、ゼロを貸して欲しいのだけれどいいかしら？色々解析したいのよ。」

『…デュオ…』

「……………」

デュオは目で返事した

「どうぞ…なるべく早くお願いします。」

「ありがとうね。」

「あの〜何で僕が呼ばれたのでしょうか…」

「あ、そうそう、スバルちゃんに新しいPGMを渡したいのよ。はい、これ。」

「これは…」

「名前は流星PGM。エース、ジョーカー、両方のPGMの機能が入っていて、流星サーバーの残留電波を組み込んであるからサーバーなしでファイナライズとノイズチェンジが出来るわ。ちなみにサーバーは流星PGMそのものがサーバーになってるし、サテラポリスに本体サーバーがあるからちゃんとカードも送られてくるわ。」

「ありがとうございます！」

「いいのよ、頑張ってるね。」

「はい！」

「さて！解析にかかろうかしら！」

で。

「……。おかしいわ…。もしかしてプロテクトとかかけてないかしら？」

「いえ…。特に…」

「…そう…。どんな解析をしても結果がでないのよ…。どうしてかしら？」

「すみません…。詳しくは話せません…」

「そう…。無理に…。とは言わないわ…」

「すみません…」

「今日はこれでいいわ…ありがとうね。」

「いえ…こちらこそ力になれなくて…すみません…。では…」

で。

「急いで帰るか…」

ちなみにスバルたちは先に帰った。

『電波変換で帰ればいい…。』

「頼む。電波変換…」

デュオは電波変換して帰った。

「あれ…？おかしいな…」

「？どうしたの？シドウ。」

「さっきのアイツ…電波変換しているのにトランスコードが登録されていない…」

続くっ！！

第12話 WAXAで…（後書き）

眠い…けど後一話下書きしてから寝よう…

第13話 …サブタイトル…眠くて思いつかないのでナシ…（前書き）

ヤバい…夜中に投稿しようとして寝ちゃった！今日学校なのに！

第13話 …サブタイトル…眠くて思いつかないのでナシ…

現在はゴールデンウィークちよつと前。

学校

「あら？ミソラちゃんは？」

「ライブの練習だってさ。」

「ふん…」

「ジャックは休みとれたのかしら？」

「ギリギリな…暁も行きたいと言ってたが多分アイツは無理だ。」

「そ、そう…。」

で。また色々すっ飛ばして放課後

「さて…ボクはミソラちゃんを迎えに行くんで先に帰るね」

「じゃあね」

以下略！

ミソラ side

「さて、帰ろっと！」

『お疲れ様！ミソラ。』

ちなみに場所はオクダマスタジオだ

「早く帰るから電波変換いい？」

『もちろん！』

「トランスコード！ハープ・ノート！」

で。

ウェーブロード上

「みつけたぞ…ロックマン…響ミソラ…」

で。

「ただいま」

「お帰りのさい。」

「スバル君は？」

「二階にいるわよ。」

「（ニヤリ）ありがとうお母さん。」

「どういたしまして（ニヤニヤ）」

ビクッ！

『どうしたスバル？』

「何か悪寒が…」

『なんだそりや？』

「わかんない…」

ドオン！

「ただいまぁ！スバル君！！」

「うわぁ！」

ミソラは部屋に入るなりスバルに飛びついた。
何とかこけるのは踏みとどまったがかなり不安定な体制だ。

「ミソラちゃん…ちょっと離れて…」

「何でえ!?!」

「こける!こけるって!」

「あ、ごめん…」

ミソラはゆっくりスバルから離れた。

「危なかった…」

「また気絶しちゃった所だったね。」

「……。」

で。

また色々すっ飛ばして展望台

「……………」

「……………」

『（暇だ…暇だ…暇だ…暇だ暇だ暇だ暇だ暇だ暇だ！）暇だ暇だ暇だ暇だ暇だ暇だ暇だ暇だ暇だ暇だああああ！！！！』

『黙ってなさいガサツ！！！！』

ドカバキボコッ！

『グフッあ！！』

で。

「やっぱり…こうなるのか…」

「そ…だよお♪」

「了解…」

どんな状況かって？

ミソラがスバルと一緒に寝てくれと頼んでいるのさ。

「何でいつもいつもくつつくんだよ…」

続くっ！！！

第13話 ∴サブタイトル∴眠くて思いつかないのでナシ∴（後書き）

時間がねえ！後書きはなし

第14話 ある意味…大事件…!! (前書き)

サブタイトルのネーミングセンス無さ過ぎだな俺…

第14話 ある意味…大事件…!!

現在ゴールドデンウィーク直前…

「暇だね」

「うん…」

スバルとミソラは昼休みに暇を持て余していた
アレ以来、ウィルスは少し発生するものの、少ないのでスバル達が
倒していた。

…いや…八割はゼロとデュオが殺っているが…

と、まあ特に何も起こっていないので平和だった…

『スバル、あまりだらけすぎるなよ、こう言う事件の後の長く続く
平和は相手がよからぬ事を企んでる可能性が高いからな。』

「そうだね…気を引き締めておかないと…」

ドカーン!

「何っ!？」

「もしかして…」

『ウイルスだ！大量のな！』

「ミソラちゃん！みんなに連絡して！ボクは先にいってウイルスを倒すから！」

「わかった！すぐに追いつくね！」

「ウォーロック！行くよ！！」

『おお！いつでも行けるぜ！！』

「トランスコード！シューティングスターロックマン！」

「はあっ！」

ザシュザシュザシュザシュ！

スバルがウイルスが大量にいる場所に行くとするでにデュオとゼロが

戦っていた。

「来たか…」

「これは…前より若干多い…」

「気にするな。全滅させることに変わりはない。ハアッ！」

「わかりました。」

と言ってゼロは薄い緑の剣ゼットセイバー（スバルには少し前に教えた）でウイルスを切り裂き、スバルはロックバスターでウイルスを倒して行く。

で。

いつの間にかミソラや暁たちが合流し、ウイルスはほとんど倒していた。

「これで終わりだ…。」

ザシュ！

ウイルスは全滅した。

「つ、疲れた…」

「もう動けない…」

「確かに疲れたぜ…」

「ああ…疲れて腹減った…」

「僕も疲れたよ…」

「俺も少し疲れた…」

「私も…」

「……………」

「…デュオさんは…大丈夫なんですか？」

「大丈夫だ、問題ない。」

「……………」

スバル達は絶句していた。

それもそのはず、デュオとゼロは一番に駆けつけ、倒したのも、一人で六割はデリートしていたのである。無論ゼットセイバーのみで

で。

「……………!! 全員気を付けろ!! 何か…分かんが…電波体が近くにいる!!」

「シフフフフフフ…よく見破れたな…電波をほぼ遮断していたはずだが…」

「ファントム・ブラック…!」

「シフフフフフフ…久しぶりだな…ロックマン…」

「まさか…今までの大量のウイルスは…」

「その通り…私の仕業だ…」

チャキツ…バシューン!

「はっ! 何だ!？」

撃ったのはゼロ。

バスターショットを構えている

「貴様が敵だと言うなら俺は…お前を…殺す…!!」

バシューンバシューンバシューン!

「はっ!」

ファントムは全て回避した。

『スバル…ファントムってあそこまで強かったか？』

「いや…確かに強かったけどあそこまでは…」

「フフフフフフ…今日は貴様らとやり合う気はない…また後日、脚本の修正後…さらば…」

そう言うとファントムは周波数変換で消えた。

続くっ!!

第14話 ある意味…大事件…!! (後書き)

まさかのファントムブラック…そろそろ第二章クライマックスに近付いてきましたよ

スバル 「はやくない!？」

大丈夫だ。問題ない。すでに第四章まで構想は出来上がっている。

「あ…そう…ってその第四章までも短いんじゃない？」

…大丈夫だ。問題ない。

「そればかりじゃん…」

最低一回は超大きな事件は入れる。

「……。」

はいしゅーりよー。

第15話 P h a n t m (前書き)

眠い…

第15話 Phantom

ファントムブラックが現れて消えて一時間後

「やっぱり…ファントムブラックの目的はボクへの復讐だよね…」

「それ以外考えられないよ…」

「さて……どうしたものか…」

「うーん…」

「……ヤツの目的が復讐ならば、スバルだけでなく周囲に攻撃を加える可能性が高い。学校、友人宅、自宅、WAXA、オクダマスタジオ…どこを狙うかからん…だからスバルに関係が深い所、人物をマークして遊撃隊を二人ずつに分けて行動する…それが俺のoperationだ…」

「日本語で作戦って言えよ…」

「細かいことは気にするな。operationのほうが格好いだろ。と作者が作者が言っている。」

「そ、そうか…」

で。

「まあ…とりあえずファントムは見つけ次第全員に連絡、そっから捕獲だ。」

「俺の意見はヤツは殺るほうがいい。生かしておくで脱獄して再び復讐に走る恐れがある。」

「それは無いわ…刑務所は脱獄不能よ…」

「そうか…お前らは追いつめられて精神が肉体を凌駕し、憎しみの力を限界突破した復讐鬼の力を知らないか…」

「どう言うこと…?」

「限界突破した復讐鬼は対象を始末するためなら体だろうが五感だろうが心だろうが魂だろうが捨てても復讐しようとする…そう言う奴らを俺は何度か見て来た…そう言う奴らはもはや人間を超えていた…」

「つまりそれらを止めるには殺るか殺らせるか…だな？」

「ああ…恐らく…まあ…例外もいるだろうがな…」

「だが…やはり殺すのは…」

「お前たちがとどめをさす必要はない…俺一人で十分だ…」

「…………。」

で。

『…いいのか？』

「なにが？」

『とぼけるな。』

「ああ…アイツ等には手を汚させない…」

『フツ…』

「何がおかしい…」

『お前が直接手を下す事を選んだのはそう言うことか…』

「まあな…とつとと帰らないとアリサにどんな目に遭わされるかわからんからな…さっさと帰るぞ…」

『了解…ってお前…彼女には絶対勝てんよな…戦闘ならかなり強い』

が…不思議な物だ…』

ここにもある意味鈍感が二人いたとさ（笑）

「で？ 気になってたんだが…お前ら付き合ってたんだよね？」

暁、からかいモードスイッチON（笑）

「まあ…付き合ってますけど…」

「ほお（ニヤニヤ）」

「暁さん？ 何をニヤニヤしてるんですか？」

「いやゝそりゃあ…なあゝミソラを彼女にするとはさすがに地球を三回救ったヒーロー、ロックマンだなくと思ってな（ニヤニヤ）」

「……………っ……………か……………がつ…！！！！！！！！」

ジャックは後ろの方で腹を抱えて転げ回りながら声にならない笑い声で大爆笑している。

「こういうのを抱腹絶倒って言うのかしら…」
クインティアは弟をみて呆れていた。

「で?どこでどっちから告白したんだ? (ニヤニヤ)」

「質問が父さんと同レベル…ってか同じ…」

「私が展望台で告白しましたあ♪」

「なるほどねえ… (ニヤニヤ)」

「ゲホッゲホッ! がはっ! ゲホッ!」

ジャックは笑いすぎてむせていた

「ジャック…もはやバカとしか言いようがないわ…」

クインティアはジャックに再び呆れてていた…

「お似合いだな (笑)」

「「そんな事言ったら暁さんとクインティアさんも十分お似合いですよ?」」

「ぐっ…なかなかやるな…スバル…ミソラ…」

／／／／／

「アハハハ…」

続く……！！

第15話 P h a n t m (後書き)

えゝ…そろそろ復讐鬼編も終わりに近づいてきました……
と言うわけで
第三章予告を
やります…。

俺は…一体何をやっている…！

私はどうしてあの子を信じれるの…？

お前が何をしようが構わんが…死ぬなよ？

俺は…俺は…俺はどうすれば…
どうすればいい…

私は…何のためにここにいるの…？

お前は…誰だ…

俺は…0…

俺達はまた必ず会える、だから待っている。

とまあ…こんなもんですね…第三章、追憶。

ではさよなら～

第16話 なんだってええええ!! (前書き)

サブタイトル意味不明…そして短い…

第16話　なんだってええええ!!

現在ゴールデンウィーク前日

「なんだってえええええええ!!」

初っぱなからスバルの絶叫から始めると言う超唐突な始まり方で申し訳無い。

で? 何があったかって? それは約二時間前のこと……

ミソラはライブの練習でオクダマスタジオに来ていた。

で、現在休憩時間

「ふう…疲れた…」

『まだまだ練習はあるわよ』

「うん…」

で。

ライブ練習も終わって…

「よし！帰るぞ」

「ソフソフソフソフ…響ミソラ…私の脚本の完成にはお前が必要だ…来てもらう…」

『ミソラ!!』

「ハープ！」

「ロックマンに伝えろ…響ミソラを返してほければ…今夜零時、ドリームアイランドの北西の隅に一人で来い…と。」

そのままファントムは飛び去っていった…

で…冒頭に…

「落ち着け…って無理か…」

「恐らくやつ脚本もクライマックスに近付いてるのだろう…ならばそれに乗り、正面から行くしかない。で、他のメンバーは周波数を感じられない程度の距離を保ち、スバルの戦いが終わる、もしくはピンチの時に突入、ヤツを確保し、その後は…アンタらに任せる。」

「ヤツの指定した時刻まで後どれくらい!?!」

「後…4時間だね…」

「ならば今から準備を始めるとしよう。」

で。

午後11時30分…

続くっ!!

第16話　なんだってええええ!!（後書き）

サア〜テエ…クライマックスと洒落込みますかアアアアアアアアア
ア!!

デュオ「……………」

ゼロ『……………』

ちよつと待てエ…何故デュオはビームサイズを構えて、ゼロはチェ
ーンロッドで俺を拘束しようとしているンですかアアアア!!

「『お前も何故を刀抜こうとしている…』」

貴様らがヤバいと感じたからだろうがアアアアア!!

「貴様…展開が読めるんだよ…」

『もう少しまともに考えろ…』

黙れええええ!!ぐだぐだ言っつと出番減らすけどいいンですかア
アアアアア!!?

「どうぞ…」

『自由に!』

ガシュン！

仕方ねえ…ハアッ！

がキーン

「隙あり…！拔刀術を使ったのが失敗だ…ガハッ…！」

飛天御剣流拔刀術…双龍閃…

飛天御剣流の拔刀術に死角はねえ…全て二段構えの技だ…
さらば…また次回で…

第17話 復習劇の始まり

現在時刻は11時45分

「スバル、行け…俺は周波数をほぼ0に出来るから出来る限りついていく…安心しろ…ヤバくなったら助けてやる。」

「分かりました…」

で。

「ンフフフ…来たか…さあ…勝負だ…」

「望むところだ!」

「ステッキソード!」

「バトルカード、エドギリブレード×2!」

「はああああ!」

「うおおおお!」

ガキーン！

スバルが右薙に斬るとファントムは剣を縦にして防ぎ、ファントムが袈裟斬りをすればスバルは一步下がりの回避、スバルが右切上をすればファントムは高く跳んで回避…と、なかなか決着が付かない…

『スバル！埒があかねぞ！』

「わかってる！バトルカード、ダブルストーン！」

「ふんっ！そんなもの当たらんわ！」

「バトルカード、エアスプレッド＋マヒプラス！」

ダブルストーンで落ちた岩にエアスプレッドをヒットさせた。誘爆し、ファントムは麻痺する。

「グアッ！」

「バトルカード、ボムライザー！」

「ぐああああ！」

「まだまだ！GA！インパクトキャノン！！！」

「ぐがあああアアアアアアアア！」

「これで…」

「フハハハハハ！やはり…簡単に終わっては意味がない！」

「な…何であれだけの攻撃を食らって…」

「知りたいか？…：簡単だ…修行したのだよ…貴様に復讐するためにな…！！」

「なん…だと…！」

「さらに…こんな事も出来るのだよ！！うおおおお！」

「周囲のノイズ率が…上がっている！？」

『…なんだ！？』

その時、ファントム・ブラックがノイズが包んだ！

「まさか…」

『ファイナライズ…だと…』

「違うな…確かにファイナライズのように見えるだろうがどちらかというとノイズで暴走したウィザードの状態に近い…つまり…ノイズで体を変化させ、強化する…」

ファントムブラックがノイズの中から話す…

「ウォーロック…こっちはファイナライズだ！」

『ああ!』

「ファイナライズ!!」

ノイズに包まれ…

「ブラックエース!」

赤い翼で黒い体のロックマンが出てきた。

「うおおおおお!」

ファントムもノイズの中から出てきた。

その姿は全身が黒と濃い紫の鎧に包まれ、頭は角のような装飾、背中に剣を背負った騎士のような姿で出てきた。

「フフフフフフ…この姿は…ファントム・ナイトとでも呼んでいただこう…」

続くっ!!

第18話 復讐の騎士（前書き）

短い…

第18話 復讐の騎士

「ゆくぞ…」

ファントムは見えない速度で動いて斬りかかった。

「くっ…バトルカード、ソードファイターX！」

「ファントムブレード…！」

ガキイン！ガキイン！ガキイン！ガキイン！ガキイン！

「くっ…」

「フフフフ…」

スバルが一方的に追い詰められている。

『バケモンか…てめえは…！』

「何とでも呼べ…貴様に復讐するのなら…悪魔にでも魂を売るさ…！」

「くっ…うおおおおお！」

ザシュッ！

「ぐあっ！」

「今だ！NFB！ブラックエンド…ギャラクシー…！」

「ぐああああアアアアアッ！」

「これで…」

「まだだ…まだ死ぬわけには…死ぬわけにはいかん!!」

「なんてヤツだ…」

『もう人外だな…』

「うおおおおアアアアアアアアッ!! ブラックノイズセイバー！」

ファントムブレードが大量のノイズを纏い、巨大な剣になったっ!

「くそっ! 避けられない! バトルカード、スーパーバリア！」

「無駄だアアアアアア！」

バリアは一瞬で砕けた。

「うわあああああ!!」

まともにブラックノイズセイバーを食らって吹き飛ばされる。

「とどめだアアアアアア！」

ファントム・ナイトは真上から切り下ろそうとする。

「くそおおお！」

[illegible]

続く！！

第18話 復讐の騎士（後書き）

ファントムはノイズを吸収して強くなっていますがプログラムは持っていない。精神力でノイズに耐え続けた結果、ノイズをコントロール出来るようになりました。

第19話 決着（前書き）

決着

第19話 決着

「食らえええええ！ブラックファントムノイズセイバーアアアアアアア！」

もう駄目だと思ってスバルは目をつぶった

「（ボクは…もう駄目だ…ミソラちゃん…ごめん……………）」

（ミソラちゃん…！）

しっかりしろ…シューティングスター…

響ミソラが…お前を待っている…

死ぬな…

必ず生きろ…！

スバルは頭に声が響いた気がした…

（ミソラちゃん…ボクは…死ぬ…のか……………いや…死ぬ……………ない……………！）

「他人の心配をする前に自分の心配をしろ…お前は大怪我だ…」

「ぐっ…ぐあ…アアアアアアア！」

「ファントム…！」

「殺す…殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す！ガ
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

ファントムは斬りかかった

「…ゼットセイバー…」

ズバッ

「グフッ…」

「死ね…」

ゼットセイバーを振り下ろそうとするデュオ…

「ダメだ…殺しちゃ…」

「今ここで殺らなければいつかまた必ず復讐にくる…その時…お前は仲間を守れるか？自分を守れるか？」

「もちろん…」

「命懸けでか？」

「当たり前です…」

「わかった…チェーンロッド！」

長い鎖に槍の先端がついた武器を取り出した。

「ハッ！」

チェーンロッドでファントムを拘束した。

で。

「暁シドウ…ファントムブラックを拘束した…すぐに来てくれ…」

「了解。」

で

「これだ…生かすか殺すか…任せる…」

「…わかった。」

「暁さん…ミソラちゃんは…」

「今はWAXAだ…大丈夫、怪我はない。それよりお前の治療が必要だ。WAXAに來い…」

「はい…」

で。

スバルは全身を斬られたので数カ所は何針か縫っていた…

何よりブラックノイズセイバーを食らったのが一番酷かった…

横薙に食らって、ギリギリ内蔵には届いていなかった…スーパー
バリアととっさにスバルがよけたのが幸いした。

無論、スバルは入院である。

で。

「スバル君！」

ミソラが病室に飛び込んできた。

「ミソラちゃん！大丈夫？」

「バカ…スバル君の方が大怪我じゃない…」

ミソラはスバルに抱きついた。

「ゴメンね…私が捕まっちゃって…こんな…こんな事に…」

ミソラは泣き始めた…

「ミソラちゃん…自分を責めないで…」

「ありがとう…スバル君……チュッ…」

ミソラはスバルにキスした…

「……
／／／／
／

『また脳がオーバーヒートしたな…気絶してやがる…』

「スバルく…ZZZ…」

スバルのベッド（病室の）で一緒に寝てしまったミソラだった…

第二章…完

第三章に…続く…

第19話 決着（後書き）

第二章を終えて…

思ったコト

・サブタイトルが意味不明

・一話づつが短い

・相変わらず駄文

グタグタじゃねえか俺…

ファントムナイトの技とか適当みたいだな…しかも描写すくねえ…

当初はファントムとスバルの戦いの途中にゼロを入れてファントムをボコボコにしてぶっ殺す予定でしたが、あまりにチート過ぎたので止めました…

例えばチェーンロッドで引き寄せてサウザントスラッシュ↓リコイルロッド連続攻撃↓バーストショット↓ゼットセイバー落砕牙↓天裂刃

と一緒に殺しかねないので…止めました。

こんなもんでしょうか。

第三章――追憶――

でお会いしましょう…

感想はどちらでもかまいません…

第三章【追憶】 第1話 追憶ノ巻（前書き）

第三章…

で。次の日

デュオ「みんなそろったか…」

アリサ「じゃあ…」

デュオ「いくか…」

.....

どこかで…

一人の小さな子供がいた

彼は名前はなかった

正確には名前を付けてくれる親がない…

家族はみんな死んでしまった…

少年が物心つく前に死んでいた…

少年は一人の男に拾われ、育てられた

男の名はアイン・レイと言った

アイン・レイは旅をしていた。

旅の途中、倒れていたその少年を見つけた。

アインは連れて行くことにした。

少年は3歳位だった

そして四年後……シャーロ……

アイン「…いいか…お前には生きる術を教え込んだ…完璧に出来ているならば一週間この街で一人で生きていくなど造作も無いはずだ。俺は一週間この街で用事がある…だから…」

少年「一週間一人で生きろ…だな…？」

「ああ…そうだ…そうだ…名前が無いと不便だろう、そうだな…コードネームは…デュオ…デュオだ。」

「了解…」

この瞬間、少年が一生名乗る名前が決まった。

続く……………

第二話 追憶ノ式

アイン「とりあえず金を渡しとく。大事に使えよ。」

デュオ「わかった…」

アイン「もし何かヤバい事になったらすぐ俺に電話しろ。」

デュオ「わかった。」

アイン「よし、じゃあ俺は行く一週間後、街の南門に来いよ。じゃあな。」

で。

デュオ「まずは寝る場所を確保するか…」

デュオは周囲をうろつき始めた。

デュオ「テントがあるからどこでもいいが…テントを張れる場所が無いな…………路地裏にでも行くか…」

で。

デュオ「このへんでいいか…」

バタバタ…バタバタ…

?? 「……………!!」

?? 「……………!!」

?? 「……………!!」

デュオ「…何か聞こえるな…行ってみるか…」

で。

続く！

第3話 追憶ノ参

その少女は他人を信じられなくなっていた

理由は

以前誘拐されかけたのだ：

それが原因である

アリサ「……。ハア…」

学校の帰り道：

たまたま通った道で不良にぶつかられてしまったアリサ

相手が自分からぶつかったのにも関わらずアリサを責め、アリサは逃げて、それを4、5人で追いかけていた。

アリサ「ハア…ハア…！！行き止まり…！！」

「フン…」

デュオは素早く回避し、全員の首に手刀を食らわせた。

全員気絶

ちなみにデュオの年齢は7歳、もはやバケモンである。

「まだだ…」

デュオは全員をナイフで始末した…

「あ……」

「これで…いいだろう。あ、死体は燃やしとくか…」

七歳でかなり危ない頭の持ち主だが仕方ない…彼は人間が壊れているからどうしようもないのである。

壊れてしまった理由は…いずれまた…

デュオ「あ…。アイツ気絶してやがる…無理もないか…」

で。

約三時間後

アリサ「う〜ん…」

デュオ「起きたか…」

アリサ「誰…」

デュオ「誰でもない…ただの人間だ。」

アリサ「ここは…」

デュオ「俺のテントだ。」

アリサ「頭…痛い…」

デュオ「当たり前だ…コンクリートに頭を打ち付けたからな…」

アリサ「……。今何時？」

デュオ「……午後5時…」

アリサ「なぜ私を助けてくれたの…？」

デュオ「人を助けるのに理由が必要か？」

アリサ「ウソ…絶対ウソよ…ウソに決まってる…」

デュオ「ウソと思っていたければ思ってもらっても構わない。」

アリサ「……。」

デュオ「で…家に帰らなくていいのか？」

アリサ「帰りたくない…」

デュオ「泊まるアテはあるのか？」

アリサ「……ない。」

デュオ「このテントを貸してやる。ただし一週間だけだ。」

アリサ「……（テントは空っぽ…荷物も何もない…しかも小さい…。
）貴方はどこで寝るの…」

デュオ「探せば寝る場所ぐらい他にあるだろ…」

アリサ「……。（なんなの…この人…今まで出会った事のない感じ
…）」

デュオ「じゃあな…」

アリサ「……待って…！」

デュオ「なんだ…」

このままどこかに行って欲しくない

そう思ったアリサだった

アリサ「わ、私が気絶してからど、どうやってここに運んできたの……」

デュオ「…抱きかかえてだが？」

アリサ「ど、どんなかんじで!？」

デュオ「こうやって。」

デュオは右手をアリサの背中に、左手を膝の裏側にして持ち上げた。要するにお姫様抱っこである。

アリサ「ちょっと!もしかして人混みの中これで歩いたの!？」

デュオ「?何か問題があったか?特に他人には見られてる様子はなかったし、あまり人はいなかったが…」

アリサ「歩いたの!？」

デュオ「まあ…一応…」

アリサ「……／／／／／」

デュオ「顔真っ赤だが…風邪でも引いたか？」

さらっと言ってしまおうデュオ、アリサは恥ずかしいのだがデュオは

そんな事をわかって無い。ちなみにこれは人間が壊れてるからではなくただ単に鈍感だからである。

アリサ「恥ずかしいからよ!!」

デュオ「わかったわかった…叫ぶな…」

本人は気付いてないがアリサが他人にここまで感情的になったのは初めてである。

で。

アリサ「やっぱりこのままで貴方もテントで寝れば？」

デュオ「わかった…（そのほうが始末しやすいしな…）」

アリサ「あ…あと…」

デュオ「…？」

アリサ「た…助けてくれて…あ…ありが…とう…」

デュオ「……どういたしまして…」

デュオは冷静を装っているが、内心かなり驚いている。

アリサも自分がここまで感情を露わにしたのは初めてで、内心驚いている。

デュオ「お前…腹減ってないか？」

アリサ「えっ…？」

グギョルルル…

デュオ「やっぱりな…まともな食物あったか…俺…」

自分のリュック（と言うかでかすぎてバックパック）を探るデュオ。

デュオ「缶詰めとレトルト類しかねえわ…」

アリサ「食べれるなら何でもいい…」

デュオ「じゃあ何か作るか…」

で。

デュオ「カレーしか作る材料がなかった…」

アリサ 「いただきます…」

デュオ「ああ……」

アリサ「美味しい：本当にレトルトなの？」

デューオ「ほとんどな。調味料で味は少しいじったが。」

アリサ 「そう……ありがとう……」

アリサはこの瞬間……微笑んだ……

無意識の内に：

デュオ「……………！！！！！！あ……ああ……」

わずかな微笑みだったが……

デュオには大き過ぎる衝撃だった……

で。

現在時刻…午後九時頃…

アリサ「Z Z Z Z…」

デュオ「寝た…か…今の内に…始末する…か…」

デュオはナイフを取り出した。

デュオ「悪く思うな…俺の姿を見た者を生かしておくわけにはいいかない…」

デュオはナイフを振り上げた。

そして…

続く…

第4話 追憶ノ四

デュオ「死んでくれ…」

そして…

ナイフを

振り下ろした…

しかしアリサには当たらなかった…

デュオ「俺は…俺は一体何をやっている…！」

殺そうとしたが、殺せなかった事に激しく動揺している…

ナイフを振り下ろした瞬間、アリサの紅くなった表情…自分を信じようとしなかった顔、立ち去ろうとする自分を引き止めた時の表情、微笑んだ顔…それらが頭をよぎり、ナイフを無意識にそらしたのだ…

アイン「ほお…アイツ…かなり動揺してやがるな…まあ当たり前か。

あいつの壊れた心には十分な…いや…大き過ぎるショックだろうか
らな…ひょっとしたら…アイツ…あの娘のことを…そしてあの娘も
…アイツのことを…フツ…なかなか面白い…やはりアイツを一時
的に一人で生活させてみるのは正確だったか…」

アイン・レイは少し離れた所から二人を見守っていた…

で。朝…

アリサ「…」

デュオ「……………」

デュオは悩み続け、結局眠れなかった。

もつとも、コイツは一晩くらいの徹夜ならなんの影響もないが。

一応言っておくが、デュオは七歳である。

現在時刻午前7時。

デュオ「おい…起きろ…おい…」

アリサ「うーん…」

デュオ「起きたか…お前…学校に行かなくていいのか…？」

アリサ「うーん…今行ったら親とかがうるさいだろうから…いい…」

デュオ「そうか……………」

アリサ「…もう少し寝る…」

デュオ「おい！お前！」

アリサ「Z Z Z Z Z…」

デュオ「全く…」

で。

現在時刻午前九時頃

アリサ「よく寝た」

デュオ「やっと起きたか…」

デュオは大量の荷物を持っている。

アリサ「…何その荷物…」

デュオ「一週間分の二人分の食料だ。」

アリサ「一週間…？」

デュオ「一週間しかこの街にはいないんだよ…俺は…」

アリサ「そう…」

デュオ「まあ…これでも食え…」

リンゴを渡す。

アリサ「ありがとう…」

デュオ「……そういえば…一晩一緒にいたが…名前を聴いていなかったな…」

アリサ「そうだね…私はアリサ…涼宮アリサ…」

デュオ「俺はデュオ…」

アリサ「デュオ…か…いい名前だね…二重奏…か…」

デュオ「お前…日本人…か？」

アリサ「うーん…パパは日本人だけど…ママはシャーロの人なの。だから私はハーフなの…」

デュオ「そうか…」

アリサ「貴方は…どこの人なの？」

デュオ「……わからん。」

アリサ 「へ…?」

デュオ 「物心つく前に家族は死んで…3歳位の時…ある男に拾われて…ずっと旅をしている。」

アリサ 「……………」

アリサは何も言えなかった…

強烈な話で絶句していたのだ…

で。

デュオ 「暇だな…」

アリサ 「暇だね…」

デュオ 「お前は勉強してろ…」

アリサ 「貴方もね…」

デュオ「仕方ないな…」

で。

勉強し始めたが…

アリサ「貴方はもう天才ね…」

デュオ「そうなのか？」

デュオはあらゆる問題を解いていたが全問正解である。

デュオ「一応…因数分解や平方根や三平方の定理までなら理解しているが…」

アリサ「いん…すう…??? へい…ほう？」

アリサは聞いたこともない言葉を聞いて頭がパンクしそうになっている。

くどいがデュオは七歳である。

何故彼がここまで天才なのかというと：

「天性の勘と才能だろう。多分・・・」

とアイン・レイは言っている

アイン「まあ俺が教えたこともあるけどな」

閑話休題

昼頃

昼食は：

チャーハンとスープだ：

アリサ「美味しい」

デュオ「……。」

やはりデュオの壊れた心には自分の行った行為により他人に喜ばれることは大きな衝撃である…

アリサ「どうしたの？」

デュオ「……何でもない…」

アリサ「そう？ 顔色悪いけど？」

デュオ「何でもない！」

アリサ「大丈夫そうだね。そんなに大きな声をだせるんだから！」

デュオ「……………」

で。

アリサ「貴方はどんなところを旅してきたの？」

デュオ「世界中全てだ…」

アリサ「ふーん…私もパパが仕事で世界中あっちこっち飛び回って

るから私もついていってるから色々な所にいってるの。」

デュオ「俺は…ほとんど歩きだ…海を渡るときは船を使うが…」

アリサ「歩きで…すごいね…」

デュオ「もう慣れた…」

デュオはアイン以外の人間には本当の事を絶対に話さない…そのデュオが出会って1日の少女に本当の事を話してしまっていた…

アリサも…自分と両親以外の人間を信じていなかったが何故かデュオの事を信じてしまっていた…

心が壊れた少年と他人を信じられない少女

二人は何故か…お互いを信じ合っていた…

そして二人の関係が一気に近づいて…恋に至るのは…ほんの少し先

続く…

の話…

第5話 追憶ノ伍

3日目

朝

現在時刻午前八時頃

デュオ「何故俺はコイツを殺せないんだ…」

昨夜も殺害を試みたがやはり殺せないデュオ。

デュオ「アインに聞いてみるか…」

アイン「何か用か？」

デュオ「殺そうとしても殺せないやつがいる…」

アイン「相手が強いからか？」

デュオ「違う。むしろ俺より圧倒的に弱い…一般人だ…」

アイン「まさか女か？」

デュオ「よくわかったな。」

アイン「年齢はお前と同じくらいじゃないか？」

デュオ「そうだ。」

アイン「そうか…」

デュオ「俺はどうすればいい…」

アイン「何もするな。」

デュオ「は？」

アイン「殺せないなら殺すな。」

デュオ「わ、わかった…」

アインとの通信を切った

アイン「こりゃ冗談が冗談では無くなってきたな…下手をすれば別れたく無くなって来てしまう可能性が…いや、デュオは大丈夫だろうが…あの嬢ちゃんがな…どうするかねえ…」

デュオは自分の姿をはっきりと見た者を全員抹殺してきた…

何故か？

彼は…

自分の姿を覚えられたらソイツがいつか殺しに来る…

と思いこんでいるのだ…

彼は四歳の時、旅の途中、立ち寄った街で会話した人間にその日の夜、殺されかけたのだ。

その時はアインがその男を始末したから命は助かった。

彼は旅の中、戦場、テロ、人の死、殺人…

余りにも人の死を見過ぎた…それが原因なのか、元々そう言う頭なのか、彼は自分をはっきりと見た者を抹殺するようになっていった…

しかし彼もまだ子供。

罪悪感やプレッシャーも感じるだろう。

だが彼は

「俺に殺されるバカなやつらだ！」

と心の中で自分の感情を殺していた。

デュオの精神は既に破綻していたのだった…

そんなデュオが三度も殺そうとして殺せない少女…

理由は彼にはわからない。

彼の壊れた心が何故一人の少女を殺せないかなどわかるはずもない。

ただわかるのは頭と体は彼女を殺そうとしても心がそれを否定している気がする。

それだけだった。

アリサ「おはよう…デュオ…君」

デュオ「呼び捨てでいい…」

アリサ「わかった…」

デュオ「今日は何かいつもより寒いな…」

シャーロは雪国だが現在は11月終盤

テントからでてみると…

雪が降っていた。

デュオ「予測より2日速いな…俺の天候予測もまだまだだな…」

アリサ「雪だ〜！」

デュオ「あんまり騒ぐな…帰りたくない家に帰るはめになるぞ…」

アリサ「あ…ごめん…」

デュオ「早くテントに入れ…風邪引くぞ…」

アリサ「うん！」

デュオ「スープだ…寒いからな…飲め…」

アリサ「ありがとう。」

アリサ「雪降ってるから遊ばない？」

デュオ「雪で遊ぶって…風邪引くぞ…上着無いだろ…お前…まあ俺もだが…」

アリサ「大丈夫だって！」

デュオ「止めておく…寒い…」

アリサ「もう…」

デュオ「テントの中で暖かくしておいた方がいい…おそらく吹雪がくるからな…暖かい食べ物を作ってテントの中で大人しくしておく…それが一番だ…。」

アリサ「吹雪…」

デュオ「吹雪はしばらくは止まらないだろう…数日分の料理は作っておくから手伝ってくれ……心配するな…保温の容器もあるからしばらくは持つはずだ…」

で。

昼過ぎぐらい

アリサ「本当に吹雪がきた…」

デュオ「言っただろう…」

アリサ「寒い…」

デュオ「毛布…使え…」

アリサ「ありがとう…って貴方の毛布は？」

デュオ「それ一枚しか持ち合わせていない。」

アリサ「駄目…寒さで凍死しちゃうよ…毛布…入りなよ…」

デュオ「…そうさせてもらう…」

アリサ「体凄く冷たいじゃない！無理しちゃダメよ…」

デュオ「…………。」

アリサ「わかった？」

デュオ「ああ…」

アリサ「（…どうして…私は…貴方の事を信じてるのだろう…他の誰かを信じられないのに…何故貴方を信じていられるの？）」

アリサの心に大きな迷いが生まれていた…

続く…

小休止（前書き）

さすがにスバル達の出番もないと流星じゃなくなりますからね……ちよつと休憩です。

小休止

デュオ「少し…休憩しよう…」

全員（デュオ、アリサ以外）「……………」

絶句。

当然の反応である。

デュオは七歳の時でバケモンとしか言いようが無いのである

アリサも他人を信じられない事があったということに全員ビックリである。

スバル達だけでは無い。暁やジャック、クインティアまでもが何も言えなかったほど驚いているのである。

全員信じられなかった…目の前のたった14歳の少年が潜ってきた
修羅場の質と量の違いに…

ツカサ、ミソラ、ゴンタもそれなりの修羅場をくぐり抜けている。

暁やジャック、クインティアもかなりの修羅場をくぐり抜けてきた。

スバルは地球を三度救っている。

だが

デュオは次元が違う…わずか3歳のころから果てしない人生を過ごし、人を殺し、精神が破綻し、心は壊れ、それでも生きてきたのである。

スバル「想像がつかないや…」

ミソラ「もう訳分かんない…」

ツカサ「もう何て言っているかわからない…」

ゴンタ「…すげーヤバイと言うことはわかったぜ……。」「

暁「……もう次元が違いすぎる…」

スバル「なんて言うか…ぐぐった修羅場の数が違うとか質が違うとかの話じゃないね…」

ウォーロック『ああ…宇宙探してもあそこまでのヤツはそういないだろう…』

ジャック「それもだが…天才過ぎるのも驚いたな…七歳で因数分解に三平方の定理かよ…バケモンか…」

ツカサ「しかも大人5人相手に全員一撃で気絶させて皆殺し…」

ジャック「何より…アイン・レイと言う男…何故アイツを育て、知識と技術を叩き込み、育て上げたのだろうか…」

コーヴァス『俺もあそこまでの話は聴いたこともねえ…』

ハープ『コーヴァスがそこまで言うくらいだから相当なのね…』

ヒカル『だろうな…』

ウォーロック『どうでもいいけどお前ら久々の登場だなオイ!』

で

デュオ 「話を…続けよう…」

アリサ 「……………」

続く…

小休止（後書き）

アイン・レイについて…

モチーフは新起動戦記ガンダムW Episode Zero
とEndless Waltz小説版に出てきた アイン・ロウから

名前もアインはドイツ語で1 アディンはロシア語で1を指します。

見た目もだいたい同じ…

以上

第6話 追憶ノ六

3
日
目
…
夕
方
…

まだ吹雪は収まらない。

二人は一つの毛布を使ってテントの中でじっとしていた。気が付けば二人は眠っていた……

デュオ「……………はっ……もう5時か……」

デュオは立ち上がろうとした。しかし立てなかった。

デュオ「ん……？なんだ……？」

眠っているアリサがデュオに抱きついていたので……

デュオ 「……………！！……………！！……………！！……………！！……………！！……………」

アリサ「スー…スー…スー…。」

デュオ「何でコイツは俺に抱きついてんだ…？」

アリサ「……………！」

デュオ「……まあ……いいか……」

アリサ「……………／／／／／」

デュオ「……………お前……起きてるだろ……………」

アリサ「…バレた？／／／／／」

デュオ「顔紅いぞ…風邪引いたんじゃないか？」

アリサ「引いてない！」

デュオ「ならいい。……………で…いつまで俺に抱きついてるつもりだ？」

アリサ「あ！ご、ごめん……」

デュオ「何で俺に抱きついてたんだ？」

アリサ「そ、それは……」

デュオ「……………それは？」

アリサ「わ……分かんない……／／／／／」

デュオ「なんだそれは……」

アリサ「べ……別にいいじゃない！抱きつくぐらい……………！！……………
…嫌だった？／／／／／」

デュオ「…いや……別に嫌とは……言っでは……。」

アリサ「じゃあいいでしょ！／／／／／」

デュオ「あ、ああ…」

何かものすごい気迫で迫られたので「抱きつかれるぐらいなら…」
と思いつつ、承諾したデュオだった。

ちなみに抱きつかれる事に関しては鈍感故に何とも思っていない
デュオだとか。

続く…

デュオ「今のは…寝言…だよな…」

アリサ「違うよ…」

デュオ「!!!」

アリサ「寝言なんかじゃない…私の本心だよ…」

デュオ「……………。（俺はの場合なんと言えはいいんだ?）」

アリサ「どうなの?」

デュオ「俺はなんと言えはいいんだ…」

アリサ「…デュオは私の事をどう思っているの?」

デュオ「……………わからない…」

アリサ「……………」

デュオ「だが…一つ確かなことがある…」

アリサ「何?」

デュオ「…俺は後3日しかこの街に居られないが…」

デュオはアリサを抱き締めた…

デュオ「お前とは離れたくはない…」

アリサ「……………／／／／」

デュオ「……………。」

アイン「オイオイ…マジかよ…アイツが…あそこまで変わるとは驚きだ…しかしあの嬢ちゃん…アイツをあれほど変えてしまうとは…」

アインは悩んだ…このままアリサとデュオをそのままにしておくか…デュオを連れて旅にまた出るか…

だがだがすぐに答えはでた…

旅を続ける…

そうしなければ彼女にも危害が及びかねない…

アインは迷いを捨てた…

二人には別れてもらう…残酷かもしれないが…それが最善だと考えたからだ…

いずれ自分が死ねば二人はまた会える…

だから…

しばらくは二人に別れてもらうことにした…

続く…

第8話 追憶ノ八

五日目

吹雪は止んだ…

現在時刻午前九時

デュオ「おい…」

アリサ「…何？」

デュオ「お前完全に風邪引いたな…」

アリサ「うん…」

デュオ「だから言っただろ…吹雪止んだからって外で遊んだら風邪引くって…」

アリサ「ごめん…」

デュオ「ハア…」

アリサ「……………」

デュオ「悪いが風邪薬も風邪薬を買う金も持ち合わせてはいないのでな…（風邪どころか病気になったことないからな…）」

アリサ「ごめん…」

デュオ「ハア…どうするか…：とりあえず寝とけば治るだろ…1日
安静にしとけ…熱は高くはなさそうだからな…」

ちなみにコイツは医学はそれなりの知識は持っている。
薬剤に関する知識も少し持っている。

だが…バカである。

アイン「あちゃー…風邪引かせたか…あのバカ…何やってんだよ…」

R R R R R R R R R R !

アイン「なんだ、デュオか？」

デュオ「風邪薬あるか？」

アイン「ねえよ…何でそんな事を聞くんだよ…お前絶対風邪など引
かねえだろ…」

デュオ「バレてるぞ…アイン…」

アイン「何の話だ？」

デュオ「とぼけるな…分かってるんだよ…俺達を見てる事はな…」

アイン「ちっ…バレていたのか…いつからだ？」

デュオ「なんだ、適当に言っただつもりだったが本当だったか。」

アイン「…………。」

デュオ「まあいい…金よこせ、風邪薬買う金をな。」

アイン「わかったよ…」

で。

アイン「…ほれ金だ…」

デュオ「悪いな。」

アイン「別に構わんよ…ただ…」

デュオ「ただ？」

アイン「あの嬢ちゃんに惚れてるんだろう？ お前…」

デュオ「そんな訳無いだろう。」

アイン「アホ…気付けよ…つーかあの嬢ちゃんに好きかなんか言われてただろ…その時超動揺してたくせに…」

デュオ「…………。」

アイン「別に俺はこの街にお前を置いていてもいいんだぜ？」

デュオ「アホ、アイツにも危害が及びかねないだろうが。」

アイン「それは問題ない。奴らの本拠地を見つけた…二日後、そこに潜入し、全てを終わらせる。」

デュオ「奴らの本拠地はどこだ。」

アイン「……南米、…赤道直下…コロンビアのとある半島…そこに奴らの本拠地はある。…地元の間人もほぼ知らない場所だ…」

デュオ「なんだそのどっかで聞いたことあるようなばしょは…」

アイン「知るか…作者に聞け…」

デュオ「…………。」

で。

デュオ「おーい…」

アリサ「……………」

デュオ「おーい…」

アリサ「……………」

デュオ「寝てるか……………いや…違う…！」

アリサ「ハア…ハア…ハア…ハア…ハア…。」

デュオ「…マズい…かなりの高熱だ…！！…ただの風邪では無いのか…！？」

アリサ「うう…」

デュオ「仕方ない…アインを…」

アイン「もう来てるよ」

デュオ「アイン…丁度いい…お前ならわかるか？」

アイン「ちょっと待ってくれよ…」

数分後

アイン「……」

デュオ「どうだ…？」

アイン「…強烈な風邪だな…疲れてたんだろう…風邪薬のんで1日
安静にしてりゃ明日には治るだろ…」

デュオ「そうか…」

アイン「お前…さて…俺が力を貸せるのはここまでだ…後はお前
がなんとかしろ。（コイツ等の邪魔するのは悪いからな）じゃあな
…」

デュオ「了解……」

で。

アリサ「…ん……」

デュオ「目が覚めたか……」

アリサ「うう……」

デュオ「無理はするな……風邪薬を飲んでしばらく寝たからマシにはなってるはずだ。」

アリサ「私……どれくらい寝てたの？」

デュオ「三時間程だな。」

アリサ「思ったより短いね……」

デュオ「お前意識失ってたぞ……疲れが溜まってたんだな……スマン……」

アリサ「うん…もう大丈夫だから…」

デュオ「俺が言うのも何だが…俺がここから消えるとき…お前…家にちゃんと帰れよ…」

アリサ「うん…」

デュオ「嫌なのは分かってる…俺もついて行ってやるから…」

アリサ「うん…」

デュオ「…もう会えなくなる…何て思ってるだろ…。」

アリサ「うん…」

デュオ「大丈夫だ…またすぐに会える…いや…会いに来る…!必ずな!」

アリサ「約束だよ…?」

デュオ「ああ…どれだけ時間がかかって…お前がどこかへ行ってしまう…必ずお前の下へ行く!」

アリサ「ありがとう…」

続く…

第九話 追憶ノ九

七日目

デュオが街を去る日

デュオ「さて…荷物はまとまった…」

アリサ「……………」

デュオ「さあ…行くか…」

アリサ「うん……………」

デュオ「……………」

アリサの家…

アリサの両親は家の前に立っていた…

二人は歩いて行った

「アリサ！どこいったの！？」

母親が駆け寄って来る。

アリサ「…。」

「心配したんだぞ！」

父親も駆け寄って来た。

アリサ「…。」

「何があったの？」

アリサ「……。」

デュオ「彼女は……アリサはもう大丈夫でしょう……。もう他人を信じられる……アリサは変わりました……」

「君は……」

デュオ「名乗る名はありませんよ。……偽名……のようなものでいいなら“デュオ”で構いません。」

「この子は……」

デュオ「大丈夫です……アリサから聴きました。もう大丈夫ですから……俺も彼女に助けられました……だから……あなた方がまず彼女の話聴いてあげて下さい。」

「……分かった……君の言うとおりにしよう……」

デュオ「アリサ……この一週間のこと……包み隠さず全て両親に話せよ……」

アリサ「うん…」

デュオ「じゃあな…」

アリサ「待って!!」

デュオ「……。」

デュオは立ち止まった。

アリサ「また…会えるよね…」

デュオ「ああ…」

アリサ「約束の…証に……チュツ…」

アリサはデュオの唇に…自分の唇を当てた…

つまり…

キスした…

アリサ「これで…次会うときは恋人だからね…／／／／」

デュオ「……………」

アリサ「約束…だよ」

デュオ「ああ…俺達は必ずまた会える…」

だから…

待っている…」

その言葉を言って…デュオは去っていった…

「アリサ…あの子は誰なんだい…？」

アリサ 「彼はね…私の

命を助けてくれて…

心を助けてくれた

私の恋人だよ…!!」

アイン「よう…やることは済んだか？」

デュオ「当たり前だ。」

アイン「もう一度だけ言う…彼女の所にいても良いんだぞ…」

デュオ「二度も同じ事用な事を言わせるな…」

アイン「そうだったな…。……行くか…」

デュオ「ああ…」

アリサ

アインとデュオ

とりあえず…

これで…アリサの過去はおしまい

アインとデュオの二人の過去は…もうちょっとだけ
続きます…

続く…

第10話 追憶ノ十

デュオがアリサと別れて一年

アイン「あれが奴らの基地だ」

デュオ「…なるほど…」

アイン「あそこさえ潰してしまえば全ては終わる…」

デュオ「お前が狙われることはなくなる訳だな…」

アイン「お前もな。」

デュオ「どうする…奴らの警備体制は完璧に見えるが…」

アイン「ああ…だが…」

カチャッ

双眼鏡を覗くアイン

アイン「何処の世界にもバカはいるようだな…」

デュオ「なるほどな…あそこを狙って潜入するか…」

アイン「と言うかあそこしか無いだろう。」

デュオ「確かに…」

アイン「いいか、俺とお前は潜入後、二手に別れて行動だ。お前は施設最下層の、W・R・B・Sと言う物を破壊しろ。」

デュオ「何だそれは。」

アイン「……悪いな…そいつは教えられん…だが必ず破壊しろ…あれはかなりヤバい代物だ…。」

デュオ「兵器か？」

アイン「似たようなもんだ…」

デュオ「何であれ…兵器ならば破壊する…これからの世界…戦いは無くさなければならぬ。」

アイン「……W・R・B・S…はな…人対人ならざる物と言うことを引き起こす兵器だ…」

デュオ「……お前は何をするんだ…」

アイン「俺は最上階の総統を殺しに行く…二人同時進行でなければ意味がない…。」

デュオ「……無理はするな…お前はもう歳だ…」

アイン「言ってくれるぜ…デュオ…」

デュオ「まだそのコードネームか…」

アイン「…いや…デュオ…それがお前の本名なんだよ…真正正銘お前の名だ。」

デュオ「何を言っている…?」

アイン「だからな…デュオと言う名付けはお前の本当の親が付けた名であって、断じてコードネームではないんだよ。」

デュオ「だからどうした。名前などただの固有名詞だろう。」

アイン「フツ…まあいい、とりあえず、死ぬな。」

デュオ「お前もな。」

アイン「そうだ…こいつを持っていけ。」

デュオ「なんだこの二つは…」

眼帯のようなもの

通信機のようなもの

アイン「ゼロ・アイ…様々な情報がすぐに見られる超多機能ゴーグルだ。そしてもう一つ…これはステルス迷彩ver3.5だ…ただしステルスはバッテリーが二時間しか持たない…ゼロ・アイは太陽光発電とバッテリーだから半永久的だ。」

で。

二人はダクトのそばにきていた…

アイン「バカがいたおかげで助かったぜ…」
デュオ「コイツ…立ったまま寝てやがる…」

で。

アイン「じゃあな…生きてまた会おう…」

デュオ「ああ…」

続く…

第11話 追憶ノ十一

デュオside

デュオ「さて…まずは階段かエレベーターを探すか…」

デュオは気配を消しながら慎重に進んでいく。

デュオ「エレベーター側は…見張りが……………0か…階段側は……………二人か…………エレベーターを使おう…」

〽エレベーター〽

デュオ「…最下層が何階かは知らんが…地下50階までは行けるみたいだな。」

く地下50階く

チーン

デュオ「敵の姿は…無しか…そろそろあれを出すか…」

ゼロ・アイを取り出して左目に装着した。

デュオ「…赤外線暗視モードにして…」

ピツ…

ヴーン…

デュオ「先を急ぐか…」

デュオ「どうやらさらに下があるみたいだな…」

さらに地下への階段を発見したデュオ。

デュオ「行くしかないか…」

地下70階…

デュオ「階段が…無い…って事はここが最下層か？」

ガチャ…

ドアを開けると…、

デュオ「チツ…また階段か…」

地下99階

デュオ「ハア…ハア…ハア…これで…最後…か？」

ガチャ…

デュオ「見張りは…1、2、3、4…5人か…かなり重装備だな…強行突破は無理だな…さて…どうするか…」

デュオはしばらく周囲を調べた

デュオ「…やはりまともなものは無いか…今あるのは…ナイフ…スタンガン…ロープ…麻醉銃…弾30発…空マガジン5個…さて…どうするか…」

デュオの頭に浮かんだ作戦はこうだ

作戦1 マガジンを投げて敵の気を引き、そのまま先へOrスタンガンでビリッと。

作戦2 バッテリーがちょっと少ないステルス迷彩で敵に近づいてビリッと

作戦3 ナイフで全員抹殺

デュオ「……ビリッとって刺すか。」

で。

バチッ！

ザシュツ！

ギヤアアアアアア！

何だ！

バチツ！

ザシュツ！

ギヤアアアアアア！

バチツ！バチツ！バチツ！

ザシュツ！ザシュツ！ザシュツ！

ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！

はい、敵兵終了

デュオ「弱い…」

分かってるかもしれないが敵兵が弱いのではなくデュオが異常な強さなのである…

デュオ「さて…エレベーターが一つか…」

ピッ

ガシャン

ウィーン…

地下100階へ…

デュオ「これが…アインの言っていた装置……そもそもこれは何なんだ……？……まあいい、爆薬を取り付けるか……」

で…

デュオ「セット完了……」

デュオは物影に隠れた

デュオ「任務……完了……」

ポチッ

ドゴオオオオオオオオオオン！！

装置は爆薬により木っ端微塵になった：

続く：

第12話 追憶ノ十二

アイン「フン…まともな兵士はいないか…」

（最上階）

??? 総統「ア…アイン・レイ…生きていたのか…」

アイン「生憎俺はしぶといんでな。」

総統「貴様…一体何の目的でここに…」

アイン「W・R・B・S.の破壊…そして…貴様の抹殺だ。ダーク総統である貴様…あいつの…デュオの祖父であり…彼女の父親である…貴様のな!!」

総統「そう言えば私の娘はどうしたんだ…?」

アイン「何か言い残すことは無いか？」

アインは無視して話を進める

総統「私の娘はどうしたんだ!! 貴様がつれて逃げたはずだ!」

アイン「生きてるよ…貴様から逃げるため…自分の息子を手放し…名前を変え…絶対に貴様にはわからない場所だな!」

総統「…その息子とやらは生きてるのか？」

アイン「…そいつは教えられんな…」

総統「フフフフフ…フハハハハハ…ハハハハハハハハハハハハ！」

総統は狂ったように笑った

アイン「死ね」

アインは銃の引き金をひこうとした

総統「気付いていないと思っていたのかア！？それくらいは知ってるのだよ！すでに地下には兵士を多数送った！！」

アイン「……」

ダァン！

アインは無言で引き金を引き、総統を殺した。

アイン「残念だが…並み以上のエリート部隊をいくつか送り込もうが…アイツを殺すのは…不可能だ。………さて…これ…」

デュオ「任務…」

「完了…」

続く…

第13話 追憶ノ十三

アインは階段とエレベーターで一階まで降りた
するとデュオもエレベーターで上がってきた。

アイン「オウ、生きてたか」

デュオ「当たり前だ。あんな雑魚では相手にならん。」

アイン「アレは破壊したな？」

デュオ「跡形もなく破壊した…さあ…アレがなんなのか教えてもら
おうか。」

アイン「アレはな…物質を電波化することができるシステムだ。」

デュオ「それだけか？」

アイン「いや…アレはな…生物…人間にもきくんだよ…さらには電
波になった物質同士を合体させ通常の物質に戻すことが可能だ…」

デュオ「…そんなバカな…」

アイン「だが生物同士や生物と非生物は合体はできない…さらに生
物は元には戻すことが不可能だ。」

デュオ「だが人間を電波にすれば敵の情報などを自由に見れるので
はないか？」

アイン「そうだな。さらに電波で戦闘も可能だ…そのためにあれが
…W・R・B・S・が作られた…」

デュオ「W・R・B・S・は何かの略称か？」

アイン「Wave・Real・Battle・System（電
波実体化戦闘システム）の頭文字を取ってW・R・B・S・だ。」

デュオ「そうか。」

アイン「ああ…そして…グフッ！」

ビチャッ

デュオ「アイン！？」

アインは吐血した

アイン「……そろそろ限界か……」

バタッ

アインは倒れた

続く
……

第14話 追憶ノ十四

デュオ「アイン！どうした！？」

アイン「ああ…ちよいと心臓がイカレててな…そろそろ限界みたいだ…」

デュオ「……………」

アイン「デュオ…いいか…俺のバックパックに全て書いたノートがいくつかある。それ全てに目を通しておけ…」

デュオ「待っている…直ぐに…」「無駄だ…」

アイン「俺はもう無理だ…」

デュオ「そうか…」

アイン「…いいか…最期にいいことを教えてやる…よく聞け…」

デュオは無言で頷いた

アイン「何があっても…感情のままに…行動しろ……。…昔…ひとりの大馬鹿野郎のせいで…世界が危機に瀕しかけた事で…歴史が変わることがあった…。…どんなに綿密に計画を立てても…何処でいつどんなに馬鹿が歴史を変えるかわからない…だから感情のままに生きて…後悔しないように生きる…それが…今を精一杯生きる…人間の…正しい生き方だ…。…グハッ！」

アインはさらに吐血した

デュオ「……。」

アイン「いいか…絶対に忘れるな…感情のままに生きて行動する…
…覚えておけ…」

デュオ「ああ…絶対に忘れない…」

アイン「この約十年…お前と一緒に居て…なかなか楽しかったぜ…」

バタツ…

アインは話し終えると…事切れた…

続く…

第15話 追憶ノ十五

デュオ「……。」

デュオはアインに言われた通り全てのノートを読んだ。

それは自分やアインの事を書いたノートだった…

そして最後のノート…最後のページ…そこにはこう書かれていた。

（デュオ…お前はもう自由だ…自分で考え、好きに生きろ…感情のままに生きろ…できれば彼女の下へ行ってやれ……じゃあな…ありがとう…そして…さようなら。）

デュオ「……………」

デュオは無言でノートを閉じた

そして…

デュオ「…あばよ…アイン・レイ…」

いや

親父……」

デュオはそのまま立ち去った……

デュオストーリーはまだちよいと続く……

ゼロへ…

続く…

第16話 追憶ノ十六

……ここは……どこだ……

俺はラグナロクと一緒に……

シエルは……シエルは無事だろうか？

ゼロ『うつ……』

ゼロは立ち上がろうとした。

ゼロ『……？』

ゼロは体に違和感を感じた。

ゼロ『……これは……俺は……サイバーエルフ……？魂がボディからはじき出されたのか……エックスのようになったのか……』

ゼロは仕方ないと思った。

ラグナロクと大気圏に突っ込み地上に衝突したのだから。

ゼロ『シエル：無事だろうか…』

ゼロは周囲を見渡した。

しかし…

ゼロ『…おかしい…』

周囲にラグナロクの破片が全く無いのだ

ゼロ『あ…俺がかなり吹き飛ばされたのか。』

ある意味バカである

ゼロ『まあいいとりあえずエリア・ゼロを探すか。』

で

ゼロ『……そもそもここはどこだ？記憶がぶっ飛んでいるのか……？』

魂がはじき出されたせいなのか、記憶のごく一部がぶっ飛んでいるとかそう言う訳ではなく、知らない場所なのである。

ゼロはそこに気付かない……やっぱりバカである。

ちなみに性格は若干変わっている

ゼロ『……！？何だ！あれは……！？』

そこには黄色いヘルメットをかぶったゼロにとって意味不明なものがいた

ご存知、メット野郎のアイツ等である

ゼロ『何か見たことあるような無いような………』

かなりどうでもいいがロックマンエックスで同じように奴が出ていた。ゼロに出てたかは忘れたけど。

閑話休題

ゼロは黄色いヘルメットのアイツに襲われた

ゼロ『ハッ!』

高くジャンプして回避するゼロ

ゼロ『チッ…』

ザシュッ

ゼットセイバーを抜き、メットリオを斬るゼロ

ゼロ『クッ…数が多い…だが!バーストショット!』

ゼロは後ろに飛び下がり、バスターショットから強力な一撃を放つ。

バーストショットはしばらく飛び、一体に当たると大爆発を起こした

ゼロ『…雑魚だったか…』

続く
…

デュオ「…完全に道に迷ったな…まあいい…適当に歩いていれば海岸線には出られるだろ。」

デュオも南米アマゾンのだ真ん中で道に迷っていた

ゼロ『おい…』

デュオ「……………」

ゼロ『おい…』

デュオ「……………」

ゼロ『あ…サイバーエルフになったから見えないのか…』

デュオ「ゼロ・アイ装着と…」

カチャッ

ヴーン…

デュオ「っ！？なんだっ！？」

ゼロ『俺が見えるのか! ?』

デュオ「何者だてめえ!!」

ゼロ
『ゼロだ』

デュオ「電波生命体かつ！」

ゼロ『なんだそれは？俺は元レプリロイドの現サイバーエルフだ。』

デュオ 「なんだそれは……」

ゼロ『……話がおかしくなってきたな……』

デュオ「意味不明だなオイ。」

ゼロ『とりあえず状況を整理しなければ……まずここはどこだ？』

デュオ「南米アマゾンのどこかだ」

「ゼロ……すまん……いま何年だ？」

デュオ「数えてないから細かく分かんが西暦22XX年辺りだと。」

ゼロ『……は……？………な……なんじゃそりやアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアア！！！』

デュオ「うるさいな…」

ゼロ『くそっ！何があった！別世界に来たのか！？俺は！時空超えちまったか！？何なんだ！一体何が怒ってるんだーっ！！』

デュオ「よく喋るな…オイ…」

実際はここまで饒舌ではなくパニクリ過ぎてイカレいるのでよく喋るのである。

ゼロ『どうする！どうする！？どーすんの俺ー！！！』

と昔のCMのセリフを言いながらパニック状態になっちゃったゼロ。

デュオ「落ち着けやあああああああ！このボケナスがあああああああああああ！」

バゴッ！ドカッ！バキッ！ボコッ！

ゼロ『ガハッ！』

バタッ

ゼロは気絶した

続く…

第18話 追憶ノ十八

しばらくしてゼロは目覚めた…と言うか…再起動したと言うほうがいいのか…

まあとりあえず気が付いたわけだ

で。

ゼロ 『お前…何故俺を攻撃出来たんだ…通常の人間には見ることも触れることも出来ないはずだが…』

デュオ 「知るか。見えるのはこのゼロ・アイのおかげだが。」

ゼロ 『なんだそれは眼帯みたいだが。』

デュオ 「あらゆる状況に対応出来る多機能ゴーグルだ。赤外線暗視、データ解析、望遠、テレビ、電波状況の確認、電波の可視化、顕微鏡機能…などの機能がある。」

ゼロ 『何でもありだな。』

デュオ 「まあな。……………で……………お前はこんなとこで何やってんだ…。

」

ゼロ『わからん。気が付いたら此処にいたからな。』

デュオ「そうか。何があったか知らんがお前が電波生命体である事には変わりないからな。レプリなったらとかサイバーなんかではない。お前はな。」

ゼロ『……俺は電波か……やっぱり次元を超えたか……』

デュオ「なんだそりゃ……次元を超えたら二次元か三次元かぐらいだろ」

ゼロ『いや……ここ二次元とか三次元とか関係ないだろ……小説だし……』

デュオ「そこは気にすんな。と言うかどうかやったら次元なんざ越えられんだよ……」

ゼロ『多分物凄いエネルギーを持った衛星レーザー砲と大気圏に突っ込み地上に激突して大爆発したからだ。』

デュオ「まあどうでもいいか……」

ゼロ『じゃあ聞くなよ……』

デュオ「それとなんだ？レプリなるとかとサイバーなったらってのは？」

ゼロ『レプリロイドは……アレだ……ロボットだ、サイバーエルフは……あれ……何だっけ……なんか記憶がぶっ飛んでいるからな……よく分から

ん。電子の妖精とかそんなだった気がするな。』

デュオ「…話を整理しよう…まずお前は別世界から来たんだな？」

ゼロ『そうだ。』

デュオ「で、そっちの世界ではお前はレプリロイドと言われるロボットだったと。」

ゼロ『そうだ。』

デュオ「何故、次元を超えてここにいるか分からんと。」

ゼロ『そうだ。』

デュオ「次元を超えたなどにわかには信じがたい話だな…」

ゼロ『一番俺が信じられん。』

デュオ「まあいい。証拠など求めても無駄だろう。一応名前を聴いておこう。」

ゼロ『ゼロだ。お前は？』

デュオ「デュオ。デュオ・レイだ。」

ゼロ『デュオ…二重奏…の割には1人だな。』

デュオ「お前も0なのに1人だな。」

ゼロ『そうだな。』

デュオ「フツ…」

ゼロ『フツ…』

二人「『ハハハハハハハ！』」

二人とも大声で笑った。

デュオ「どうだ、名前と状況が違う者同士共に行動するのは？」

ゼロ『ああ、そうしよう。』

そして二人は共に生きていく事にしたのであった…

続く
⋮

第19話 追憶ノ十九

あー…デュオだ…どう言うわけか今回の一部は俺視点だと作者が言っているの…

で、俺達はあれから一年歩いて旅してアメロッパの近くに居る。

え？今何してるかって？

行き倒れてるのさ。

ゼロ「オイ。」

デュオ「…」

ゼロ「オーイ。」

ゼロが俺のトランサーから呼び掛ける。しかし今の俺に答える気力も体力も何一つない。

?? 「…!? 大…ぶ!?」

誰かが俺に呼び掛ける

?? 「た…変…すぐ…」

そこで俺の意識は無くなった。

しばらくして俺は気が付いた。

デュオ「うつ…」

?? 「あら、目が覚めた？」

デュオ「ここは…」

そこには長い金髪の女性がいた。

?? 「教会よ。」

デュオ「教会…？俺は湖の近くでぶっ倒れてたはずだが…」

?? 「ええ。そのぶっ倒れてた貴方を此処まで運んだのよ。」

デュオ「…：そうか…」

以前の…アリサと出会う前の俺ならば此処でこの人を殺し、逃げていただろう。しかし今の俺にはそんな事は頭に浮かばなかった。

デュオ「…アンタは…」

?? 「私？私はこの教会でシスターをしているカレンと言うの。宜しくね。」

デュオ「…デュオだ…」

カレン「デュオ…貴方の名前？」

俺は無言で頷いた

カレン「意味は二重奏ね…いい名前じゃない。」

ガチャ…

誰かが部屋にはいつてきた

カレン「あら神父様、どうされました？」

神父「ん、いや…少年が目覚めたかな〜と思ってね。」

神父は五十代後半だろうか…？頭は白髪が濃くなっている。

カレン「あら、この子なら今日を覚ましましたよ。」

デュオ「どうも…。」

神父「わっはっはっは！そんなに堅くしなくてかまわんよ！」

デュオ「わかった…」

豪快な人だなオイ。

神父「少年、名はなんという？」

デュオ「デュオだ。」

神父「デュオか…いい名だ！」

カレン「それにしても…どうして湖の近くで倒れてたの？」

デュオ「三週間ともに食い物食って無かったからな。」

カレン「一体何をしてたのよ…家出？」

デュオ「家出する家なんざねえよ……………生まれた時から…」

カレン・神父「……………」

デュオ「ずっと世界中を旅してるからな。」

神父「1人でかい？」

デュオ「…………二三年前ぐらいにはもう1人いたが…死んじまった。」

カレン「そう…大変ね……………で…スッゴい気になってたんだけど…貴方…何歳？」

デュオ「10歳だが？」

カレン「にしては…」

神父「ずいぶん大人だなあ…」

デュオ「まあイヤでもそうなるさ。修羅場も少しは潜り抜けてきたしな。」

カレン「そう…」

デュオ「まあ助けていただいたのは有り難いが…直ぐにまた旅に出ることにする…」

神父「待ちたまえ。暫く此处で暮らしてみてはどうかね？」

デュオ「此処で？俺がか？」

神父「そうDA。」

デュオ「最後の一文は突っ込まない方針で行くぞ……。……………（まあ……いいだろう……）わかった。暫く世話になる。」

カレン「そうと決まったらまずみんなを連れてこようかしら！」

デュオ「みんな？」

神父「親がいない子供達なんかをこの教会で育ててるのさ。」

デュオ「なるほど。何人位居るんだ？」

神父「今は5人だよ。デュオを含めたら6人だけだね。」

デュオ「フン……まあ俺にはどうも出来んな……。」

ドーン！！

デュオ「なんですかア！？一体イ！？」

続くっ！

第20話 追憶ノ二十

ドーン！！

デュオ「なんですかア！？一体イ！？」

？？1「ドーン！ってドアを思いっきり開けてみたりイ！」

？？2「オイオイ…危ねえだろうが…やめろ…」

？？3「まあいいじゃない。」

？？4「よくないだろ…」

？？5「危ない…ダメ…」

デュオ「神父サン…さっき言って子供達ってのは…」

神父「そ、彼らだよ。」

デュオ「……マジかよ……」

カレン「マジよくみんなく自己紹介してあげてく」

？？1「私の名前はね！ミカっていうんだよ！で、としは5歳なの！」

ずいぶんテンションたけえなオイ

?? 2 「…レオンだ…一応10歳だ。」

俺と年齢は同じか

?? 3 「私はアキ。11歳よ。」

一つ上か

?? 4 「僕はシン。8歳だよ。」

何か眼鏡掛けてるせいか賢そうに見えるな。

?? 5 「ミキ…5歳…」

…もともと無口なのか？ミカに似てるが目が死んでるな…なんかあったのか？

ミキ「目はもともとこんな目…無口ではなく喋るのが苦手なだけ…ミカとは姉妹…」

コイツっ！心読みやがっただと！？

ミカ「お兄ちゃんは何て名前なの？」

デュオ「俺か？俺はデュオ。年は10だ。」

レオン「何だ、俺と同じか。俺より上かと思ってたな。」

デュオ「俺ってそんなに老けてるのか…？」

レオン「そういう意味じゃない。雰囲気とか：オーラと言うか：なんか“子供”と言うよりは既に“完成した”と言う感じがする。」

シン「あれだね、“見た目は子供！頭脳は大人！”的なやつ？」

アキ「名〇偵コ〇ンだね。」

デュオ　レオン「……………」

デュオ「暫くすれば出て行くが：まあこれから暫くは宜しく頼む。」

続く…

第21話 追憶ノ二十一

デュオ「ハア…何やってんだ…俺は…」

俺は既に1ヶ月近くここに住んでいる。

俺としちゃアまた旅にでてアイツを探しに行きたいンだがなア…

デュオ「まアいいか。」

と言って俺は再び本を読み始める。

アキ「あら、何読んでるの？」

デュオ「量子力学。」

アキ「…何それ……」

デュオ「読まない方が良いぞ。アキが読んだら頭がパンクするからな。」

と言うか俺以外此処には誰も分らん気がする

アキ「…それ面白いの？」

デュオ「俺にとってはな。」

アキ「ふーん…どれどれ……何コレ…」

この本には計算式やら色々書いてるので大抵の人には理解出来ない。

デュオ「読んでたら頭パンクすんぞ。」アキ「みたいね…」

そして俺は再び本を読み始める

シン「やあ、お兄さん。」

デュオ「ん、シンか。」

シン「何を読んでるのかな？」

デュオ「相対性理論の本。」

シン「アインシュタインのアレだね。面白い？」

デュオ「俺にとってはな。」

シン「ふーん：ねえ、その後で貸してくれないかな？」

デュオ「良いけどよオ：お前理解出来るのか？」

シン「分からなくても読んでいれば楽しいのさ。それに読んでいれば理解も出来るだろうしね。」

デュオ「わかった。後で部屋に持って行ってやるよ。」

シン「ありがとう。お兄さん。」

ミカ「ねえねえ！お兄ちゃん何読んでるの？」

デュオ「ダーウィンの進化論等の本。」

ミカ「：よく分かんない：。」

デュオ「分かんなくていい。」

ミカ「何でえ！？」

デュオ「もう少し大きくなったら分かる。」

ミカ「じゃあその時はミカに貸してね！」

デュオ「わかった。」

ミキ「…何を読んでいるのですか…？」

デュオ「マイクロ波技術の本。」

ミキ「何ですか？マイクロ波技術とは？」

デュオ「…超簡単に言えば電子レンジの本だ。」

ミキ「ミキに理解出来ますか？」

デュオ「今は無理だな。…読みたいか？」

ミキ「…いいです…。」

デュオ「まあもう少し大きくなったら貸してやるよ。」

ミキ「分かりました。…その時は宜しくお願いします。」

デュオ「あと別に敬語でなくていいからな…。」

レオン「おいデュオ。何読んでんだ？」

デュオ「レオナルド・ダ・ヴィンチの手記に関するどっかの誰かの論文。」

レオン「んな物面白いのか？」

デュオ「俺にとってはな。」

レオン「ふーん…お、そろそろメシの時間だな。」

デュオ「ん、そうか。なら行くか…。」

レオン「今度その論文貸してくれ。」

デュオ「ああ。」

続く…

第22話 追憶ノ二十二

現在夕食中

デュオ「あのさア…シスター…しょっちゅう言ってるけどさア……
……料理美味いんだけど………」

カレン「…なに？」

デュオ「味付けが濃すぎるんだよオオオオオオオオ！！」

カレン「そう？」

デュオ「美味しいのになんでこんなに味が濃いですかアアアアアアアアア！！」

カレン「？薄くしたつもり何だけど…」

デュオ「そして…なんでコンソメスープがこんなに味が濃いですかア！？おかしいだろ！どんな作り方したんですかアアア！？」

カレン「いいじゃない。不味い訳じゃないし、食べれるし。」

デュオ「メチャメチャ体に悪いわアアア！血圧メツチャ高くなるわアアアア！」

で。

デュオ「ハア…」

レオン「全く…お前…もう諦めろ…」

デュオ「いや、あんな料理食い続けてたら早死にするぞ…」

レオン「同感だ…」

デュオ「全く…」

レオン「いまだに全員…シスター以外は慣れてないから…」

デュオ「他に誰か作れるヤツいないのか？」

レオン「アキが少し作れるが…ぶっちゃけあんま美味くない。」

デュオ「分かった…明日は俺が作ろう。」

レオン「お前料理作れんのかよ…」

デュオ「当たり前だ。世界中の料理を喰ってきたしな、それなりに味は色々知っている。」

レオン「んじゃ期待出来そうだな。」

デュオ「期待し過ぎない方が良いぞ。」

続く…

第23話 追憶ノ二十三

まさかの三ヶ月すっ飛ばして只今8月

デュオ「……。」

俺は相変わらず暇なときは1人で本を読んでいる。

ちなみに他のは学校だ…

え？俺か？そりゃあ…

学校に行く必要なしなのでサボって屋上で本を読んでいるのさ

まあ2日に一回は学校に行ってるが

ちなみに今はと○る魔○の○書○録第3巻を読んでいる。

デュオ「……この本前に読んだな…」

って俺はドナルドかよ…

デュオ「……眠い。……………ZZZZ………」

そのまま寝てしまった俺。

で

アキ「こんな所に居たのね…」

デュオ「ん…アキか…寝過ぎたな…」

アキ「いや…いくらアンタが異常なまでの天才で下手に動いたら学校の歴史に残るようなことしかやらないから半ばサボりを黙認されていてもね…」

デュオ「二日に一回は出てるだろうが。」

アキ「ハア…もう良いわ…帰るわよ…早く夕食作ってよね…」

そう。今は俺がシスターとアキ、最近では他のメンバーに料理を教えてるのだ。

ちなみに一番美味しい料理を作ったのはシン。俺の予想以上に飲み込みが早く、いいセンスだ。

で。

デュオ「えー…今回は、ハンバーグの作り方を伝授します。まずー玉ねぎ等の野菜を軽く炒めまーす。次にこれを冷まして挽き肉を用意して卵、パン粉、塩胡椒、少しの牛乳を入れてひたすらこねまーす。んでこの冷ました野菜を入れてさらにこねまーす。で、形にして、中央をへこませまーす。んで次はフライパンに少し油を引いて焼いて行きまーす。蓋して暫く待って竹串とかを刺して赤い汁が

出なくなったらさらに盛り付けてソースをかけて出来上がりー。」

全員「おおー！！！」

デュオ「作り方メモったかー。じゃーたべるぞー。」

以下すっ飛ばし

続く…

第24話 追憶ノ二十四

さらに1ヶ月。

デュオが教会にやって来て半年。

デュオ「クソっ…！なんでこんな事につ…！」

何でアイツ等が誘拐されちまうんだよ！

犯人は超タチの悪いギャングだと…！

………仕方ない…

奴ら等全員

ぶち殺す…

で、俺は教会の地下で魔剣なるものを発見した。そこには

リベリオン

と彫られていた

しかし問題がある

一部が電波なのだ

デュオ「ゼロ、これは…」

ゼロ『電波だな。一部が。』

デュオ「だが…アイツ等を助けるためだ！使わせてもらう！」

俺はリベリオンを床から抜きはなった。

すると

デュオ「ガアアアアアアアアアアアア！」

凄まじい衝撃を全身に感じ、頭に何かわからない情報が流れ込んできた。

デュオ「ハア…ハア…ハア…ハア…なんだア…今のは…電波…変換…？」

ゼロ『俺にも同じ単語が流れ込んできた…』

デュオ「そんな事よりアイツ等を！」

俺は走った

ただひたすら

走った

一応神父が警察には連絡したが無駄だろう

俺には分かる

リベリオンを抜いた時に大量の知識と記憶が流れ込んできた

悪魔

天使

死神

神

それらが遙か昔、この世界に現れたコト

神と天使が悪魔と戦ったコト

1人の死神がその戦いを止めたコト

そしてこの魔剣にはそれら全てが凝縮されているコト。

そして…それらは…電波体だったということ。

そして再び天使と悪魔が戦うためにこの世界に現れたこと

そして誘拐犯たちは現れた悪魔に取り付かれていること。

戦うために電波変換しなければならないこと。

他にも色々流れ込んできたが今はこんな物だろうか。

とにかくそれだけ分かれば十分だった

暫く走った

クソヤロウどもがいるところにたどり着いた

デュオ「此処か。」

ザシュ！ザシュ！

ドアをリベリオンで切り裂いた

ドォーン！

ドアを蹴り飛ばした

デュオ「よォ、クソヤロウドモ。」

悪魔A「魔剣！」

悪魔B「それを！」

悪魔C「よ！」

悪魔D「こ！」

悪魔E「せ！」

デュオ「なんだその連携プレー…あれか？悪魔はボケ担当か？」

悪魔達「違うわっ！」

デュオ「あーはいはい…さっさとそいつ等返してもらおうか。こんな剣くれてやるからさ。」

悪魔A「ならばまず魔剣をよこせ。」

デュオ「はぁ？そっちが先に返せよ。」

悪魔A「待て、同時に交換だ。それなら良いだろう。」

デュオ「良いだろう。」

悪魔A「オイ、行け。」

悪魔C「何で俺？」

悪魔A「ゴタゴタ言うな！さっさと行け！」

悪魔C「はいはい…」

デュオ「せーので交換だ。行くぞ…せーの！」

ブンッ！

投げ渡したりリベリオンはと言うか投げつけたリベリオンは悪魔Cを串刺しにした

デュオ「ゼロ！」

ゼロ『ハアッ！』

ザシユザシユザシユザシユザシユ

ゼロが悪魔Cをゼットセイバーでズタズタに切り裂いてリベリオンを抜き、デュオに渡す。

悪魔A「貴様！」

デュオ「最初からてめえらに魔剣を渡すつもりなんざねえんだよ！」

ゼロ『と言うわけで。』

デュオ「全員死刑（笑）。」

悪魔A「（笑）じゃねえよ！」

ザシユザシユザシユザシユザシユザシユザシユザシユ
ザシユザシユザシユザシユザシユザシユザシユザシユ
ザシユ
！

超神速の太刀筋を並みの悪魔ごときに捉えられる訳はなく

悪魔達「「「「「ギヤアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアア！！！！！」」」」」

全員斬殺

デュオ「弱っ！」

続く…

第25話 追憶ノ二十五

デュオ「弱っ！」

??「当たり前だ。アイツ等は雑魚だからな。」

先ほどの悪魔よりふた周りは大きな悪魔が現れた。背中には禍々しい翼がついている。

デュオ「なる程：貴様がリーダーと言ったところか：ならば：お前を：殺す：！」

??「フハハハハ！それは不可能だ人間よ：確かにリベリオンのような剣：今は電波とよばれている物であれば確かに我々にダメージを与えられる。しかし！その電波にも強さが存在する。」

デュオ「そりゃそうだなア。」

悪魔「そして我々にも強さがある。つまり攻撃する側の電波が攻撃を受ける側の電波を越えていなければダメージを与えられん。そしてリベリオンは長い間電波を浴びていなかったが故に昔ほどの力はありません！故に我には攻撃しても無駄！」

デュオ「ゴタゴタうるさいな。殺してやるからさっさとかかってこい。」

ゼロ『：悪いが貴様と遊んでいる時間はない。悪魔は即斬殺、略して悪即斬だ。』

悪魔「オイ待て！赤いの！それは絶対に言っちゃいかんセリフだ！
パクリだろ！どこの新撰組三番隊組長だ！」

デュオ「うるさい。死ね。」

デュオはリベリオンを右横薙に振るった

悪魔「ハッ！」

悪魔は高くジャンプする事で回避した。さらに悪魔は右手から稲妻を発生させ、それを剣に変えた。

悪魔「ハアアアアアア！」

デュオ「くっ！」

ガキイン！ガキインガキインガキインガキインガキインガ
キインガキインガキインガキインガキインガキインガキイ
ンガキインガキインガキインガキインガキインガキイン！

何度も斬り結んで互いの剣がぶつかり合う。

悪魔「ほう：弱ったりベリオンで互角の戦いか：貴様は剣術を会得しているのか？」

デュオ「いや、我流だ。」

悪魔「ふむ：ならば我も本気を出すでしょう。ハアアアアアアア
アアアアアアアアアアア！」

デュオ「ならば…ゼロ。アレやるぞ。」

ゼロ『了解。』

デュオ「電波変換！」

赤い光に包まれたデュオ。その光が消えた場所に髪が黒いゼロがたっていた。右手にはリベリオンが、左手にはゼットセイバーが握られている。

悪魔「…その力は…かつて我々を止めた死神の力の遺産…我々と人間を融合させる…良いだろう！相手にとって不足はない！オオオオオオ！」

悪魔は右手の剣を大型化し、左手に小型の盾、さらに縦に鞭のような武器を装備し、体の色が灰色から鮮やかな緋色にかわった。

悪魔「我的名はスパイダ。貴様は何という名だ？」

デュオ「俺はデュオ。」

スパイダ「デュオ…さあこの戦い…決着をつけようではないか…」

デュオ「俺もそのつもりだ。」

スパイダ「我は生涯この戦いを…貴様…いや…デュオ…お前を忘れぬ！」

デュオ「俺もそのつもりだ…だが…どちらか一方は必ず死ぬ…さあ

…お喋りの時間は終わりだ。」

スパード「行くぞ！ウおおおおおおお！」

デュオ「オおおおおおおお！」

ザツ…シャキーン！

すれ違いざまに斬り…

スパード「見事…」

スパードは倒れた。

デュオ「…ハア…ハア…ハア…ハア…」

スパード「我はもう死ぬな…デュオよ…お前のような男と最後に戦えて…誇りに思う…」

デュオ「気が変わった。」

デュオはリベリオンを振り上げ、剣の腹でスパードを抑えた。

すると。

スパード「むっ…ぐっ…」

リベリオンに吸い込まれた。

デュオ「リベリオンは唯一悪魔、天使、死神、すべての力をコントロールできる剣。しかしコントロールは難しい。ならば悪魔、天使、死神、それぞれを直に入れて力をコントロールすればいい。」

スパイダ「で、我に悪魔の力をコントロールせよと。」

デュオ「そうだ。」

スパイダ「こちらからお願いたいくらいだ。よろしく頼む。」

デュオ「こちらこそ。よろしく。」

さあ…

みんな…

帰ろう…

続く
…

第26話 追憶ノ二十六

一週間後……

デュオ「明後日……ここを出て行く……」

[illegible]

デュオ「もともと1ヶ月で旅にまた出るつもりだったんだ…それにやらなきゃならない事が出来たからな…」

カレン「そう言えば旅人だったわね……貴方……」

神父「ついにこのときが来たか……」

ミカ「もうあえないの？」

ミキ「行つて欲しくない…」

シン「やつぱり…」

アキ「何で今なのよ！」

レオン「……」

デュオ「：俺がここに居るとどうも事件が起こる。でもな：俺たちは必ずまた会える。」

レオン「ならば別れを悲しむ必要はないな。」

デュオ「まあ：何年かに一回はここに遊びに来るわ。」

で。

色々すっ飛ばして明後日

デュオ「さて：行くか。」

デュオは階段を下り、下へ向かった。
するとみんなが待っていた。

デュオ「さて：とりあえず生活に必要なと思われる事はだいたい教えた、だがもしも分からなくなったときのために本にしておいた。」

神父「ありがとう、デュオ。」

カレン「元気でね。」

アキ「ちゃんと会いに来なさいよ！」

シン「本：ありがとう。」

ミカ「行かないで〜！」

ミキ「止めても無駄なのは分かってます。だからまた会いに来て：〜」

レオン「……また会おう！」

デュオ「じゃあな！」

ゼロ「で？これから何処へいく？」

デュオ「さあな。」

スパーダ「宛のない旅か…」

デュオ「いいじゃねえか…目的はあっても目的地が無い旅…」

ゼロ『悪くはないな。』

スパーダ「そうだな。」

デュオ「さて…行くか！」

これで追憶編は終わり…

次章へ…続く…

第26話 追憶ノ二十六（後書き）

第三章を振り返って…

……………パクリばかり…

最初の方は新起動戦記ガンダムW Episode Zero

最後の方はデビルメイクライのパクリと言う…

そもそも追憶編とか追憶ノ…とかがるろうに剣心追憶編のパクリ…

実はこの第三章は35話まで存在しましたが…

長いしそんなに重要じゃないしむしろいらねえし別に要らんだろ…

と思ったので抹消しました

さて…そろそろ第四章を書き始めますか…

では…また次章でお会いしましょう。

さようなら…

第四章 『久々に日常』 第1話 天使と悪魔

現在暇を持て余している二人

スバル 「なんか暇だね…」

ミソラ 「確かに何もないからね」

ロック 「じゃあウイルスを倒しに…」

ハープ 「だまってなさいガサツ！」

バコッ！

ロック 「あぐぼあ！」

スバル 「相変わらずだね…」

スバル 「天使と悪魔と死神…」

ミソラ 「実在するなんて思わなかったね…」

スバル 「てか何で悪魔と死神と天使が電波なんだろう。」

ミソラ「メールか電話で聞けば？」

スバル「じゃあメールで聴いてみるよ。」

デュオ「すいません…本当にすいません…」

アリサ「何で全部話してくれなかったの！」

デュオ「いや…危険な事に巻き込まれなかったの…」

アリサ「知らなかったよ！特に最後の方！」

デュオ「…そこに関しては…俺が1人で解決したかったんだ…」

アリサ「じゃあなんで…みんなに話したの？」

デュオ「アイツ等の覚悟を感じたんだ…この前の戦いで…」

アリサ「覚悟…」

デュオ「仲間を…世界を…命懸けで守る覚悟…それを感じたんだ。」

アリサ「…まだ話してない事は？」

デュオ「…強いて言うなら天使と悪魔と死神がなんで電波かと言うこと。」

アリサ「それはいいわ。聴いても分かんないし……気にはなるけど…」

デュオ「そもそも電波と言う物が奴らの物質だからな…たまたま電波を人間が見つけただけで実際は遙か昔から存在していた…で人間がそれを利用してるだけだ。」

アリサ「それ以前に天使とか悪魔とか死神が実在してたところが一番びっくりよ…」

デュオ「まあ俺も驚いたな。」

P R R R R R !

ゼロ『メールだ。』

デュオ「誰からだ？」

ゼロ『スバルからだな。』

デュオ「……なんで悪魔とか死神とか天使とかが電波なのか教えて貰えませんか？だど…」

で、さっきと同じなので省略

スバル「あ、返事返ってきたよ、ミソラちゃん。」

ミソラ「見せて見せて！」

メール

それは電波自体がもともとアイツ等の物質だったからだ。

ちなみに電波は地球が出来たぐらいからアイツ等戦ってたからそれくらいからある物質だ。

アイツ等は地球どころか宇宙中に行ってるからウォーロックとかは…まあなんか関係あるんだろ。知らんけどな。まあ人間はたまたま見つけただけの電波を利用してただけだ。

わかりやすく天使と悪魔と死神を説明するならウォーロックとかハ
ープみたいなもんだ。能力とかは桁違いだな。

要は天使も悪魔も死神も科学的に説明出来ちまう存在ってことだ。

以上

分かんなかったらまた聴いてくれ。

P・S 長いのを省略してるので微妙違うところがあるがそんな
もん語ってたら日が暮れちまうので省略した。

スバル「だってさ。」

ミソラ「日が暮れる程長い話してどんな話なの…」

スバル「しかも科学的に説明可能って…」

ミソラ「何だろう…夢を壊された気分…」

P R R R R R R !

スバル「またメールだ…」

メール

言い忘れてたがこの話を女にすると夢を壊された気分になって、下手すりゃかなり落ち込むからお前の彼女にあんま言わない方がいいかもな。

スバル「……………心読まれた…?」

ミソラ「……………読まれてるね…。」

スバル「メール送ったところ…手遅れでした…って…」

続くっ!!

第四章 【久々に日常】第1話 天使と悪魔（後書き）

HAHahaha! 後書きルーム! 復活だ! ゲストはア! デュオ&スバル君だっぜ!

デュオ「作者、動くなよ。」

なんだア?

デュオ「ハッ!」

危ねえな! いきなりリベリオンで斬りかかるな!

デュオ「うるさい。デビルメイクライからパクリ過ぎだ。」

仕方ないだろ! デビルメイクライに今ハマってんだからよオ!

スバル「何故に喋り方が一方通行!?!」

デュオ「確か俺の喋り方も一方通行みたいになされてたシーンあったなア…よし! お前斬殺!」

スバル「駄目ですよ! 殺しちゃ!」

スバルクウウウウン! 有難う!

スバル「殺したらボクらの存在消えますから半殺しにしときましよう」

テメエエエエ！

一氣に地獄に落としかつたなアアアアアア！

デュオ「なる程、ならばくたばれ。」

ブンツ

無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄
無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄
無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄
無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄
無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄

食らえ！昇竜拳！

バ
ゴ
ツ
！

デュオ「がはっ！」

スバル「あ……」

さーてお前ら……贖罪の時間だ……とりあえず一発食らつとけやあアアアアアア！

バゴツ！バゴツ！

二人「ギヤアアアアアア！」

全く…では次回でお会いしましょう。さようなら

第2話 システム（前書き）

今回もパクリだっぜ！

第2話 システム

なんかかんやで6月末。つーか前話から6月末だが

土曜日

スバル「Z Z Z Z…」

ミソラ「起きろーっ!!」

相変わらず起きられないスバル。

スバル「Z Z Z Z…」

ミソラ「起きろーっ!」

スバル「うー…土曜日なんだからもう少し寝かせて…」

ミソラ「何言ってるの! もうお昼だよ!」

スバル「ええええええええ!」

ミソラの言葉で一瞬で目覚めたスバル。

ミソラ「嘘だよ♪まだ8時前だよ♪」

スバル「……お休み…」

ミソラ「って寝ちゃダメエエエエ!」

スバル「Z Z Z Z Z……」

ミソラ「…仕方ない…アレをやろう…」

ミソラはスバルの鼻をつまんで、自分の唇でスバルの唇を塞いだ。

スバル「……！！！！んー！」

ミソラ「ぷはあ！」

スバル「ハア…ハア…ハア…や、やめてよ…こんな起こし方は…ミソラちゃん…」

ミソラ「スバル君が起きないの悪いんでしょー！」

スバル「す、すいませんでした…」

で。

スバル「で…何でまたこんな朝早くに起こしてくれたの？」

ミソラ「んー…ただ単純にスバル君と一緒にいたかったから♪」

スバル「…今日暇極まりないよ？」

ミソラ「じゃあどこかに出掛けよう！」

スバル「うん、で…どこ行くの？」

ミソラ「…どこ行こうかな…」

ウォーロック『じゃあバト『アンタはだまってなさいガサツ！』

バゴツ！

ウォーロック『グハッ！』

スバル「じゃあ散歩でもいく？」

ミソラ「そうしょっか！」

で。

スバル「さて、行こうか。」

ミソラ「うん！」

デュオ「悪いな…手伝ってもらって…」

アリサ「いいのいいの！私も買い物に行きたかったし。」

デュオは大量のカロリーメイトとウイダーと水とガムと缶コーヒーとゴミ袋を購入していた。

アリサは普通の買い物だが。

で、ということかつつと

デュオ「しばらく作業で部屋にこもるから買い物に行ってくる。」

と言い出して

アリサ「あ、私も買い物に行く。」

と言った感じである

アリサ「それにしても部屋に籠もってなにをするの？」

デュオ「ゼロトリベリオンの調整だ。一部パソコンを使うから部屋に籠もって作業するんだ。」

アリサ「ふーん…なんかよく分かんないけど頑張ってね。」

デュオ「ああ。」

スバル「あれ？デュオさん？何してるんだろう？」

ミソラ「行ってみよう！」

スバル「ええええええええエエ！」

スバルはミソラに引きずられて行った。

ミソラ「こんにちは！」

スバル「イタタタ…こんにちは…」

アリサ「こんにちは。」

デュオ「ああ…」

ミソラ「…どんだけカロリーメイトとかウイダーとか買ってるんですか…」

スバル「缶コーヒーやガム…水まで…」

ちなみに一種類ずつダンボール箱半分くらい購入。

デュオ「マア…しばらく部屋に籠もってゼロとリベリオンの調整をするからな。こんだけ買ったときゃしばらく持つだろ。」

スバル「な、なる程…」

デュオ「さて…始めるか。」

ゼロ『調整と言うか武器の複製と改造だろ…』

デュオ「しかもリベリオンに関しては嘘だな。」

ゼロ『じゃ何するんだ？』

デュオ「コイツを完成させるのさ…」

デュオはパソコンにハンターV Gを接続し、CD-RWを挿入した。
画面に膨大なデータが表示される。

ゼロ『……これは…！』

デュオ「コイツを完成させなければこれから起こる戦いには生き残れんだろう。」

ゼロ『こんな物…まともな人間には絶対に耐えられる訳がない！』

デュオ「“まとも”な人間にはな…確かにこんなシステムは使うことは出来ん…おそらくコイツを扱えるのは今となっては俺だけだろうな。」

ゼロ『お前…もう人間を越えてるな…』

デュオ「“もう”じゃない。だいぶ前からだ。こいつを使いこなせるようになったのは八歳だからな。」

ゼロ『完全勝利システム（パーフェクト・ヴィクトリーシステム）…か…』

デュオ「少し違うな。コイツはその戦闘における“全て”の結果を予測し、使用者に見せる。……まあコイツ使ったら確実に勝利してしまうがな。完全勝利システムと言っても過言ではないな。」

ゼロ『全て…まさか…!』

デュオ「そう、当然使用者の敗北、死、仲間の死、自分が仲間を殺してしまう…などの結果も当然脳に直接叩きつけられる。」

ゼロ『さらに行動をシステムが動かす…』

デュオ「当然マトモな人間が使うできない。使いこなすには割り切るか、精神力でシステムを自分の制御下に置いてしまうか…あとは………脳をいじくり回すぐらいか。ちなみに俺は二番目だ。」

ゼロ『ちなみにそれはどうやって戦闘中につかうんだ?』

デュオ「ボタン一つで即発動だ。さて…ここから難しいから真剣にいくか…」

カタカタカタカタカタ…

静かな部屋にキーボードを叩く音が響く…

デュオが作っている物それは……

それは…完全勝利と同時に最高の絶望を与えるシステム…

それをデュオ以外に使える者はいるのだろうか…

続
く
っ
!
!

第2話 システム（後書き）

HAH h a h a h a h a ! ! 後書き r o o m の時間だア ! ! 今回のゲストはミソラちゃんだっぜ !

ミソラ 「何故に私？」

うん、まあ話を聴いてくれ。

ミソラ 「はいはい。」

俺の中学の時の友達がな、ギターをやり始めたんだわ。

ミソラ 「うんうん。」

で、ソイツはドラムが上手いんだが…何とかなるもんなのかねえ…
と思ってな。

ミソラ 「何とかなるんじゃない？ 本人はやる気あるんでしょ？」

やる気150%らしい。

ミソラ 「じゃあ大丈夫だね。多分。」

で、問題はここから。

そいつ…もともと高校で軽音楽部に入りたかったらしいんだが…生憎そいつの高校に軽音楽部がなくてな…

なんかかんやで…

あのアニメみてから俺にやたら語ってくるんだよ…さらには…

俺が軽音楽部を作る！

とか言い始めたんだわ…どうよ…コイツ…しかももしも作れたらアニメみたいになるとかほざき始めたんだ…どう思う？

ミソラ「いや…どうって言われても…頑張ってとしか言えないよ…」

だよねえ…

じゃあ今回はここまで…さようなら…

ちなみに実話です

第3話 完成…（前書き）

あるえ？なんかやっぱリスバル君達の出番少ないような…行き当たりばったりだから仕方ないか

デュオ「さーて：ゼロを：足を壁走りが出来るようにして：目をゼロ・アイの機能を組み込んで：腕にロケットパンチを：『それは止めろ！ロケットパンチは被る！』」

デュオ「あ、そうか。じゃあやめとこう。」

デュオ「さて…武器で組み合わせで新しい武器が作れるか…試してみるか…」

力タ力タ力タ力タ力タ力タ力タ力タ力タ力タ力タ力タ
力タ力タ力タ力タ力タ力タ力タ力タ力タ力タ力タ力タ
力タ力タ力タ力タ力タ力タ力タ力タ力タ力タ力タ力タ
力タ力タ力タ力タ力タ力タ力タ力タ力タ力タ力タ力タ

デュオ「よし。ゼロ、やってくれ。」

ゼロ『了解…』

デュオ「トリプルロッドとチェーンロッドとリコイルロッドの組み合わせで刃が二連の大鎌をつくる…成功か？」

ゼロ『使えるが…刃の湾曲が足りないな…』

デュオ「む…ならば…」

カタカタカタカタカタ…

デュオ「コレでどうだ？」

ゼロ『傾かせすぎだ。』

デュオ「む…なら…」

カタカタカタカタカタカタカタカタカタカタ…

デュオ「これでどうだ？」

ゼロ「完成だ。」

デュオ「よし、次。バスターショットとチェーンロッドの組み合わせ。チェーンショット。（命名、デュオ&ゼロ）」

ゼロ『オイこれどつかでみた感じの武器だが…どう見てもフツ○シヨツ○だろ…』

デュオ「……そこスルー推奨…」

で

デュオ「よし…全部終わった…今何時だ…?!？」

現在日時…6月25日午後5時16分

デュオ「…アレ?…ってこの時計壊れてるうーっ!」

ちなみに本当の日は6月30日午前5時20分26秒…27…28…29…30…

デュオ「細かい!」

気にすんな

閑話休題

で

アリサ「うるさい！」

デュオ「す、すまん…」

アリサ「今何時だと思ってるの！」

デュオ「わからん…時計壊れた…」

アリサ「朝5時よ！朝5時！」

デュオ「…すまん…今何月何日だ？」

アリサ「6月30日！」

デュオ「って事は俺一週間作業して五時間しか寝てないのか…」

アリサ「ちゃんと寝なさいよ…」

デュオ「大丈夫だ。問題ない。今から寝るから。終わったし。」

アリサ「じゃあちゃんとベッドで寝なさい！」

デュオ「……やっぱり？」

アリサ「あ…当たり前でしょ！／／／／」

デュオ「わぁかったよ…」

デュオ「かなりくつついてくるが…どうかしたのか？」

アリサ「何でもない！／／／／」

デュオ（そうか…寂しかったんだな…）

ギュッ

アリサ「！？」

デュオ「すまん…一週間も部屋に閉じ籠もって…寂しかったんだよな…」

アリサ「え！？あ…いや…その…／／／／」

デュオ「寂し…かったん…だ…Z Z Z Z Z…」

アリサ「もう……………」

続く…

お休み…
デュオ

第3話 完成…（後書き）

H A H A H A H A H A ! 後書き r o o m の時間だっぜ！

今回のゲストは…アリサだっぜ！

アリサ「よく考えたら私ここにくるのは初めてなんだけど。」

あー…それはなー…俺が勇気が無かったんだ…

アリサ「何で？」

マトモに女性と関わった事が無いものでな…どうすりゃいいかわからなかったんだよ…で、今回勇気を出して書いてみたんだよ

アリサ「ふーん…」

で？どうなんだよ、デュオの過去を知って。

アリサ「そりゃビックリしたわよ…でもね…全部私達に話してくれたって事が嬉しかったな。以前は一人で背負い込んでしまってたけど…今は変わったからね…」

ラブラブだしな

アリサ「……／／／／／／／／」

いいじゃねえか…マトモに女性と関わった事が無い俺なんざどうしていいかわからなくなるだろうしな。…ちなみにこーゆー二人の場

面は色んな所から参考にしたり、俺の頭の中でイメージしたものだっぜ。

アリサ「しかも作者さんは男子校だよね。」

そうだぜ！ H A H A H A H A H A H A H A H A H
A H A H A ! ハア：

でも来年から共学になるんだよね……ウチの高校……俺ら関係ないけど……

アリサ「アハハ……が、頑張ってね……」

おつと時間だつぜ。今回はここまで。では次回までくさようならく

第4話 ヤバい!ヤバいつて!! (前書き)

意味不明なサブタイ…

アリサ「やばいよぉーっ！何て説明したらいいのぉーっ！？」

デュオ「とりあえず…」

作戦A

正直に話す。

作戦B

俺が身を隠す

作戦C

とりあえず行き当たりばったりで

アリサ「いや、作戦Cおかしくない!？」

デュオ「そこスルー推奨! ってんなことやってる場合じゃねえエエエエエエ!!!」

アリサ「…もう…正直に話そう…かな…」

デュオ「あー…そう言えば俺、一回会ってるんだよな…」

アリサ「そう言えば…確かに…わ、私が初めてキスしたときに…／／／／／」

デュオ「……………」

なんとも言い難い空気が流れた：

で

スバル 「…ミソラちゃん…何故に僕の上で寝てるの？」

ミソラ 「なんでだろうね〜♪」

スバル 「いや、一緒には寝たけどさ…」

ミソラ 「私寝相悪いからかな〜♪」

スバル 「今までそんな事無かったでしょ…」

ミソラ「じゃあたまたまだよ〜♪」

スバル「はぁぁ…」

ミソラ「アハハ〜♪」

スバル「ううう…体中が痛い…」

続くっ！

スバル「え！？今回これだけ！？」

YES！

第4話 ヤバイ！ヤバいつて！！（後書き）

ゆるめ〜じゃないあれもこれも〜♪

その手〜でドアを開けましよう〜♪

祝福が欲しいのなら〜

悲し〜みを知りひとり〜泣きましよう♪

そしてか〜がやくウルトラソウル！！！！

スバル「何やってんの作者さん…」

ウルトラソウルを歌ってるのさ！

スバル「何故に？」

昨日カラオケに行ってきたからな。

一昨日テスト終わったし。

七時間ぶっ通しで歌い続けたぜ。

スバル「…喉大丈夫？…」

大丈夫だ。問題ない。

中学の時の校内音楽会の練習の方がハードだったからな。

スバル「一体どんな練習だったんだ…」

知りたいか？

スバル「うん。」

まず練習時間が二時間以上。

合唱なので一人微妙にミスただけで最初からやり直し。

休憩一切なし

声が小さいとやり直し

どうだ？一種の拷問だろ？

あ、でもこれ中3の話な。

何故か受験勉強よりみんな重要に思ってたみたいだな。

スバル「喉つぶれるね…確実に…」

いや、何故か絶対つぶれる寸前に練習終了なんだよ…

スバル「ヤバいね…」

ちなみに俺は中2まではクチパクだったぜい。

中3はマトモにやったけどな

おっと時間だ。ではまた次回、お会いしましょう。さようなら！

ウルトラソウルッ！！！！

第5話 両親、襲来（笑）（前書き）

サブタイが某アニメのパクリだけど気にしない

第5話 両親、襲来（笑）

デュオ「こっちは終わった！」

アリサ「こっちも終わった！」

デュオ「後やってないことは！？」

アリサ「え〜と…お昼ご飯の準備かな？4人分の。」

デュオ「よし、材料は俺が買って来る！行ってくる！」

約10分後…

デュオ「ただいまア！」

アリサ「速っ！！」

デュオ「電波変換で帰って来たからな！」

アリサ「何を作るの？」

デュオ「とりあえずカルボナーラだ。」

アリサ「え！？そんなの作れるの！？」

デュオ「ああ。余裕だ。」

アリサ「一応聴いとくけど…手伝うことある？」

デュオ「ああ。頼む。」

アリサ「わかった、どうすればいい？」

デュオ「まず……………」
「作り方知ってるけど完全に覚えてないので
すっ飛ばし

ピンポーン。

アリサ「来たーッ！」

デュオ「盛り付けとかやっとかから出といてくれ…」

ガチャ…

アリサ「はい…」

母「やつほー♪久しぶりー！」

アリサ「ママ！パパ！久しぶり！」

父「久しぶりだねー！元気してたかい？」

アリサ「うん！さ、入って入って！お昼ご飯作ってくれてるから！」

母「作ってくれてる？」

デュオ「お久しぶりですね…まだ覚えてますか…僕のこと？」

父「……あるえ……？どっかであつたかな…」

デュオ「七年前のシャーロ、と言えばおわかりになられますかね？」

母「ああ！もしかしてあの時アリサがキスした子！？」

デュオ「……………そうです……………おっと…、早く食べないと冷めてしまいますね。」

母「じゃあいただきますね。」

父「カルボナーラか…旨そうだなあ。」

4人「いただきます。」

デュオ以外「おいしー！」

デュオ「…まあまあだな……。」「

アリサ「これデュオが作ったんだよ。」

父「凄いな。今まであちこちで色んな料理を食べてきたけど一番美味しいよ。」

デュオ「ありがとうございます…。」

「「「いただきました。」」」

母「スツゴく美味しかったわ〜♪」

デュオ「ありがとうございます。」

母「ねえ〜この作り方後で教えてくれないかしら？」

デュオ「分かりました。」

母「で〜二人はどれくらいラブラブなの？♪」

アリサ「ちよつとオオオ！何て事聴いちゃってんのオオ！？」

アリサ「そろそろアレやっとか?」

父「そうだなゝそろそろやっとかゝ」

母「そうねゝ」

デュオ「アレ? 一体何が始まるんだ…」

アリサ「まあ見てたら分かるって!」

デュオ「バイオリンにフルートにどっから出したかわからないピア
ノ……」

アリサ「ま、聞いててよ。」

デュオ「ああ……」

演奏・・・開始・・・

その曲は優しい曲調だった

デュオ「・・・」

デュオはポケットからオカリナを出し、演奏に途中から入った。

デュオが演奏に入って暫くして、曲調が変わった

優しい曲調から、明るい曲調へ変わった。

と言うか、デュオが強引に曲調を変えた、と言った方が良いかもしれない。

そして

即興の演奏は終わった

アリサ「ふう…」

父「素晴らしい…」

母「凄いわね」

デュオ「……………」

父「即興の演奏を途中から入って自分の曲調へ周りを引き込んでしまうとは…」

母「天才ね」

アリサ「びっくりしちゃった」

つーか即興でかなりの演奏するアンタらも天才だ！

と言う声が聞こえてきそうだがスルー

で

父「じゃあそろそろ行こうかな。」

母「そうねー二人の邪魔しちゃ悪いしねー」

アリサ「ちょ、ちょっと！何その理由！！」

父「じゃあまた来るから」

アリサ「うん。じゃあね。」

母「あ、そうだ〜これこれ。」

一枚のチラシを渡されたアリサとデュオ

アリサ「…来週…演奏会！？」

父「そのために日本に来たんだ。来てくれるか？」

アリサ「絶対行く！デュオもね！」

デュオ「ああ。」

母「じゃあね」

続く…

第5話 両親、襲来（笑）（後書き）

HAHAHAHA!

後書きroom、guestはデュオ!

デュオ「くたばれ作者。」

ブンッ!

hoo!なんだ!俺なんかしたか!?

デュオ「手が滑った」

嘘付け!

デュオ「死ね」

ああ!?

デュオ「失礼、噛みました。」

違う!わざとだ!

デュオ「かみまみた。」

わざとじゃない!?

デュオ「垣間見た。」

なにを!?

デュオ「てめえの断末の瞬間。」

黙れ！

デュオ「とりあえず言わせてもらう。何故カルボナーラだ？そして何故オカリナだ？」

カルボナーラは俺が作れるからだ！マジでな！

オカリナも俺が吹けるからな！

まあオカリナの下りは暫くしたらどうでもいい話。シリーズで書く予定だ。

デュオ「そうか。ならいい。そしてくたばれ！」

ブンッ！

リベリオン振り回すな！

食らえ！飛天御剣流、龍翔閃！

デュオ「ぐはっ！」

全く：おっと、時間か、では次回、またお会いしましょう。さようなら！

第6話 **D a t e** (前書き)

超唐突で意味不明な始まり方ですいません

第6話 D a t e

始まりは前日の昼過ぎ。

ミソラが

「スバル君！明日デート行こっ！」

と言った瞬間だった。

スバル「あうううう…お…重い…」

荷物持ちをさせられてるスバルだった…

ミソラ「次は彼処にいくよ！」

スバル「うゝ…わかった…」

とりあえずヤシブに来ている二人。

到着0・5秒で行きたい所へ行ったミソラ

スバルは振り回されていましたとき。

しかしスバルはあまり悪い気はしていなかったし寧ろ楽しかったの
で笑っていた。

…このバカップルがつ！

ミソラ「ん…？」

スバル「どうしたの？ミソラちゃん。」

ミソラ「そこはかたくバカにされた気がする。」

スバル「？さあ…よく分かんないけど…」

ミソラ「そこはかたくバカにされた気がする。いや、絶対に！」

スバル「気のせいだと思うよ…」

ロック（作者だな）

ハーブ（作者ね）

おっと、聞こえちまったか、あぶねえあぶねえ…

必殺！

色々すっ飛ばし！

大体昼前ぐらい

スバル「荷物は始めからハンターに入れたけば良かったなあ………

なんで気付か無かったんだろう…」

ミソラ「まあそんなときもあるって！」

スバル「あつ、そろそろお昼だね。」

ミソラ「ホントだ、何食べよう？♪」

スバル「うーん…」

ミソラ「とりあえずあのレストランに入ろー！」

スバル「え？あ、うん。」

続く！

第6話 D a t e (後書き)

このバカップルがアアアア！

イチヤイチヤするのは良いけど限度を考えろやアアアア！！

そして次回もデート編！

第7話 デート！（前書き）

ぐアアアアアア！

チクシヨオオオ！何だこの敗北感はアアアアアア！

第7話 デート!

ミソラ「何食べようかな」

スバル「僕は…ハンバーグにしよう。」

ミソラ「じゃあ私は…カレーとミートスパゲティとグラタンと……」

以下略

スバル「ミ、ミソラちゃん!? いくら何でも多すぎない!？」

ミソラ「え〜? 普通だけとお?」

スバル「……………（お金多めに持って来といて良かった…）」

で

?? 「あ、スバル君、ミソラちゃん。」

スバル ミソラ 「ツカサ君！」

ツカサ 「あれ？もしかしてデート中？」

スバル 「うん…まあ…ツカサ君は？」

ツカサ 「僕は本を買いにきたんだ。あつちに大きな本屋が出来たからね。」

スバル 「へえ」

暫くして二人の注文した料理が運ばれてきた。

それにより机の7割はミソラの注文した料理で埋まっていた。

ツカサ 「これ全部ミソラちゃんが食べるの？」

ミソラ 「そうだよ。」

ツカサ 「そうなんだ…」

ミソラ「はい！スバル君！」

ミソラはスプーンに自分の料理を載せて差し出した

スバル「え？」

ミソラ「あゝん……」

スバル「えええ……は、恥ずかしいんだけど……」

ちなみにツカサ君は少し前に先に食べて帰った

ミソラ「……ダメ？」

ミソラは上目使いで聞いた

スバル「（うつ）……分かったよ……あゝん……」

ミソラ「美味しい？」

スバル「うん！」

ミソラ「じゃあスバル君も！」

スバル「え…」

ミソラ「お願い…」

スバル「うん…」

これ以上は俺の手がケータイを握りつぶしかねないので

速攻魔法！

すっ飛ばし！

（ずっと俺のターンのアレで。）

スバル「次はどこに行く？」

ミソラ「ふっふっふこれを見に行くんだよ！」

ミソラが出したのは

ホラー映画のチケットだった

何の映画かって？

バ〇オ〇ザ〇4

a f t e r l i f e

だった

ミソラ「大人気だって評判だよ！」

スバル「…マジで見に行くの…？」

スバルはホラー映画などがかなり怖いのである

まあこの映画はホラーよりアクションが凄まじいのだが…

ぶっちゃけ作者はゲームも映画も1作目が最も怖かった

閑話休題

で

映画館に向かって歩いてると

?? 「おお? スバルにミソラちゃんじゃねえか!」

スバル 「あ、ゴンタ」

ミソラ 「こんにちは、ゴンタ君。」

スバル 「何してるの?」

ゴンタ 「牛丼の食べ歩きの旅だ。」

スバル 「ちなみに何杯食べた?」

ゴンタ 「さっきのところで4杯目だな。」

スバル 「食べ過ぎだよ…」

ゴンタ「二人はデート中か？邪魔しちゃ悪いな。じゃあな！」

スバル「…なんか気のせいかなゴンタらしくない台詞を言って去っていった気が…」

で、さらに歩いて50メートルぐらい先で

??「おや？スバル君にミソラちゃんではありませんか？」

スバル「あ、キザマロ。」

キザマロ「奇遇ですね、こんな所で出会うなんて。」

ミソラ「キザマロ君は何してるの？」

キザマロ「パソコンをみて回っていました。」

スバル「さっきゴンタとかツカサ君に会ったけど…」

キザマロ「そうなんですか？僕は会ってませんが…」

後は上記とほぼ同じ展開なのですっ飛ばし

で、さらに150メートルほど先で…

??「あら、二人とも、デート中かしら？」

スバル「委員長!？」

ミソラ「ルナちゃん!？」

ルナ「…なによ…その目は…」

スバル「なんか今日はかなり知り合いに会うから…」

ミソラ「ルナちゃんて四人目だからね…」

ルナ「四人目？だれがいたのかしら？」

スバル「ツカサ君にキザマロにゴンタだよ…」

ルナ「へ、へえー…そうなの…」

ミソラ「ところで何してたの？」

ルナ「買い物よ。さっきは服を見てきたの。」

ミソラ「ふうくん…」

ルナ「じゃあ私はデートの邪魔しちゃ悪いからそろそろ行くわ、じやあね。」

でさらに数分後

?? 「うん？スバルにミソラ？」

スバル 「ジャック…」

ジャック 「オイ待て…なんだその「何でお前ここに居るんだ？」って視線は！？いちゃ悪いか！？」

スバル 「いや…そう言うわけじゃあ無いんだけど…さっきから知り合いに会いまくりだから…ねえ…」

ミソラ 「うん…ジャック君で五人目だよ…」

ジャック 「オーケイ…誰と会ったか大体わかった…」

スバル 「で、ジャックは何してるの？」

ジャック 「暁と姉ちゃんに頼まれた物を買いに来たんだよ…早い話…パシリだ…（涙）…………くそったれが…（怒）」

スバル 「あはは…大変だね…」

ジャック 「笑い事じゃねえぜ…全く…あのバカカップルが…」

以下すっ飛ばし（笑）

ミソラ「やっと映画館について…た!？」

スバル「あ…暁さんにクインティアさん!？」

暁「ん? おお! スバル! ミソラとデート中か? もしかして映画見に来たのか?」

スバル「ええ…まあ…暁さんこそ何やってんですか? 仕事はどうしたんですか?」

暁「ん、長官が休みくれたからクインティアとデートにきた!」

スバル「何やってんですか…全く…:あれ…? ジャックは…」

暁「あれはデートの邪魔されないように嘘言つといたのさ。」

スバル ミソラ（酷っ!）

クインティア「あなた達映画見に来たんじゃなかったの? 時間は大

丈夫？」

ミソラ「あ！ヤバい！もうすぐだ！急ぐよスバル君！」

スバル君「え？あ、ちょっと！じゃあまた！暁さん！」

暁「おう、じゃあな」

クインティア「シドウ、私達もそろそろ映画の時間危ないんじゃない？」

暁「マジで？じゃ行くか！」

ミソラ「ポップコーンとジュース買ったよ」

スバル「あ、ああありがとう、ミソラちゃん。」

ミソラ「声がなんか変になってるよ」

スバル「ええっ！？そ、そうかな？」

ミソラ「あゝもしかしてスバル君怖いのか？」

スバル「そ、そんなわけ無いじゃないか…あはははは…」

とか言いつつかなり表情が引きつっているスバル（笑）

ブーーーーッ

なんやかんやて映画が始まる…

映画はすっ飛ばし

映画終了後…

スバルはぐでぐとした状態でミソラに若干抱えられて出て来た。

ミソラ「だ、大丈夫？ スバル君？」

スバル「た…多分…」

よっぽど怖かったのだろう…スバルにとっては…

ガチャ…

暁「大丈夫か…ティア…？」

クインティア「う……」

反対側のスクリーンから暁とクインティアが出て来た

ミソラ「……」

暁「……」

なんかよく分からない空間が出来たっぽかった…

ミソラ「そろそろ帰ろっか、スバル君。」

スバル「うん、でもその前に、展望台に行きたいんだけどいいかな？」

ミソラ「いいよ。一緒に行くね。」

続くっ！

第8話 展望台（前書き）

……。
（イライライライライライライライライライライライ……）
（、皿、）

第8話 展望台

展望台に来たスバルとミソラ

さて…二人は何をしてるのか…

ミソラ「今日はありがとう、スバル君。」

スバル「こちらこそありがとう、ミソラちゃん。」

ミソラ「なんかデートなのに私が一方的に連れまわしたみたいだっ
たな…ゴメンね…」

スバル「ううん、こういうデートの時は男がちゃんとしなきゃいけ
ないんだよね…ゴメンね…ミソラちゃん…」

……沈黙……

二人（なにこの空気！！！！）

で
数分後

ミソラ 「あのねスバル君、お願いがあるんだけど…」

スバル 「なに？」

ミソラ 「あのね…その…名前を…呼び捨てにしてほしいの…／／／
／／」

スバル 「えっ…」

ミソラ 「…ダメ…かな…」

スバル 「いや、いいよ。……………み、ミソラ…」

スバルは恥ずかしいからか少し小声だった

ミソラ「…ありがと！スバル！」

ミソラはスバルに抱きついた。

スバル「えええ！み、ミソラ…／＼／＼何で僕のことまで…」

ミソラ「だって…二人ともじゃないと…意味ないでしょ？／＼／＼／

スバル「そ、そうなのかな…？」

と言いつつ、抱きついてるミソラを抱き締めるスバル。

ミソラ「……………」

スバル「……………」

チュツ…

二人はどちらからともなくキスしていた。

それを隠れて見ている奴らがいた

暁「ほおゝ…あの二人、マジだな。」

クインティア「ええ、そうみたいね。」

ジャック「だな。」

ツカサ「そうですね。」

ゴンタ「ああ。」

キザマロ「はい。」

ルナ「ええ、そうみたいね。」

スバル「ミソラ、そろそろ帰ろっか。」

ミソラ「うん、お腹空いたしね。」

まさかの全員集合（笑）

真相は

次回へ続くっ！！

第8話 展望台（後書き）

次回は真相？が明かされます！

第9話 真相（前書き）

真相はコレだ！

第9話 真相

話はミソラがスバルをデートに誘った日の、前日まで遡るううう。

ミソラ「ねえ、ハープ、明後日スバル君とデートに行きたいんだけどどこに行ったらいいのかな」

ハープ『うーん…きっとスバル君ならあなたの行きたいところなら喜んで着いてきてくれるんじゃない?』

ミソラ「そうかな…じゃあ………」

以下暫くすっ飛ばし

あかね「へえ〜…いいこと聞いちゃったわ〜♪大吾さんに報告しよ
っと♪」

色々すっ飛ばし

WAXAで

昼飯中

大吾「ってわけらしいんだが…」

暁「へえ〜…（ニヤニヤ）」

長官「なるほどねえ…」

大吾「って長官！？何時の間に…」

長官「さっきだよ。」

暁「で…そんな話をしてどうしたんですか？」

大吾「いや、何もない。ただ話しただけ。」

長官「…暁、クインティア君と君もデートに行ってくればいい。」

暁「えっ！？それはマズいんじゃない…もし事件が起きたら…」

長官「その時はその時で呼ぶさ…まあ君達は命懸けの仕事を休み無しでやってるし、1日2日どころか一月くらい休んでも罰は当たらんよ、楽しんで来たまえ。」

暁「はあ…ありがとうございます…」

暁「あのさあティア…明後日な…」

すっ飛ばし

クインティア「…いいわよ…／／／／」

暁「よおっし！」

ジャック「待て、俺は？」

暁「お前も休みだ、ただし全員事件が起これば全員問答無用で集合だな。」

ジャック「よっしやあ！」

暁「あ、それでさ、面白いことを思いついてだな…明後日スバルとミソラがデートに行くみたいだな…それをみんなで観察するってのはどうだ？」

クインティア「面白そうではあるわね。」

ジャック「いいね、最高ッだねエ！」

暁「ジャック、これを友達とかに回して協力して貰ってくれ（笑）」

ジャック「任しとけ！」

で、全員に連絡が回って…

ジャック「暁…全員OKだ！」

暁「よし…コレで良い…（笑）」

で、なんやかんやでデート当日の下りへつづいていくのであった…

別の次の話へ続くっ！！

第9話 真相（後書き）

デュオ「何をやっとりんだ暁シドウ…」

アホだな

デュオ「仕向けてんのは貴様だろうが。」

それに気付いてんのはお前とスバルだけだ

デュオ「そうか、ならくたばれ。」

唐突だなオイ

デュオ「くたばれくたばれくたばれくたばれくたばれくたばれくたばれくたばれくたばれ」

黙れ。飛天御剣流、飛龍閃。

デュオ「そうなんども当たらねえよバカが。」

牙突零式！（木刀）

デュオ「グヘアアアアアアア！」

死なないようにしておいてやった

ではまた次回で、さようなら

第10話 music (前書き)

音楽って…良いですね…

第10話 music

デュオ「行くぞ……」

アリサ「うん。」



二人は家で演奏している

デュオがピアノ、アリサがヴァイオリンである



アリサの演奏は優しき、明るいのに対しデュオの演奏は力強く、全力で演奏している感じがしている。

真逆のスタイルのはずが、何故だか素晴らしい演奏だった。

楽譜のない即興の曲

二人の感情がそのまま奏でる音に表れるようだった…

アリサの優しい演奏は喜びが表れているようだ

まさか自分の大好きな恋人と二人で一緒に演奏とは思っていなかったのだろう

その喜びがよく表れている

デュオは純粹に演奏を楽しんでいるようだ

さらに恋人とのデュオ（二重奏）

楽しさに喜びが入ったようで全力の演奏になっている

以前の彼なら自らの感情を出すことがまずなかっただろう

この演奏が出来ているのもアリサのおかげと言うものだろう

数分間演奏は続いて…演奏は終わった…

アリサ「ふう…」

デュオ「フー…」

アリサ「ピアノ弾けたなんて知らなかったなあ…しかもかなり上手いし……オカリナは知ってたけど。」

デュオ「ピアノが無いと思ってたからな…。……お前のヴァイオリンも良かったよ…」

アリサ「フッフ…ありがと！」

デュオ「もう一曲行っとくか？」

アリサ「ええ、まだまだ弾くよ！」

デュオ「じゃあ俺はオカリナを吹くか。」



再び始まった演奏は終わった

アリサ「そろそろ終わろっか。」

デュオ「ああ。俺、夕飯作ってくる。」

アリサ「ありがとう。」

展望台からの帰りのスバルとミソラ

スバル「…なんか音楽が聞こえてこない？」

ミソラ「ホントだ…ピアノと…ヴァイオリンの音…かな…？」

スバル「いや…聞かれても…」

ミソラ「こっちから聞こえる…」

スバル「…ここからじゃない？」

ミソラ「ここって……もしかしてアリサさんとデュオさんが演奏を？」

ミソラ「みたいだね。邪魔しちゃ悪いから帰ろっか？」

スバル 「うん。そうだね。」

続く…

デュオ「アリサの事しか考えてなかったから。」

アリサ「えっ…／／／／／」

デュオ「クソっ……あのアホ……どうやってここを…俺の居場所を調べたんだ…」

アリサ「さあ…」

で、一週間後

デュオ「……。」

アクセル「……。」

「暑くないのか？」

二人は出会って同時にお互いに同じ事を聞いた

ちなみにデュオの服はGパンに濃紺のノースリーブ、そして肩と袖に金色の刺繍で少し装飾された蒼いコートに黒いブーツさらにアタッシュケースも持っている。

アクセルは黒と赤のレザーパンツに素肌に真紅のラバーコートを着てこちらも黒いブーツをはいて、ゴツいアタッシュケースを両手に持っている。

デュオ「アホかお前は、素肌にコートはどうかと思うぞ。」

アクセル「Ha! 素肌にコートを着てなんか悪いか？」

デュオ「やはりアホだな、お前は。」

アクセル「バカ兄貴も相変わらずだな！」

と言うか真夏にコート着てる時点でどうかしてるのだが突っ込まない方針で

デュオ「そろそろ日本に来た理由を教えてください。」

アクセル「仕事だ…まあまずはこいつを見てくれ…」

アクセルはアタッシュケースを開いた。

中身は蒼と黒い鞘で白と藍色の柄の刀が入っていた。

アクセル「魔剣…意味は分かるかな？」

デュオ「…ああ……俺も持っている…」

デュオは自分のアタッシュケースを開いた。

中身はリベリオンが入っていた。

黒い髑髏の装飾に真紅の宝石のような物が一つ付いた大剣。

アクセル「やっぱりな…悪魔か天使のどっちか入ってんだろ？」

デュオ「ああ…悪魔が一体…」

アクセル「話せるか？」

デュオ「無理だ。今年は魔界門か天国門が開く可能性が異常に高いからずっと反応を探知していて神経を集中してるからな…」

アクセル「そうか…なら」悪魔への引金”は…出来るのか？」

デュオ「一応な…こいつの力を借りてだが…」

アクセル「俺も」悪魔への引金”は使える…それと電波変換もな…」

デュオ「……その刀の力だな？」

アクセル「ああ…この刀…斬魔刀の力でな…」

デュオ「ならば生身でも戦えるな？」

アクセル「当たり前だ。」

デュオ「ならば仕事とは？」

アクセル「便利屋の仕事だ。裏の仕事はデビルハンター悪魔狩人だが。」

デュオ「ならば今回は裏だな？」

アクセル「That's right.」

カタカタ…

デュオ「！」

アクセル「！」

リベリオンと斬魔刀が震え始めた。

デュオ「スパ―ダ！」

スパ―ダ「来たぞ…魔界門だ…！」

アクセル「ああ…斬魔刀も言ってる…」

「「悪魔が…くる…！」」

遂に戦いが始まる…

天使と悪魔と死神と蒼い流星の仲間と…

世界と世界と世界を巻き込んだ…

巨大な戦いが……！

第四章…完

第五章へ…続く…

第11話 兄弟（後書き）

アクセルについて…

髪は少し長い赤髪に顔の両目の下に赤の逆三角形のタトゥー…早い話キングダムハーツのアクセルの髪を少し短くして身長も少し小さくしたのを思い浮かべていただければ…

性格はデビルメイクライのダンテさんですね…

と言うかダンテさんを少しだけ真面目にした感じです…

服はデビルメイクライ3のダンテさんですね…素肌にコートとか…

ちなみにデュオが来ていたのはヴァーギルが着てたコートにヒイロが着てたサンクキングダムの正装みたいな？たまにポスターとかで着てるのをみるアレを合わせたみたいなコートです。

第四章を振り返って。

ぶっちゃけ最終話しか意味はない…

それいがいは…

どうでもいい…

しかし：ストーリーがデビルメイクライのパクリ：

何やってんだろ俺は：

以上、次回から第五章に入ります

それではさようなら

第五章【悪魔狩人（デビルハンター）と流星（シューティングスター）】

第1

いよいよ最大の第五章に突入！

第五章【悪魔狩人（デビルハンター）と流星（シューティングスター）】

第1

デュオ「スパイダ！魔界門はどこだ！？」

スパイダ「ここからすぐ近く！北に約100メートル！」

デュオ「小学校か！アクセル！急ぐぞ！」

アクセル「Off course！！」

デュオ「あれか！ゼロ！」

ゼロ『了解…』

デュオ「電波変換…！」

アクセル「俺も…電波変換！」

アクセルは電波変換したが、見た目が全く変わらず、普通の人間だった。

ゼロ『誰だ?』

デュオ「俺の弟だ。」

アクセル「よろしく!」

ゼロ「ああ…」

デュオ「あれか!」

幸いに悪魔はまだ出て来てはない。

アクセル「速いウチに壊すぞ…」

アクセル「ハアアアアアアアア! judgement slash
h!! (次元斬!!)」

アクセルは神速の抜刀術で”次元ごと”門を切り裂いた。

デュオ「high time!」

デュオは片手にリベリオン、もう片手にゼットセイバーを持って高

く飛び上がり、両手の剣で3回転斬りをした後、縦にリベリオンとゼットセイバーを空中から一閃した

すると魔界門は粉々に碎け破片が飛び散る。

デュオ「はっ！」

デュオはバスターショットを両手に構え、交差させ、連射して魔界門の破片を破壊する

アクセル「i l l u s i o n b l a d e ! (幻影刀!)」

アクセルは自分の周囲に青白い刀を大量に発生させた

アクセル「G O ! (行け!)」

その刀が一斉に飛んでいって魔界門の破片を破壊していく。

アクセル「B l a c k r o s e ! (黒薔薇!)」

アクセルが叫ぶともう一つのアタッシュケースからショットガンが二丁出てきた

アクセル「Y a a a a a H a a a a a ! ! ! 」

B a n g ! B a n g ! B a n g ! B a n g ! B a n g ! B a n g !

ただ乱射してるような二人の銃だが弾の一発一発は魔界門の破片を的確に破壊していた。

デュオ「仕上げだ！ Soul Launcher！（ソウルランチャー）」

バスターショットで上空にエネルギーを打ち上げる、打ち上げられた弾は拡散して地上に降り注いだ。さらに一発一発が破片を破壊していく。

デュオ「これで全部だな。」

アクセル「ああ………！？」

デュオ「！！」

突然周囲の空気が、世界が変わった。

デュオ「どうやら”まだ”ではなく”すでに”出て来た後のようだな。」

アクセル「Ha！ Let's start！ the most crazy Party， yeah！！（ハッ！イかれたパーティーの始まりだ！行くぜ！！）」

デュオ「こいつらは雑魚か？スパーダ。」

スパーダ「雑魚だな。コイツ等に魂はない。暴れるくらいしかできん。」

二人の周囲には100体以上は悪魔がいた。

デュオ「行くぞ…」

アクセル「言われなくても…！」

二人は同時に逆方向に飛び出した。

「うおおおおおおお！！！！」

続く…

第五章【悪魔狩人（デビルハンター）と流星（シューティングスター）】

第1

Let's start! the most crazy party, yeah!!

アクセル「yeaaaaaaa!!」

Are you ready?!

Axel「year!!!」

Let's rock!!（派手にいくぜ!）

つー分けて今回はアクセルだ!

アクセル「いつもでてるバカ兄貴はどうした!?!」

蹴り飛ばしたぜ!

アクセル「Good job!」

Thank you!!

アクセル「なかなかやるな! お前!」

To o e a s y ! (チヨロいな) 俺は飛天御剣流の使い手だから
な! (一部マジでやってる技もある)

アクセル「That's great! (そりゃすげえ!)」

おっと時間だ!

S e e y o u n e x t !

G o o d b y e !

第2話 無双の兄弟（前書き）

L
e
t
'
s

r
o
c
k
!!

（派手に行くぜ!!）

第2話 無双の兄弟

アクセル「y a a a a—h a w!!!!!!!!!!」

B a n g! B a n g! B a n g! B a n g! B a n g! B a n g!
B a n g! B a n g! B a n g!

デュオ「おおおおお!!」

ザシユザシユザシユザシユザシユザシユザシユザシユ
ザシユザシユザシユザシユザシユ!

デュオ「クソ! せっかく作ったのにこの大鎌使いづれえ!!」

ゼロ『いっそ捨てるか!?!』

デュオ「そうするしかない!」

デュオは鎌を投げた

デュオ「Ha!」

B a n g! B a n g! B a n g! B a n g! B a n g! B a n g!
B a n g! B a n g! B a n g!

投げた鎌をバスターショットで破壊した

ついでに何体か鎌に斬られて流れ弾にも当たっている

逆に悪魔がなんだか可哀想に思える程この二人は強すぎた

アクセル「H e y ! 兄貴 ! さっきの c o o l な武器はどうした ! ? 」

B a n g ! B a n g ! B a n g !

デュオ「使いづれえから壊した ! 」

B a n g ! B a n g !

アクセル「R e a r y ! ? 何で壊しちまうんだよ ! 俺にくれよ ! 」

デュオ「あんなの後で作ってやる ! 」

アクセル「マジ ? だったら頼むぜ ! 」

ザシユザシユザシユザシユザシユザシユザシユザシユザシユ
ザシユ !

デュオ「とにかく悪魔をぶっ殺せ ! 」

アクセル「O K ! j u d g e m e n t s l a s h ! (次元斬 !) 」

ザ シ ユ ザ シ ユ ザ シ ユ ザ シ ユ ザ シ ユ ザ シ ユ
ザ シ ユ ザ シ ユ ザ シ ユ ザ シ ユ ザ シ ユ ザ シ ユ
ザ シ ユ ザ シ ユ ザ シ ユ ザ シ ユ ザ シ ユ ザ シ ユ

デュオ「鋭刃牙！」

デュオはゼットセイバーをふり、真空の刃を発射した。

アクセル「なかなかCOOLな技を使うじゃねえか、兄貴！」

デュオ「これはゼロの技だ！」

アクセル「H O O! 良いね良いね最高ッだねエ!」

デュオ「喋ってる暇があったら悪魔を倒せ！」

「アクセル「Hun!ならまた一つ技を見せてやる! Illusio
n s o w d! (幻影刃!)」

斬魔刀が大きな幻影刀を纏い、巨大化した。長さは5メートル以上はある。

「アクセル y e e e e e e e e e y a h a a a a a a a a a ! !」

一気に20体は斬り伏せた

デューオ「style shift change! sowd m
aster! (スタイルシフトチェンジ! ソードマスター!)」

デュオが叫ぶとリベリオンの刀身が赤みを帯びた。

ゼットセイバーの長さも少し長くなった。

とにかくゼロの近接武器が強力になった。

デュオ「dancing sword! (ダンシングソード!)」
両手に逆手でゼットセイバーを握り、回転しながら斬りつけて悪魔の群れに突っ込んでいった。

程なくして悪魔は全滅した。

アクセル「だらしねえな、もっとガッツのある奴はいないのかい？」

デュオ「まあしばらくはこれで大丈夫だろう。そんな事より貴様、刀傷が校舎に付きまわってるぞ。」

アクセル「バカ兄貴もソウルランチャーでグラウンドに穴あきまくりじゃねえか！」

デュオ「お前フェンス切り裂いてるだろ！幻影刃のとき振り回してたからズタズタじゃねえか！」

アクセル「ぐっ…」

デュオの唯一の損害はグラウンドに穴あきまくりなだけ

アクセルは

校舎に傷だらけ

フェンスはズタズタ

窓ガラスが30枚くらい割れてる

校舎になんかでかい穴がいくつか開いてる

等々…

アクセル「やべえ…」

デュオ「アホが…」

ビキッ

アクセル「ん？」

ビキビキッ

デュオ「何の音だ？」

ビキビキビキッ！

アクセル「おい！空が…！」

ビキビキビキビキッ！

デュオ「ひび割れてる…？」

バリイーン！！

“空”が割れた

ヴオオオオオオオオオオアアアアアア！

その割れた空から龍と鯨を足して2で割って、翼をつけたような怪物が現れた

デュオ「魔獣……リヴァイアサンか……」

アクセル「ヒュ〜！アイツ久々に見たな！最初に戦ったとき食われちまったんだよな、俺。」

デュオ「よく生きてたなお前。」

アクセル「丸呑みにされたからな。まえは何か心臓っぽいのをズタズタにしたら死にしまったから今度は兄貴が呑まれてみるか？」

デュオ「ふざけるな。あんなの15分で切り捨てた。」

アクセル「じゃあとうとう切り刻んでやりますか。」

ヴオオオオオオオオオアアアアアアア！！

二人「うおおおおお！」

続
く
つ
！
！

第2話 無双の兄弟（後書き）

次回！VS魔獣リヴァイアサン！

第3話 巨大魔獣（前書き）

チート兄弟の最強伝説（笑）

第3話 巨大魔獣

デュオ「ハッ！」

B a n g ! B a n g ! B a n g ! B a n g ! B a n g !
B a n g ! B a n g ! B a n g !

アクセル「Hoo！」

B a n g ! B a n g ! B a n g ! B a n g ! B a n g !
B a n g ! B a n g ! B a n g ! B a n g ! B a n g !

オオオオオオオオオン！！

デュオ「以前の個体よりは強いようだな…」

アクセル「Hey！なかなかガッツがある奴みたいだぜ？」悪魔への引き金”引いとくかい？」

デュオ「仕方ない。やるしかないだろう…」

アクセル「Ok！Let's go！」

デュオ「スパーダ！行くぞ！」

スパーダ「ウム！」

デュオ「Devil trigger!!」

デュオはスパーダの力を借りて悪魔に変身した

見た目は大きな角が生え、色は黒く、体は装甲のように硬く、蒼いコートを着て、ジーパンもそのままに悪魔に変身した。
歴戦の戦士の雰囲気を出す悪魔に変身した

アクセル「wake up!!（目覚めろ!!）」

赤いコートに赤と黒のレザーパンツに赤と黒のボディ、棘のような鋭い印象を与えるイメージの悪魔に変身した

アクセル「行くぜ！」

デュオ「ハッ！」

二人は背中の悪魔の翼を広げ、リヴァイアサンへと飛んでいく。

デュオ「style shift change! sword master!」

スタイルシフトチェンジでソードマスターを発動したデュオ。

リベリオンの刀身が赤みを帯びた。

デュオ「うおおおおおおおおお!」

ザシュザシュザシュザシュ!

目にも映らない速さでリヴァイアサンに斬撃を喰らわせたデュオ。

ちなみにリベリオンは重さ約40kgぐらいである

デュオ「stinger! (ステインガー!)」

超高速の突きを繰り出したデュオ。

リベリオンがいくつにも分身したようにいくつものリベリオンが見える

それ程速い突きだった

同じ頃、反対側ではアクセルが斬魔刀で超神速の剣を振っていた

アクセル「j u d g e m e n t s l a s h ! （次元斬!）」

周囲の次元ごと切り刻んでいるアクセル

アクセル「面倒だ! 一気に行くぞ! I l l u s i o n b l a d e
! （幻影刀!）H a ! 」

同時に幻影刀が100以上は現れた

アクセル「G o ! （行け!）」

100本以上の刀が同時にリヴァイアサンに刺さる

グオアアアアアアオアア！

さすがのリヴァイアサンも苦しみ悶える。

グオアアアアアアア！

リヴァイアサンが光弾を大量に口から放った。

デュオ「フンッ！」

リベリオンで弾きつつ、自らも回避する

アクセル「j u d g e m e n t s l a s h !（次元斬！）」

次元ごと斬り刻んで、自分に飛んでくるであろう光弾を抹消してしまおう

アクセル「H e y ! その程度か？ 図体でかいだけで実は雑魚か！？」

グオアオアアアアアアアア！

アクセルのセリフに怒ったのか、雄叫びを上げて自らの体の周囲に激しい風を纏った。

デュオ「バカかお前は！怒らせてどうする！！」

アクセル「しかたねえだろ！テキトーに言ったらキレたんだからよオ！」

デュオ「チツ…仕方ない…本気を出すぞ…！」

アクセル「off course！」

デュオ「style shift change！ Gunmaster！（スタイルシフトチェンジ！ガンマスター！）」

デュオがスタイルシフトチェンジを行うと、バスターショットが光を帯びた。

デュオ「change！ submachine gun！（チェンジ！サブマシンガン！）」

バスターショットがサブマシンガンに変化した。

デュオ「食らえ！」

b a b a b a b a b a b a b a b a b a
b a b a b a b a b a b a b a b a b a
b a b a b a b a b a b a b a b a b a

風でまき散らされるものの、サブマシンガンの連射により確実にリ
ヴァイアサンの分厚い鱗を破壊していった。

アクセル「これで決める…」

アクセルは刀を鞘に収め、目を閉じた…

カッと目を見開くとともに、

アクセル「夢幻一閃！」

技を放った

その速さは超神速を超える究極神速の抜刀術により次元ごと斬る、
のではなく周囲の次元と空間ごと斬ってしまった。

その流れのまま、刀を鞘に収め

カチン

と音がした瞬間、

リヴァイアサンは真っ二つにされた。

デュオ「change! Twin baster rifle! (チェンジ! ツインバスターライフル!)」

サブマシンガンになっていたバスターショットが再び変形し、1メートル以上の巨大な二丁の超大口径のライフルになった。

さらにツインバスターライフルを合体させ、チャージする

デュオ「消えろ…！」

カチッ

何のためらいもなく引き金を引いた

街が壊れるかもしれない

などは考えず、ただ目の前の魔獣を消し去るために巨大なエネルギーを発射した

この二人にとっては街が壊れるよりも、この悪魔や魔獣を一般人に見られる方がよっぽど厄介なのである。

放たれたエネルギーの奔流は体長200メートル以上のリヴァイアサンを完全に抹消した。

アクセル「をじゃ帰るか。」

デュオ「アホか：サテラポリスが来てる可能性があるだろ：あれだけの悪魔^{ザコ}に魔獣リヴァイアサンが現れたんだ、異常な電波反応がでてるはずだ：俺達からもな：」

アクセル「じゃどうする？」

デュオ「一度宇宙に：コスモウェーブに上がってデビルトリガーを解除してから別の場所へ降りて、しばらくたってから再び電波変換してここに戻る。お前は後で電波変換なしで戻ってこい。バレたらややこしい事になる。」

アクセル「へいへい：分かりましたよ：斬魔刀とblackroseは別のトランクケースに入れとくか：」

デュオ「バレないようにしろよ。」

ちなみにリヴァイアサンと戦った直後なので高度3000メートル
以上で会話していた二人だった：

続く！

第3話 巨大魔獣（後書き）

ここで補足説明

悪魔への引き金 デビルトリガー

悪魔、もしくは魔剣、魔具などの力を借りて悪魔の力を使用者に宿し、一時的に悪魔に変身する。

斬魔刀

リベリオンと対をなす魔剣

人と人ならざるものを分かť事が可能な刀

幻影を創り、操ることができる

また、幻影を実体化させる事も可能

通常の刀としても使用できる

人と人ならざるものを分かť事が可能なので相手の電波変換を強制解除させることができる。

反対に使用者には人と人ならざるものを結びつける事も可能、つまり電波変換の力が手に入る。

使用者が望むのならたとえ時空であろうと宇宙であろうと斬れない

ものは存在しない

多分今はこんなもんでしょう。

では次回で：

さようなら）

第4話 んでその頃…（前書き）

意味不明なサブタイ

第4話 んでその頃…

デュオとアクセルが悪魔やリヴァイアサンと戦っている頃…

スバル「あああゝ…何か暇…」

ミソラ「……………」

スバル「ミソラ〜…。」

ミソラ「……………」

スバル「ミソラ…？」

ミソラ「…ZZZZZ…。」

スバル「寝てる……………」

ミソラ「…ZZZZZ…ッ…。」

スバル「…………まさか…実は起きてる…？」

ミソラ「…! Z Z Z Z ……。」

スバル「……な訳ないか……下行こ…」

ガチャ…

ミソラ「…危なかった…でも一緒に寝てくれると思ったけど…上手くは行かないか…どうしようかな…」

スバル（なる程ね…）

実はドアの向こうで隠れていたスバル。
ミソラが寝たフリをしていたのを見破っていたのだ。

スバル（じゃあ一緒に寝てあげようかな…）

スバル「…やっぱり寝てるか…。」

ミソラ（…うひゃあああ…／／／まさか…いきなりこれは無いでしょー！）

スバル「よいしょっと…」

ミソラを寝かせて自分もベッドに入り込む。

ミソラ（うひゃあああああ！／／／上手く行き過ぎー！ー！ー！逆に恥ずかしくなってきたー！ー！ー！）

スバル（ミソラ…顔真っ赤にしてる…いつも自分からこんな事して来るのに…よし…）

ミソラ（うー…嬉しいのか悔しいのか……うにゃああああああ！！／／／／スバルに思いつき後ろから抱き締められてるうううー！ー！ー！）

スバル（は…恥ずかしい……／／／／…けど…何か楽しい……：）

ミソラ（ううううう…ヤバイ…）

スバル「（そろそろいいかな…）ミソラ…全部気付いてるからね…（笑）」

暁「オイ、スバル！いちやついてる場合じゃねえぞ！！お前んこの学校付近に正体不明の巨大な電波反応だ！かなりヤバそうだからすぐに行ってくれ！俺達もすぐに行く！！」

スバル「分かりました！！ミソラ…って速っ！」

ミソラ「速く電波変換して！」

スバル「う、うん…トランスコード！シューティングスターロックマン！」

ロック「こいつはヤベェ…俺達でどうにかなるのか…？」

ハープ「アンタが弱気なのは珍しいけど…これは本当にまずいわね…」

スバル「とにかく行ってみよう！」

スバル「おかしいな…何もない…」

ミソラ「でもおかしいな電波反応は…ほんの少し残ってるし…しかも

…」

スバル「学校がえらいことに…」

ちなみにこれはアクセルがやったものである

暁「おーい！二人とも！」

スバル「暁さん！異常な電波反応が出てるような物が見当たらないんですけど…」

暁「ああ…こっちでも突然反応が消失したから大変な事になってる…しかし…何があったんだ…学校に傷がつきまくりだな…」

スバル「何だろう…この傷…」

ミソラ「うーん…鋭い刃物で斬りつけた…みたいなの？」

暁「俺もそう見える…」

スバル「…それにグラウンドに穴が大量に開いてる…」

これはデュオがソウルランチャーで開けた穴である

ここで言うのも何だけどソウルランチャーはゼロの技だったりする。

スバル「ホント何なんだろう…」

結局謎のまま…終わったのだった…

デュオ・アクセル「へっくし!!」

アクセル「何だ?もしかして誰か俺達の事話してんのか?」

デュオ「ヤッパリ居たんじゃねえか?サテラポリス。」

アクセル「かもな…」

デュオ「ところで仕事と言っていたが内容は何だ?」

アクセル「いやいや、これは俺の意志でやってるんだ、厳密には仕事じゃねえんだ。…表は便利屋をやってっから仕事ってのはそっちだな。」

デュオ「…なる程…便利屋か…俺も始めてみるかな…」

アクセル「んじゃ店名は………にしてくれ。俺の店の名前だ。」

デュオ「わかった。」

アクセル「そろそろ行くか？」

デュオ「ああ。さっき言ったとおりに頼むぞ。」

アクセル「分かってるって。」

続くっ！

第4話 んでその頃…（後書き）

L e t ' s P a r t y ! !

アクセル「y e a r ! L e t ' s P a r t y !」

デュオ「J e s u s …（最悪だ…）」

H e y ! W h a t ' s u p ! ? （へい！どうした！？）

デュオ「お前らがそろろと疲れる…」

アクセル「どういいう意味だ…？それ…」

デュオ「うるさい上に英語だらけでうっとおしくなる…」

I … k i l l y o u … ! （お前を…殺す…！）

アクセル「G o t o h e l l ! （地獄に落ちろ！）」

デュオ「A s c e n s i o n t o h e a v e n ! （昇天しちまえ！）」

お前もしっかり英語じゃねえか…！

デュオ「…何故だ！」

アクセル「アレだ、兄弟だから…とかじゃね？」

デュオ「いいのか悪いのか…」

俺はいいと思うぜ？

アクセル「Me too. (俺もそう思う)」

デュオ「そんなもんなのか？」

そんなもんだ。

ツー訳で次回からは…

三人「「Let's rock!! (派手に行くぜ!!)」」「」「」

Good bye!

第5話 今回はサブタイは必要ない・・・多分（笑）（前書き）

何やってんだろ…俺

ちなみに今回はP C 投稿

第5話　今回はサブタイは必要ない・・・多分（笑）

デュオ「で？謎の電波反応は消えちゃったと。」

スバル「はい…」

デュオ「…分かった…俺の方でも独自に調べてみよう…」

暁「いや、独自って…お前…どうやって調べるつもりだ？」

デュオ「これでも元々世界の裏側に居たんだ、裏ルートやヤバイコネはいくらでもある。」

暁「いやいや…それは俺の立場的に問題が…」

デュオ「大丈夫だ。問題無い。」

暁「そうか、ならい…いやいや！良くない！」

デュオ「まあそう言うことで調べとく。ではまた。」

デュオは颯爽と？立ち去っていった。

デュオ「危なかった…この件は俺とアクセルで解決するしか無いからな…アイツ等は関わらないようにさせないと…」

ゼロ「関わらない方が幸せだな…関わった俺達は…奴らと戦うことを運命づけられる…」

デュオ「悪いな…ゼロ…俺に付き合って貰って…」

ゼロ「俺は一度死んだ存在だ。そして俺は戦士、戦うことしかできん。だから…戦うためにこの世界に来たんだろう…そして俺は…目の前に敵が現れたのなら…叩き斬るまでだ…。」

デュオ「フツ…頼りにしているぞ…」相棒」…」

ゼロ「任せておけ…」相棒”…」

デュオ「そろそろアクセルが戻ってくるだろう。」

ゼロ「分かるのか？」

デュオ「いや、勘だ。」

アクセル「痛ってえな…ドロップキックにハイキックでカウンター食らうとは思ってなかった…しかも足の裏を蹴られて…」

デュオ「今のは偶然だ。実際は顔面を狙っていた。」

アクセル「ひでえ！」

デュオ「いきなりドロップキックかますお前の方がひどいだろう…」

アクセル「あれは…挨拶みたいなもんだ！」

デュオ「ところでお前、日本にいる間、どこで暮らすつもりだ？」

アクセル「華麗にスルーしやがった…まあいい…：…：さっさと片付くと思ったから何も考えてねえ…：…あ、兄貴のテント貸してくれ、さすがに彼女との暮らしを邪魔されたくはないだろう？」

デュオ「何でアイツのこと知ってるんだ？」

アクセル「昔言ってたじゃねえか。」

デュオ「覚えてねえ。と言うかお前の存在自体メールが来るまで忘れていた。」

アクセル「ひでえ！！まあどうせ彼女の事で頭が一杯だったんだろ！？」

デュオ「そうだが？」

アクセル「クソ…」

デュオ「ちなみにテントなら家だ。」

アクセル「んじゃ取りに行くぜ。」

デュオ「こっちだ…」

アクセル「おお…なかなかいい家じゃねえか…ウチの事務所（兼自宅）より100倍いい家だ。」

デュオ「お前…いったいどんな家（兼事務所）に住んでんだよ…母さんはどうした？」

アクセル「今は別々に住んでる…ってか一緒に住むとか無理…」

デュオ「何かあったのか？」

アクセル「料理が異常にマズイんだ…」

デュオ「お前が言うから相当なんだな…」

アクセル「まあテントをとつと貸してくれ…」

ガチャ…

アリサ「あ、お帰り。……とはじめまして！」

アクセル「どうも………おい兄貴……彼女……めっちゃくちゃかわいいじゃねえか!!！」

デュオ「そうなのか？俺はそのあたりよくわからんのだな。」

アクセル「あんた、どうかしてるぜっ!!！」

デュオ「そう言われてもな…」

アリサ「まあ入って!!！」

デュオ「ああ…」

アクセル「はいっ!!！」

続く！

第5話 今回はサブタイは必要ない・・・多分（笑）（後書き）

Let's rock!!

2人「year!!!!!!」

デュオ「って何やってんだ!!!!俺はああああああ!!!!!!」

まあ落ちつけよ。今回は初のPC投稿なんだぜ？

アクセル「そうだぜ？落ち着いて行動しろよ。」

デュオ「そんなに大したことじゃあねえだろ…」

いやいや、めでたいぜ?……多分ナ…でも2カ月か・・・この小説書き始めて…

デュオ「そっちの方が重要だろ!!!どっちかというと!!!」

アクセル「そうでもないだろ。」

デュオ「お前ら……」

2か月なんざひよつこだよ…まだな…

アクセル「year」

デュオ「そうか、なら1年くらい書け。」

アクセル「そりゃ無茶だろ」

いけるかも…しれん…

2人「…何い!!」

多分な

さて…そろそろ時間だ!

次回も

Let's rock!!
(派手にいくぜ!!)

第6話 回想（前書き）

体中が痛い…大雨の中エアガンのデザートイーグルかいにいったかな…

第6話 回想

アリサ「紅茶で良い？」

デュオ「ああ。」

アクセル「ハイッ！」

デュオ「お前…相変わらずだな…」

アクセル「何が？」

デュオ「女を見ると超反応する。」

アクセル「これでもかなりマシにはなったんだぜ？」

デュオ「まあそうだな。むやみやたらに口説きに行かない事を考えるとかなりマシにはなっているな。」

アクセル「だろ？」

デュオ「いや、むしろよりバカになった気がする。」

アクセル「冗談言うなよ。」

デュオ「いや、マジだ。」

アクセル「……なに！？」

デュオ「まあどうでも良いか。」

アリサ「お待たせ！どうぞ！」

デュオ「ありがとう。」

アクセル「ありがとうございます！あつす！」

アリサ「別に敬語じゃなくていいよ、同い年だしね。」

アクセル「え、あ、そ、そうなんだ…（バカ兄貴…初耳だぞ…）」

アクセルはデュオを一瞬睨む

デュオは気付いてるのか気付いてないのか分からないが、紅茶を飲んでいた。

アリサ「ん…」

二人の顔を見つめるアリサ

デュオ「どうした？」

アリサ「…二人ともあんまり似てないね、兄弟なのに。」

デュオ「そうだな、ちなみに俺は親父似だ。髪の色とか瞳の色とか。」

アクセル「で、俺は母さん似。この紅い髪は完全に母さんと同じなんだ。」

アリサ「ふーん…性格も真逆だしね。性格も親に似たの？」

デュオ「俺は違うな、まあ少し親父に似ているが。」

アクセル「俺はだいたい半分ずつらしい。どちらかというと母さん似らしいが。」

アリサ「ふーん…」

デュオ「お前はどうなんだ？」

アクセル「あ、それは俺も気になる。」

デュオ「まあ髪は母親似なのは知ってるが。」

アリサ「うーん…瞳の色はパパに同じだけど…性格はあんまりどころとも言えないなあ…」

デュオ「まあ確かにそれは言えるな…」

アクセル「つーか兄貴は会ったことあんのかよ…」

デュオ「まあな。」

アリサ「うん、この前ウチにきたの。」

アクセル「なる程、それでか。」

デュオ「それは二回目だがな。一回目は七年前のシャーロだ。」

アクセル「七年前って言うのと…二人が出会ったって言う？」

アリサ「うん、その時。…今思えば、あの日以来から私はだいぶ普通になったんだなあ…」

デュオ「俺もだな…あの後、アイン…いや、親父が死んで、ゼロと出会い、お前をただひたすら探し続けていた…その中でコイツや母さんや、教会のみんなと出会ったんだよな…」

アクセル「俺は母さんと暮らしてて、学校に行ったり、遊んだり、勉強したり、とにかく最初はまともだったな…でも俺にとっちゃクソつまんねえ生活だった…兄貴と…コイツに…斬魔刀と出会うまではな…」

デュオ「そう言えば二年前にやたらスタイリッシュがどうか言ってたな。」

アクセル「そりゃアレだ、中二病ってやつだっけ？まあそんな感じ

だ。」

アリサ「中二病はみんな今まさにつて時期じゃないの？」

アクセル「そうなのか？」

デュオ「知るか。」

アクセル「まあ…とにかくだ…人生は刺激があるから楽しい…そう
だろ？」

デュオ「同感だ。何もない人生など価値はない。」

アリサ「でも強すぎる刺激はちよつとね…」

アクセル「Hey! そんな事言ったら人生楽しみきれないぜ？」

デュオ「お前は基準がおかしすぎだ。ドアホ。」

アクセル「良いじゃねえか、人生なんざ楽しんでむ為にあるんだから
な。」

デュオ「人生は楽しむ為にある…か…」

アリサ「なんか、アクセル君らしいセリフだね。良いと思うよ。」

アクセル「Thank you, lady. (ありがとう、お嬢さ
ん。)」

アリサ「you're welcome. (どういたしまして。)」

」

デュオ（お前も…英語が混じるようになってきたか…）

アクセル「おつといけねえ、本来の目的を忘れるところだった。」

アリサ「本来の目的？」

デュオ「コイツはテント借りに来たんだ。寝泊まりするためのな。」

アリサ「外、雨降ってきたよ。うちに泊まっていけば？」

アクセル「いや、いい。その程度じゃ何の問題も無い。」

アリサ「そもそもテント張る場所あるの？」

アクセル「……………」

デュオ「……………」

アリサ「もしかして何も考えてなかった？」

アクセル「……J e s u s …（最悪だ…）」

デュオ「…俺としたことが……o r z」

アリサ「じゃあ決まりだね！」

アクセル「……ハイ…」

デュオ「コイツに寝る場所あるか？」

アリサ「デュオの部屋で寝かせてあげれば？」

デュオ「二人入れるか？俺の部屋。物だらけだぞ？」

アリサ「大丈夫！私とデュオと一緒に寝れば問題なし！」

デュオ「…分かった……」

アクセル「悪いな、邪魔しちゃって。」

アリサ「うん、全然邪魔じゃないよ。むしろ楽しみなの！」

デュオ「何故に？」

アリサ「だってご飯食べるときとか人数が多い方が楽しいじゃない。」

アクセル「同感だな。」

デュオ（そんなもんかねえ…残念ながら俺にはよくわからん…）

アリサ「一人増えたから晩御飯の材料買いに行こう！」

デュオ「ああ…」

アクセル「L e t ' s g o !（さあ、行るか！）」

続く！

第6話 回想（後書き）

Let's start!（さあ始まるぜ!）デスサイズ・0のCrazy Party!（イかれたパーティー!）Let's rock!（派手に行くぜ!）

デュオ「コーナーに名前付けちまったか…」

アクセル「yeaaaaa ar!」

デュオ「コイツは乗りまくってるし…」

Let's start! the most crazy Party!（イかれたパーティーの始まりだ!）

デュオ「作者は暴走するし…」

アクセル「Let's dance!」

デュオ「何か踊り出した…」

アリサ「にやはは…大変だね…」

デュオ「いや…にやははって…何か変だぞ?」

アリサ「あれ?これが私の素だけど?」

デュオ「マジかよ…」

y e e e e e h a w !



デュオ「おいおい、作者がこの状況下でオカリナ吹き始めやがった」
アクセル「H o o o !」

デュオ「こっちはギター引き始めるし…」

アリサ「何か私も入りたくなってきたなあ…」

デュオ「ヤベェ！今回はこれで終わり！また次回！さようなら！」

第7話 平日の休日（前書き）

要するに史上最強の自宅警備員（笑）

第7話 平日の休日

デュオ「……………」

アクセル「ハアアアアアアアアア！」

今日は平日

アリサは学校に行っている

デュオは国籍はおろか、世界中何処を探しても存在しない存在なので学校など行けるはずはない。

アクセルはロス住まいなのだが学校はサボって来ている…と言うか、まともに学校に行ったことはない。

ちなみにコイツも天才的な頭脳の持ち主である。

で、二人が何やってるかと言うとデュオは読書

アクセルはシャドウボクシングをしている。

デュオ「……（暇だ…）」

20分くらいたった頃…デュオは本を読み終えたので別の本を読み

？）お前…いつの間にスタンド使いになってたんだ！？」

アクセル「いや？これはデビルトリガーの応用だからスタンドじゃあないが…」

デュオ「むやみやたらにそんなもん出すな！」

アクセル「わりいわりい。」

デュオ「つたく…」

アクセル「ウオオオオオオオ！」

再びシャドウボクシングを始めたアクセル

そしてデュオは再び読書を始めたと言う…

ちなみにこの奇妙な光景はアリサが帰ってくるまで続いたといふ…

続く！

改造によりデザインが少し変わってるって設定だがな…

ついでに名前を付けちまおうと言うことになった。

アクセル「なる程…」

デュオ「名前ねえ…」

ゼロ「いつまでもバスターショットじゃつまらんからそれはいいな…」

で、いくつか案をだした

1 light & dark

光と闇

2 hawk & eagle

鷹と鷲

3 angel & devil

天使と悪魔

4 luce & ombra

光と影（イタリア語）

5 lumiere & ombre

光と影（フランス語）

6 last&start

終わりと始まり

この6つだが…どうするかな…俺は4か5かな…って考えてるが…

デュオ「うーん…迷うな…」

ゼロ「ウーム…」

アクセル「むうううう…」

つー訳で

次々回までに決めときますんで…

今回はさようなら…

第8話 ウイルス? (前書き)

サブタイはぶっちゃけどうでもいい…

第8話 ウイルス？

次の日

アリサは学校へ行ったので

デュオとアクセルは相変わらず史上最強の自宅警備員となっていた

「あゝ……兄貴……何かやることねえのか？」

デュオ「本でも読んでろ」

しばらくして

デュオ「！！」

「！！」

デュオ「行くぞ…」

アクセル「ああ…」

家を飛び出す瞬間、電波変換する

アクセル「何か違う感じがしないか？」

デュオ「ああ…何か違和感が…」

アクセル「行けば分かるか…」

スバル「あゝ…暑い…」

ミソラ「あうゝうゝ…」

スバル「が…頑張ろう…ミソラ…もう少しで夏休みだから…」

ミソラ「うにゃあー…」

猫みたいな声が出たミソラ

スバル「ぐはっ!? (何か今のめちゃくちゃ可愛いっ!)」

スバルにはかなり効いたみたいだ

ミソラ「?どうしたの?」

スバル「い、いや、何でもないよ… (くそっ! 静まれ! ボクの理性! 落ち着けボク!)」

ミソラ「あー、もしかしてさっき”うにゃあ”って言ったのを可愛いと思ってドキドキしてるのか?」

スバル「いっ、いや…その…えーと…ハイ…そうです…」

ミソラ「やっぱりね。まあ顔真っ赤だから分かりやすいよ。」

スバル「あ…あの…ミソラ…」

ミソラ「なに?」

スバル「休み時間だからまだ良いもの…周りの視線が凄まじいんだけど…」

ミソラ「まあいいじゃん♪」

スバル「はああああ…」

ロック「うおい！また妙な電波反応が出たぞ！」

スバル「え…まさかこの前のヤツと一緒にの？」

ロック「似てはいるが…違うな…」

スバル「とにかく行ってみよう！」

ゴンタ「俺は念のために残っておくぜ。」

ツカサ「僕もそうするよ」

ジャック「俺は別方向から行ってみる。気を付けろよ。」

スバル「うん、ジャックも気を付けて。」

デュオ「悪魔が…ウイルスに取り憑いたか…」

アクセル「ウイルスを媒介としているようにも見えるが…」

デュオ「とにかくウイルスが悪魔化している…と言うことは魔界門がまた開いたと言うことか…」

アクセル「それとも前回の余りか…」

デュオ「まあいい、一分以内で片付けるぞ。」

アクセル「1分も要らん。30秒で十分だ。」

デュオ「drive！」

Zセイバーからは斬鋭弾、リベリオンからは紅い刃を連続で飛ばしている。

アクセル「judgement slash! five cut!
！（次元斬！五斬！）」

五連続の次元斬を放つ。

悪魔化しても所詮ザコウイルス

この二人の前には瞬殺であった。

デュオ「…普通のウイルスよりは手応えはあるな。」

アクセル「そうだな…ザコにしてはガッツはあったな」

30体以上を瞬殺（約42秒で）したお前らが言えるセリフじゃないだろ！

と作者が読者がおそらく抱くであろう感想を代弁しておきます。

デュオ「早くお前は家に戻れ！そろそろ来る！」

アクセル「りょーかい！」

アクセルは家に帰った

スバル「…何もないよ？」

ロック「いや…これは何者かが消した…いや、大量の反応があったが1分以内に消すのは不可能か…」

ミソラ「何か手がかりはないかな？」

スバル「うーん…」

ミソラ「…ねえスバル…コレなんだろう？」

スバル「ん？ウェーブロードに小さい穴が開いてる？」

ミソラ「なんの穴だろう？」

スバル「何かを突き刺したみたいな穴に見えるけど…」

ちなみにこの穴、斬魔刀をウイルスに突き刺した時に貫通した時のやつだったりする

スバル「とにかくこれだけじゃ分からないや…」

ミソラ「小さい穴だからしばらくしたら治るかな？」

スバル「多分ね。」

続く！

ちなみにジャックは…

ジャック「……………何もねえ…何も……何もないじゃねえかアアアアア！」

別方向から向かったジャックは何もなかったので一人叫んでいた……

今度こそ

続くっ！

第8話 ウイルス? (後書き)

L e t ' s r o c k ! !

H A H A H A H A H A H A H A H A H A H A ! 銃の名前が決ま
ったぜ!

デュオ「ついにか…」

ゼロ「ようやくか…」

名前は

ルーチェ&オンブラ

に決定DA!

まあそんなわけで…

今回は終了!

デュオ「なに!？」

See you!

第9話（前書き）

もうサブタイは思いつかないときは書かないようにします…ハイ…

第9話

デュオ「収穫なし…か…」

スバル「みたいです…ね…」

デュオ「唯一はこの小さな穴か…まあウイルスが暴れた時に開いたんだろうとは思うが…」

スバル「でもただのウイルスが一撃でウェーブロードに穴を開けられるのかな…？」

デュオ「またややこしい事件が起こってきたみたいだな…道は…ほっときや治るだろ。手がかかりが無い以上、これ以上はどうしようもない。解散だな…」

スバル「そうですね、」

デュオ「謎の電波反応、数秒で消えた反応…一応調べておこう…じゃあな…」

デュオ「……………」

アクセル「おう、帰ってきたか。」

デュオ「ああ。」

アクセル「どうだ、気付きはじめたか？」

デュオ「まだ大丈夫だろう。」

アクセル「そうか。」

スパーダ「少し話がある」

デュオ「なんだ？」

スパーダ「何かに取り憑く悪魔はな、自然に開いた魔界門からは絶対に現れることはない…意味が分かるか？」

アクセル「つまり、何かしらの儀式、もしくは意図的に門を開いた奴がいる…と言うことだな？」

スパーダ「そう言うことだ。」

デュオ「一体誰が魔界門を開いたんだ…」

アクセル「調べりゃ分かるさ。」

どこかの場所で…

??? 1 「フム…やはりこれだけでは出力がたりんな…もっと強力
でなければ完全解放は不可能か…」

??? 2 「やはり…の血と…の血が必要なのでは…?」

??? 1 「だがそれを集める事はできん…死神はもういないからな。
」

??? 2 「ならば…死神の血と力を継ぐ者で代わりにはできないの
ですか？」

??? 1 「なる程…試す価値はあるかもしれんな。」

??? 3 「では我々が行こう。」

??? 1 「分かった。頼む。」

続
く
っ
！

第9話（後書き）

L e t ' s r o c k ! !

我は作者なり！フハハハハ！

ゼロ「我はメシアなり！フハハハハ！」

デュオ「何やってんだお前ら…」

ゼロ「しまった！ついのでてしまった…」

アクセル「メシア…と言うと…救世主？なんで？」

ゼロ「昔倒した敵が言っていたセリフだ…」

飯屋の事だな

ゼロ「飯屋って…」

あいつ弱いんだよ…コピーエックスの第2形態の方がよっぽど苦労したわ！3日前倒したけど！

ゼロ「まあそれもそうだが…何故3日前？」

水曜日にロックマンゼロコレクション買ってきたんだよ！

ちなみに一昨日には全シリーズクリアしたかな。

デュオ「暇人だなオイ…」

アクセル「暇なら小説更新しろや」

我は作者なり——フハハハハ——（超棒読み）

デュオ「オイ逃げるなや」

アクセル「にがさんぞ！」

飛天御剣流 九頭龍閃！

二人「ガハッ！」

では see you！

第10話（前書き）

最高にハイってやつだア!!

第10話

あれから三日後

ミソラ「ねえ、スバル」

スバル「ん、どうしたの？ ミソラ。」

ミソラ「明日デート行こ」

スバル「いいよ。どこいく？」

ミソラ「あっちこっち行ってショッピング♪旅行に行くからね！」

スバル「そうだね：委員長に誘わ：いや：強制的に行くことになったから色々買っとかないと：」

ミソラ「じゃ決定♪」

デュオ「全く：アリサが休みに入ったのに遊んでやる時間も無しか
：」

アクセル「まあそう機嫌を悪くするなよ兄貴：さつさと終わらせれば遊べるだろ？」

デュオ「ハア：そうだな：」

と、会話している二人の周囲には大量の悪魔がいる

アクセル「さつさと終わらせる：judgement slash
！10 cut！」

10連続の神速の斬撃を一瞬で放ち、次元ごと斬る

デュオ「style shift change Gunmaster！Gan change！submachine gun！」

バスターショット、”ルーチェ”と”オンブラ”をサブマシンガンに変換し、さらに

デュオ「rain storm！」

高く飛び上がり、反転して銃を乱射する

悪魔らは乱射する銃弾をかわせずどんどん消えていく

アクセル「…これできめる… slash dimension…
last judge! (次元斬…最後の審判!)」

無数の斬撃が発生し…

アクセル「……………」

カチン

ザシユザシユザシユザシユザシユザシユザシユザシユ
ザシユザシユザシユザシユザシユザシユザシユザシユ
ザシユザシユザシユザシユザシユザシユザシユザシユ
ザシユザシユザシユザシユザシユザシユザシユザシユ
ザシユザシユザシユザシユザシユザシユザシユザシユ
ザシユ…!

全悪魔を裁いた…

デュオ「stinger drive!」

超神速の突きスティンガーと斬撃を射出するドライブの組み合わせにより無数の突きを射出した

アクセル「後僅か…fire works!」

二丁ショットガン、black rose（黒い薔薇）を装備し、散弾を撃ちながらヌンチャクのように振り回して撃ちまくる

アクセル「yeeeeeaahaw!」

Bang! Bang! Bang! Bang! Bang! Bang! Bang! Bang!

デュオ「strike slash…（ストライクスラッシュ）」

剣を左手に持ち、右手を刀身に添えて突撃の構えを取る

デュオ「ハアッ!」

神速の突撃からの強力な刺突

そのまま直線上の悪魔を串刺しにした

オオオオオアアアア！

数体がビームっぽい物を放ってくる

アクセル「フンッ！」

斬魔刀はビームっぽい物を悪魔らごと切り裂いた

デュオ「シールドブーメラン…」

左手に円形の盾を持ちビームっぽい物を防ぐ

するとビームっぽい物はそのまま悪魔へ跳ね返って行った

もちろん悪魔らは死んだ。

アクセル「これで最後か…」

デュオ「帰るぞ…」

[illegible]

続
く
つ
！

第10話（後書き）

L e t ' s r o c k !

我は作者なり！フハハハハハ！

デュオ「ゼロ：あの暴走作者を止めるにはどうすればいいだろうか？」

ゼロ「殺ればいいんじゃないか？」

デュオ「飛天御剣流の使い手に正面から挑んでも勝てん…」

W R R R R Y Y Y Y Y ! !

最高にハイってやつだアアア！

アクセル「最近こいつジョジョネタちよこちよこ入れるよな…」

今ウチのクラスの一部でジョジョ立ちが静かなブームなのさ！

デュオ（W R R R R Y Y Y Y Y ! やってる今がチャンスだ！）

ダッ！

ん？グブベボアア！

デュオ「よし！決まった！後頭部へのドロップキック！」

や…ヤヴァイ…イニシャルGが…

アクセル「なんだ？イニシャルGって。」

胃の中の食物が苦い液体と共に逆流してくるやつだ…

アクセル「誰かビニール袋持って来い！」

ゼロ「ほい。」

ううううう…ヤヴァイ…マジでイニシャルGが…

今回はこれでおわり…

see you…

うおえええええ…

第11話

大量の悪魔を倒して…

デュオ「悪魔を裁く次元斬か…」

アクセル「いや…斬魔刀は全てを…あらゆるものを裁く…」

デュオ「…ならその裁きは悪魔以外にも有効か？」

アクセル「無論だ。この斬魔刀に斬れぬ物は存在しない。」

デュオ「なら…」

B a n g !

デュオ「天使も裁いてくれよ？」

アクセル「面倒な事になっちまったな…天使も現れやがったか…」

キイヤアアアアアア!

デュオ「ハア…うるさいな…黙ってる…」

B a n g . B a n g . B a n g . B a n g . B a n g . B a n g . B a n g .

B a n g . B a n g . B a n g .

天使の翼を打ち抜き、頭を撃つ

数体の天使を一瞬で撃ち抜いた

アクセル「……シッ！」

ザシユザシユザシユザシユザシユザシユザシユ
ザシユザシユザシユザシユザシユザシユザシユ
ザシユザシユザシユザシユザシユザシユザシユ
ザシユザシユザシユザシユザシユザシユザシユ
ザシユザシユザシユザシユザシユザシユザシユ
ザシユ

e — — — d i m e n s i o n s l a s h l a s t j u d g
— — — —

珍しく無言で技を繰り出す。

天使が槍のような武器を振るってくる

アクセル「…セイツ！」

しゃりん！

カチン

刀を納めた瞬間

天使はバラバラにされていた

デュオ「うおおおおお！」

h i g h t t i m e しかがらのdriveを放つ

デュオ「まだだ…stinger drive…！」

超神速の突きを射出する

デュオ「まだだ…dancing sword…！」

回転しながらベリオンとゼットセイバーで斬りつけながら突っ込

んでいく

デュオ「チェーンショット…」

バスターショットとチェーンロッドを一体化させた武器で天使を引き寄せて

デュオ「トリプルロッド…」

引き寄せた天使を槍の超神速連続突きで倒す

———サウザントスラッシュ———

実はゼロの技だったりする

アクセル「Illusion blade tornado…（幻影刀・嵐…）」

大量の幻影刀が周囲に出現し、一つ一つが高速回転をはじめ、回転しながらアクセルの周りを高速回転する

その様子はまるで、刀の結界のようだ

強力な技を連発したせいで体に負担がかかっていたが

アクセル「I l l u s i o n … b l a d e …」

四本の幻影刀を出現させた

アクセル「G o … !」

巨大な盾を持った天使を切り裂いた

デュオ「上出来だ… c h a r g e … 完了… ! f i r e ! (発射!)」

凄まじいビームの奔流によりアクセルが切り裂いた天国門を完全抹消した

デュオ「どうした…いつになく静かで激しい戦い方だったが…」

アクセル「ちょっと昔…天使と色々あってな…つい…」

デュオ「そうか…俺も天使とは色々ややこしい事があったからな…
分からなくはないが…とにかくサテラポリスが来る前に帰るぞ

続く
く
…

…
└

第11話（後書き）

Let's rock!!

我はメシアなり！フハハハハ！

ゼロ「貴様ごときがメシア（救世主）ならば近所の爺さんが創造神でも不思議ではないぞ…」

ダニィ！？

メシア「で、近所の子供が大天使とか、友達が破壊神とかでも不思議ではない気がする…」

あ、でも俺の中学の時の友達はマジで破壊神と呼ばれてたぞ？

デュオ「なんつーあだ名だ…」

他にも

死神（気配0だったから）

ゴジラorでっていう（無類のゴジラ好きだったから）

怪長（眼が死んでいる生徒会長。でも性格はムチャクチャ明るい）

仮面ライダー（ライダー好きだったから）

とかがいたぜ

デュオ「お前は？」

俺か？俺は色々あったな

例えば

戦闘狂

切り裂きジャック

H A N P E N

とかだな

デュオ「H A N P E Nって最後おかしいだろ！」

気にすんな！赤ペン貸してくれと破壊神に言われてはんぺんかしてくれと聞こえたからH A N P E Nになったただけだ

間違えるなよ？英語でH A N P E Nだぞ！

戦闘狂はまさに戦いを求めていたから

切り裂きj a c kは常にナイフ持ち歩いてたからだ

つまり俺はただの戦闘狂のH A N P E Nだったわけだ

デュオ「なるほど、だから自力で戦闘法を編みだそうとしているわけだな？」

そのとおり！

では

S e e
y o u !

第12話（前書き）

テスト一週間前だが関係なく投稿＋執筆するぜ！

第12話

スバル「…またですか…暁さん…」

暁「ああ…突然現れた大量の電波反応が数分で完全に消える…しかもこれで三回目…かなり異常な事態だ…」

ツカサ「しかも一切手がかりは無し…」

ミソラ「唯一かと思った二回目の小さな穴は修復されて何も無し…」

ジャック「暁…その大量の電波反応の”消え方”はどういう感じで消えてるんだ？」

暁「どうということだ？」

ジャック「全ての反応が同時に消えているのか、それとも徐々になのかだ。」

暁「ほぼ同時に大量に消えたり徐々にだったりするが…徐々に消えていくのが最も近いかな。」

クインティア「だったら何者かがその大量の電波反応を消し去っていると考えの方が妥当ね…」

スバル「そもそも突然現れる謎の大量の電波反応が何なのか…」

アシッド「一つ言える事は確実にこの世界に何か大変な事が起っているということ…」

ウォーロック「……そーいやあ…あの謎の反応が消えた後に俺ら、たどり着いたけどよお…なんか違和感があったような…」

全員「「「「なんだって!?!」「」「」「」」

ウォーロック「なんか…気のせいかもしれんが…ノイズ率がその反応があつた地点の周囲だけ少し高かった気がするんだが…」

暁「本当か!?!」

ウォーロック「いや…ホント少しだぞ? 25%とか30%有るか無いか位だが…」

スバル「何でそんな大事な事黙ってたの!?!」

ウォーロック「いやあ…大したことじゃないと思つたからなあ…」

暁「この状況下では無いよりはるかにマシだ!」

で。

R R R R R R R R !

暁「ハイハイ…もしもし? ……ナニ?」

スバル「まさか…」

暁「みんな! 会議は中断だ! また反応がでた! 消える前に急ぐぞ!」

全員「了解!」

で!

スバル「遅かったか…」

反応があった地点にはすでに何もなかった

ちなみに理由は天使が現れてアクセルが無理に技を連発したために早く決着が付いたのである

暁「何か手がかりがあるかもしれない。探してみれば何かある可能性があるから探してみよう。」

で

暁「久々に”で”多いな」

そんなときもあるさ

閑話休題

で

ミソラ「ん？ねえスバル。これなんだろう？」

スバル「さあ…」

金色の破片が落ちていた

スバル「暁さん！ちょっとこれを…」

暁「ん？」

ミソラ「これなんですけど…」

暁「何かの…破片…か？」

実はアクセルが斬った天国門の破片で、斬った際に飛び散った破片をデュオが撃ち漏らしたやつだったりする

暁「とりあえず持ち帰ってヨイリー博士に調べてもらおう。」

ツカサ「何だろう…コレ…」

ヒカル「ん？なんかの破片か？紫でなんか不気味だが…」

ツカサ「とりあえず持って行ったほうがいいかな？」

ヒカル「いや、下手にさわると何が有るか分からん。とりあえず誰か呼んでこよう」

暁「こっちにもか…スバルとミソラが金色の破片を拾ったがこっちは紫…」

暁が回収使用とすると

ビキッ！

ひび割れて全て砂になって風でどこかへまき散らされた

暁「あ…」

ツカサ「触れてないのに…」

暁「とりあえず一旦戻ろう。」

続
く
っ
!

第12話（後書き）

Let's rock!!

か…体が…

アクセル「どうした？」

今日な…熱中症＋風邪という最悪な状況だ…

アクセル「オイオイ、熱中症って…そんな体で大丈夫か？」

大丈夫じゃない、大問題DA…

アクセル「早く寝て体調を回復させろよ…」

そうするぜい…

頭痛え…

では…See you…

第13話

暁「で…さっきの破片の分析結果だけどな……………」

全員「…」

暁「……」

全員「……」

暁「何も分からなかった（笑）」

ズデーン！

スバル・ミソラ「こんだけためといてソレですか！？」「」

クインティア「（笑）とか言ってる場合じゃないわよ…シドウ…」

ジャック「無駄に過ごした数十秒返せ！」

ツカサ「あはは…」

ゴンタ「（腹減ったなー…）」

1人だけ違う事を考えてるが気にしないで欲しい

と言うか気にしてたらきりがない

で。

暁「いや…あれな、突然砕け散って消えてなくなったんだって…」

スバル「砕け散った？」

暁「そうだ。あ、でもあれが砕け散った瞬間にかなり強い電波が発生したらしいぞ。」

スバル「どう言うことだろ…」

ツカサ「…多分…圧縮された電波が詰まっていたじゃないかな？」

アシッド「おそらくそうでしょう。」

ミソラ「て、事は…あの破片って…」

スバル「物質化するほど圧縮された電波？」

暁「おそらくな…だが単純に電波を圧縮して物質化するなんて不可能だ…しかしあの破片はただ圧縮しただけなのに結晶になって物質化していた…」

どんだん事件がややこしくなっていくのであった…

で、話をややこしくしている悪魔&天使狩人の兄弟は…

デュオ「どこに行きたい…?」

アリサ「んゝ…あっ!」

デュオ「決まったか？」

アリサ「海に行きたい！」

デュオ「わかった。だが海と言ってもどこの海に行く？」

アリサ「うーん…まあそこはまた後にしよう♪」

デュオ「そうするか。」

デュオはアリサと旅行の計画をしていた。

そしてアクセルは…

アクセル「…セイツ！」

しゅりん！

ヴンッ！

アクセル「…ハアッ！」

ブンッ！

アクセル「ハッ！」

ズガンッ！

アクセル「フウ…」

スッ…

刀の修行をしていた

ちなみに外の誰もいないところで斬魔刀を使っている。

アクセル「……。」

再び刀の柄を右手で握り締め鞆に左手を添え構える。

アクセル「judgement slash…」

しゅりん！

ザシュ！

アクセル「Illusion blade…」

幻影刀を周囲に日本出現させて一つを左手で幻影刀を持ち二刀流となり、もう一つを回転させながら飛ばす

アクセル「フンッ！」

ブン！ブン！

アクセル「ハアッ！」

ガキン！

アクセル「セイヤアッ！」

ザシュ！

幻影刀を消滅させ

チャキン…

斬魔刀を鞘に納めた。

アクセル「少し休憩するか…」

岩の上に座り、持参したスポーツドリンク（安売りしてたので500ml入り68円×10本購入）を飲む

アクセル「フウ…（そう言えば兄貴は旅行どこにするのか決めたかな…？ いや…途中で保留してそうだな…）」

なんて事を考えて、修行を再開した。

で。

旅行計画を保留してそんな兄貴とやはは…

デュオ「シーサーアイランドの海はどうだ？」

アリサ「そうね！ここならここからかなり遠い訳じゃないしいいかもね。」

デュオ「海なら…泳ぐ…のか？」

アリサ「そりゃあもちろん！」

デュオ「そうか…あ…俺水着持ってない…」

アリサ「じゃあ明日にでも買いに行こう！」

デュオ「わかった。…（釣具屋に途中で寄るか…）」

何故に釣具屋かって？

デュオ「魚釣って俺が料理すれば食事代は省けるだろ。」

と言うことである。

アクセル「兄貴はやっぱりバカだ…」

続く！

第13話（後書き）

Let's
rock!!

I'm absolutely crazy about it!

Let's start the most crazy Par

Let's rock!!

アクセルの表情

$$\left(\begin{array}{c} \circ \\ \square \\ \circ \end{array} \right);$$

アクセル「突然英語を叫びまくってどうしたんだ？」

s p a r k i t u p ! !

アクセル「何言ってんだか…」

H o o o o o ! H o o o o o !

アクセル「ついに発狂したか…？」

H a H a H a H a H a H a H a H a !

アクセル「どうにもならんか…」

デュオ「こいつを止めるなら…：…フンッ！」

バキッ！

グベア！

ぐだぐだ続く…

第14話 食べ物の恨みは恐ろしい（前書き）

意味不明なサブタイ

第14話 食べ物の恨みは恐ろしい

デュオ「……（怒）。」

アクセル「……。」

明らかに激怒のオーラをだしながらアクセルに詰め寄るデュオ。

ちなみに効果音は

ゴゴゴゴゴゴゴ……

もしくは

ドドドドドドド……

である

デュオ「貴様……俺の……俺の……俺のフルーツゼリー（自作）食ったな……！（怒）」

アクセル「いやあ……美味そうだったからつい……疲れてたし……」

デュオ「最後のひとつだったんだぞ…！」

アクセル「いやぁ…その…悪かった…」

デュオ「ふざけるな…！（超怒）」

アクセル「……。」

アクセルは視線でアリサに助けを求めた

しかし…

アリサ（あれは自業自得だよ…素直に謝ったら許してくれるかもね。）

アクセル「……ごめんなさい…」

デュオ「…まあ過ぎた事はもう仕方ない…次回から気を付けろよ…」

アクセル「……ハイ…」

デュオ「と言って許すと思ったかこのドアホがあああああアアアアアアアアア！」

アクセル「えええええええええええええええええ！！」

ガシツ

アクセルの胸ぐらをつかんで

デユオ「二ぺん死んでこいヤアアアアアアアアアアアアアアア！」

ブオンツ！

窓全開にして投げ捨てた

ヒュー…………ドゴオオオオオン！！

どっかに直撃したのだろうか？

凄まじい音が聞こえた。

アリサ「あゝあ…またやっちゃったね…」

デュオ「悪いが今回ばかりは許せん…俺の楽しみを奪ったからな…」

アリサ「でもあのゼリーはスツゴク美味しいからまた作って食べさせて欲しいな♪」

デュオ「ああ…また作るさ………お前の為にな…」

アリサ「ありがとう♪デュオ。」

デュオ「さゝて…準備だけでもしとくか…」

実はこのフルーツゼリー

レシピを書いたのは アインだったりする

で、デュオは実は甘いものが結構好きだったりする…

そんな夜の出来事だった…

ちなみにアクセルは…

アクセル「グベア！」

展望台に顔面から突っ込んでたとき。

続く！

第14話 食べ物への恨みは恐ろしい（後書き）

L e t ' s r o c k ! !

……眠い！

デュオ「何してんだか……」

s e e y o u !

第15話（前書き）

今回は再びPC投稿

ガチャ…

アクセル「てめえ…」

デュオ「さて…そろそろゼリーが固まり始めたか？」

プチッ

アクセル「無視すんなやアアアアアアアアアア!!」

デュオ「ああ、帰ってたのか。」

アクセル「ああ、帰ってたのか。じゃねえ!二回もぶん投げやがって!」

デュオ「自業自得だバカタレ。」

アクセル「いいじゃねえか…一個ぐらい…」

デュオ「せめて俺に許可取ってからにしろ。」

アクセル「ケチケチすんなって。」

アクセルは冷凍庫からアイスキャンデー（自作）を取り出す。

兄弟そろってすさまじいスキルの持ち主である

ちなみにこのアイスのレシピを書いたのは二人の母、アンジェリーナだったりする。

ちなみに以前母は料理がかなりマズイと言っていたがそれはよくわからない工夫をするからであってそれを抜きにすればかなり美味かったりする

まあこんな感じで過ごす二人だった……

続く!!

このコーナー不定期に変更します

すいませんホント・・・

第16話

次の日

アリサ「じゃあ行こっか。」

デュオ「ああ。」

アクセル「じゃーなー、楽しんで来いよ……。 (棒読み)」

アリサ「うん！ありがとね！じゃあ行ってきます！」

デュオ「…行ってくる……。…悪いが留守中に奴らが来たら…頼むぞ…」

小声でアクセルに言う

アクセル「わかってるさ。安心して楽しんできてくれよ。」

小声で答えるアクセル。

ガチャ…

二人は昨日約束した通りに買い物（主にデュオの）に出掛けた。

アクセル「さくて…そろそろ来る頃だと思いが…」

ビュウウウ！

強い風が吹いた。

窓際に立っているアクセルのそばに

1人の少女がいつの間にか立っていた

その少女は栗色の長い髪をポニーテールにして白基調に青が入ったコートを着ている。

アクセル「よう、やっぱり来たか。」

???「あら、まるで来るのが分かってたみたいな口振りね。」

アクセル「この国に来たくらいにお前の姿を見たような気がして探したらお前が居たから逆にそっちも見つけてくれてるかと思ってな、

それにお前の波長を感じたし。」

「なるほどね…ところで貴方はこんな所で何してるのかしら？店はどうしたの？」

アクセル「仕事だよ。」

「合言葉有りの依頼？」

アクセル「いや。自主的につて言った方がいいな。今回の事件はかなりややこしい話だしな。」

「ふーん…じゃあ何で他人の家にいるのかしら？」

アクセル「兄貴と兄貴の彼女が居て良いって言ってくれたからな。」

「貴方のお兄さんって確か独りで魔界の覇王を倒しちゃったのよね？」

アクセル「ああ、しかも大天使5体を全滅させやがった。我が兄ながら恐ろしいぜ…そしてその兄貴を昨日怒らせち待ったんだよなあ…」

「一体何したのよ…」

アクセル「…兄貴の最後の一つのゼリー食っちゃった…」

「…………。」

アクセル「それでここから300mぐらい二回投げ飛ばされた…」

??? 「自業自得よ…」

アクセル「で？お前は何してんだ？シオン。」

シオン「貴方と同じよ。」

アクセル「だよなア…じゃなかったらそんな物騒なモン持ち歩かねえよな…」

手に持っているトランクケースには実は銃と剣が入っている。

アクセル「で？どうだった。世界中を見てきて。」

シオン「結構良かったわ。でも世界中に悪魔や天使は何処でもでてくるのよね。」

アクセル「そろそろ店に帰ってくるか？」

シオン「そうしようかしらね。ほとんど見てきたし。」

アクセル「んじゃあこの仕事手伝ってくれよ。…兄貴にも言つとくからさ。」

シオン「いいわよ。私はちょっと離れた所のホテルに泊まってるから何か用事があれば来て頂戴ね。じゃあね。」

ビュウウウ！

再び強い風が吹いた。

シオンはいつの間にか居なくなっていた。

アクセル「あいよ…」

続く…

第16話（後書き）

ハイまた新キャラ登場

シオン

アクセルと昔色々あった、風と共に現れ風と共に居なくなっている謎の少女

やはり悪魔狩人である。

本人はアクセルと付き合ってるつもりだがアクセルはあまり気付いてない。

見た目は物凄いレーザーぶっ放す某魔砲少女みたいな感じ

わかる人にはわかる話

以上

第17話（前書き）

さーて…そろそろ話をややこしくしていきますか…

第17話

スバル「あゝあ…ホント最近何なんだろうね…」

ミソラ「事件が起こったと思って駆けつけたらゼーんぶ消えちゃってるし…」

ツカサ「僕に良い考えがあるよ。」

キラーン

と言う効果音が出そうな表情で言ったツカサ
二人「何？」

ツカサ「一回反応が有ったところは多分もう一度同じ事が発生する可能性が高いと思うんだ。だからそこで見張っておけば正体が掴めるんじゃないかな？」

スバル「なるほど！流石ツカサ君！」

ミソラ「それなら明日から早速始めよう！」

「「「オー！」」」

で、作戦を曉達に報告して

早速作戦を実行した

午前5時

コダマ小学校グラウンド

スバル・ミソラ ペア

スバル 「うううううう…ね…眠い……」

ミソラ 「ホント、スバルは朝に弱いよね…」

スバル「いやいや…今朝5時だよ…?」

ミソラ「早くから居た方がいいじゃん。いつ来るか分からないし。」

スバル「マア…そうだけど…」

同時刻

ドリームアイランド

ツカサ「さーて…ゴミ掃除しながら待つとしようかな。」

ヒカル「おいおい、いきなり事件が起こったときの為に体力は温存しておいた方がいいんじゃないか?」

ツカサ「大丈夫だよ、軽いウォーミングアップみたいなものだからね。」

ヒカル「ならいいが…」

同時刻

両方の間ぐらい

コダマタウン上空

ジャック・ゴンタ ペア

ゴンタ 「ZZZZZ…」

オックス 「オーイ、起きろー。」

ジャック 「多分むりだとおもうぞ…」

オックス 「まあとりあえずやれるだけやっつくさ。」

ジャック 「んじゃ頼むぜ」

同時刻

W
A
X
A

暁・クインティア ペア

暁「よし、これでコダマタウン周辺に反応があればすぐにわかるはずだ。」

クインティア「貴方は無理しない方がいいわ…だいぶ解消されたとは言え、長時間の電波変換は出来ないんでしょ？」

暁「やっぱりばれてたか。」

クインティア「当たり前よ…」

暁「まあ死なないようにはするさ。」

午前7時

スバル・ミソラ

スバル「……………」

ミソラ「スバル……」

スバル「……………」

ミソラ「…スバル？」

スバル「……ZZZZZ…」

ミソラ「ムツ…起きろーっ!!」

バッチ「イイイイイン!!」

凄まじいビンタを食らったスバル

スバル「いったあああああ! な、なに!？」

ミソラ「ス〜バ〜ル〜？」

ゴゴゴゴゴゴ…↑オーラの効果音

ロック「ミソラはご立腹だぜ？ククッ…」

ミソラ「フンッ！」

スバル「ご、ごめんミソラ…」

ミソラ「……。…」

スバル「…。(ヤバイ…どうしよう…)」

ハープ「後ろから抱き締めてあげたら？(笑)」

ハープがスバルの耳元で囁いた

スバル「よ、よし…えいっ！」

ミソラ「ふえっ!？」

スバル「ごめん…ミソラ…もう寝ないようにするから…／／／／／」

ミソラ「う、うん…／／／／／」

スバルがミソラから離れようとしたとき

ミソラ「ス、スバル…も…もうちょっとだけ…このままで…／＼／＼／」

スバル「う…うん…（無茶なお願いだなあ…は…恥ずかしい…）」

ミソラ「（アハハハハハハ…何でこんなお願いしたんだろ…は…恥ずかしいよお…）」

同時刻

他チーム一括で…

「「「「「なんでも起こらないんだア！！！」
「
「
「
「
「

暇してたとき

続くっ！

第18話（前書き）

あー…手が痛てえ…

第18話

午後1時

まだ何も起こらない

午後三時

いまだになにもない

午後5時

やっぱりなにも起こらない

午後9時

スバル「もう何もないから帰らない？」

ミソラ「ダメ！いつ来るか分からないよ！？」

スバル「わかったよ…もうとことん付き合おうよ…」

午前零時

スバル「……ロック……。」

ロック「分かってる…」

ミソラ「…ハープ…。」

ハープ「分かってるわ…電波変換ね…」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ…

突然、周囲の空気が、世界が、空間が、変わった…

オオオオオオオオオオオオオオ！！！！

地の底から聞こえてくるような叫び声

大きな槍や鎌、剣、棒…様々な武器を持った悪魔が出現した

ロック「なんだコイツ等！？」

スバル「さあ…でも…」

オオオオオオオオ！

スバル「敵なのは間違いない！ロックバスター！」

バシユン！

グオアオアアア！

バスターが当たった悪魔は一撃で消え去って砂になった

ミソラ「ショックノート！！」

ギターを鳴らして音符を飛ばす

やはり当たった悪魔は一撃で砂になり消滅する

スバル「あれ…一撃で…もしかして…」

ミソラ「コイツ等…」

「「メチャクチャ弱い！？」」

と、言うわけで試しにスバルが近くの悪魔にハイキックを入れてみると

バンツ！

一発で砂になり消滅した

スバル「弱っ！！」

ミソラ「よし、バトルカード、マッドバルカン！」

バルカンを撃ちまくる

やはり直ぐに消え去る

スバル「バトルカード、エアスプレッド！」

誘爆により複数の悪魔を消し去る。

ツカサ「スバル君！ミソラ！ちゃん大丈夫？」

スバル「大丈夫！コイツ等メチャクチャ弱いんだ！でも数は多いから気を付けて！」

ツカサ「分かった！ヒカル！いくよ！」

ヒカル「了解！」

ツカサ「ロケットナックル！」

やっば即刻で消え去る悪魔

ヒカル「弱ええ！！なんだこいつら！」

ジャック「おーい！大丈夫かー！？」

ゴンタ「なんか大丈夫っぽいぞ…」

ジャック「まあ行くか、ペインヘルフレイム！」

かなり消え去る

ゴンタ「オックスフレイム！」

燃え尽きる悪魔達

暁「なんだ…あいつら…アシッド、解析を頼む。」

アシッド「了解。」

クインティア「じゃあ私は先に行ってるわ。」

暁「頼む。」

で、少し離れた場所

アクセル「あーあ：ついに悪魔の存在がバレちゃったか：」

デュオ「別に悪魔の存在がばれるのは大した問題じゃない。問題は俺たちのような悪魔狩人（デビルハンター）の存在がバレるのが厄介だ。まあでも悪魔の存在はアイツ等はずでに教えたから知ってるがそれだけだ。それに悪魔は俺が封印したと言ってあるから多分バレはしないはずだ。」

シオン「で？どうする？これじゃあ下手には動けないし。」

デュオ「だが仕方ない俺達は行かなければならない。：悪魔狩人（デビルハンター）として：」

スバル「数が多すぎる！一度に沢山倒すようにしよう！ノイズチェンジ！リブラノイズ！NFB！メテオライトバレッジ！」

大量の光が一気に悪魔を飲み込む

ミソラ「よし！バトルカード、ゼツメツメテオ！」

隕石が降ってきて悪魔達を破壊する

ツカサ・ヒカル「ジェミニ・サンダー！」

極太の電撃を撃つ

ゴンタ「ブロロロロ！行くぞ！オックスフレイムウ！」

強力な炎で悪魔達を焼き尽くす

ジャック「食らえ！ペインヘルフレイム！」

火炎を飛ばし、悪魔達を倒していく

クインティア「ゴッドレイン！」

雨を降らせて周囲の悪魔達を一掃する

暁「オメガレーザー！」

両肩から極太レーザーを撃ち直線上の悪魔を一掃する。

デュオ「行くぞ！」

悪魔達の群れに突入しようとした瞬間！

バシューーン…ドォーン！！

アクセル「なんだ？何の音だ？」

デュオ「…！この音は…ロケットランチャー…！？」

世界各地の戦術を駆け抜けてきたデュオならば分かった

これはロケットランチャーを撃った音だと

デュオ「お前らはアイツ等に出来るだけばれないように悪魔を倒してくれ。俺はさっきの音をたどっていく！」

了解

という声が聞こえる前にすでにデュオは居なくなっていた。

s t y l e s h i f t c h a n g e

s t a r r i g h t m o v e

超高速の移動を得意とする s t y l e

まるで星の光のように速い所から名付けられた。

アクセル 「さーて、行きますかア。」

ダッ

シオン 「あ、ちょっと待ってよ！」

タッ

アクセル 「H o o o o ! h o o h o o h o o o ! !」

デュオに負けない速さで疾走しながら悪魔とすれ違いながら抜刀術で斬る。

シオン 「ハア…やっぱりこうなるのね…」

愚痴をこぼしながらからも離れた場所から銃で悪魔達を正確に狙い撃ってゆく

B a n g ! B a n g ! B a n g !

パシュン！

アクセル「H e y !俺に当たるだろ！気を付けろ！」

シオン「 当たる じゃなくて 当てようとした のよ。」

アクセル「オイオイ！殺す気か！？」

シオン「ハア…ちょっとこっち来てみなさい…」

アクセル「ん？おっと…こりゃ危なかった…バレるところだった…すまん…。」

シオン「貴方は突っ走って行っちゃうから危なっかしいのよ…」

アクセル「じゃあ俺はここからI l l u s i o n b l a d eを飛ばしてるか…」

突っ立ったままで幻影刀を連続で射出する

そのまま数分後…

スバル「や…やっとな滅したかな…？」

ミソラ「もう居ないんだから全滅したんじゃない？」

暁「反応も消えてるから多分大丈夫だろ…」

スバル「…あー…もうだめだ…眠い…」

ミソラ「あーもう！まだ寝ちゃ駄目！起きて！起きて！」

スバルの体をひたすら揺する

スバル「起きる！起きるって！起きるからやめて〜！」

アクセル「あゝもう早いところ立ち去ってくんねえかな…門壊せねえよ…」

シオン「それより何で門の存在に気づかないのかしら…」

アクセル「その辺は何かややこしい話があるんだ。」

シオン「そうなの？」

アクセル「って兄貴が言ってた。」

シオン「何よそれ…」

アクセル「しゃーねーなあ…ちよいと強引だが…」

アクセルは右手を前に突き出し眼を閉じた

シオン「（物凄い集中力だけど何やってるのかしら…？）」

スバル「……！ミソラ危ない！」

スバルはミソラを抱きかかえて後ろに下がる

さっきまで二人が立っていた場所には青白い剣が刺さっていた

直後に沢山の同じ剣が飛んできた

暁「どうやらまだ居るらしいな…行くぞ！」

全員「了解！」

剣が飛んでくる方向へ全員飛び去った

アクセル「上手いこと引っかけたか…よし…次だ…」

刀を抜いて

アクセル「幻影ノ領域・序」

スバル達に魅せる幻を作り出す

アクセル「まあしばらくは道に迷っていただくとするか。さ、とつとと門を壊しちまおうぜ。」

「貴方がまずやってくれないと私の力じゃ壊せないわ。」

「アクセル分かってるさ………」

物凄い集中力を再び発揮する

「アクセル 夢幻一閃！」

次元と空間ごと斬り裂き、魔界門を切り刻む

シオン「ハアアアアアッ！！」

風が吹き荒れる

切り刻まれた門を風が飲み込み、さらに細かく切り刻む。

「judgment slash!」

[illegible]

徹底的に切り刻まれ

もはや微粒子以下の細かさになった

アクセル「さーてえ。さっさと帰るかア。」

シオン「お兄さん待っておかなくていいの？」

アクセル「いいンだよ。ほっときゃ帰ってくんだろ。」

シオン「そ、そう。」

アクセル「送ってくよ。夜遅いしな…いや…もう朝か…」

ちなみに現在時刻

午前4時

真夏なのでかなり明るい

で。スバル達はアクセルの幻影でしばらく道に迷った後に戻ったら何もなかったなので解散して帰宅したとき。

続く！

第18話（後書き）

地味に最長…

第19話

デュオ「グッ…やはり長時間のstar right moveは体が若干辛いな…」

styleを通常に戻し、さっきの発射音の場所へ駆け抜ける

バシューーン…ドォォーン！

また音が聞こえてきたな…

これで四発目か

悪魔を的確に狙って撃ち、爆発はスバル達の攻撃に合わせてるために自分の存在はバレない。

何処の誰かは知らんがなかなか考えてるな…

まあ同業者なら協力してもらえらるなら有り難いが…

まあ悪魔の存在を知ってるんだ…まともなヤツではないだろうな…

そんな事を考えながら走った

しかし相手もこちらに気づいて居るのか
姿を現さない

デュオ「厄介だな…一度戻るか…」

俺は帰るふりをしてステルスを使用する

まだ試作段階で15分前後しか持たないが…

そのまま建物の屋上へ向かう

数分後…やはりロケットランチャーを抱えたヤツが居た

黒のニット帽に漆黒のコートをきている

デュオ「……女か…」

そう判断した理由？

体つき見りゃあ一瞬でわかるさ。コート結構きついみたいだしな。

それと短い黒のショートパンツをはいている

もしこいつが特別な理由がなく男だったら俺は間違いなく即座に射殺しかねないがまあその可能性は低いだろう…いや…ほぼ0だろうな…

しかし黒のニット帽から若干髪が見えかけている……暗くて色は判断出来ないな…もう少し月明かりの当たる場所に行ってくれれば有り難いが…

とか考えて居ると上手いこと動いてよく光が当たる場所に移動してくれた

髪の色は…白？いや、銀…？グレー？

とにかく白っぽい色だ

デュオ「まさかな…」

俺は一つの可能性を頭に浮かべたがすぐさま消し去った。

ジャキン

ソイツがまたロケットランチャーを構えた

その瞬間

デュオ「checkmate…（チェックメイトだ…）」

俺はソイツの頭部を銃で狙いながらゆっくり影から歩み寄った。

デュオ「別に俺はアンタの命を奪おうとまでは思っていない。だがまず…は…」

俺はニット帽に左手をかけ、外した

銀色の長い髪が露わになる

やはり女だったか

そして

デュオ「顔を見せてもらおうぞ…！」

肩をつかんで

無理やりこっちを向かせると

デュオ「…!？」

冗談だろ…？

こんな展開有り得ない…

しかし実際に起こっている事実…

これは運命なのだろうか…？

もし運命なら俺は運命を恨む…

何故かって…？

その女が…

アリサだったからさ…

続く
⋮

きや直るだろ…多分…」

s
e
e
y
o
u
!

第20話

何かの悪い冗談であって欲しい

本気でそう思った

そう思ったのは三回
目だ

デュオ「アリサ…何をしてるんだ…」

アリサ「貴方が絶対に考えたくない事よ…」

デュオ「だろうな……いつからだ…？」

アリサ「…何が？」

デュオ「悪魔を狩るようになったのはだ…」

アリサ「二年くらい前かな……関わったってだけならもしかしたら一番速いかもしれないけど…」

デュオ「関わった？」

アリサ「昔…誘拐されかけたって前に話したよね？」

デュオ「ああ…」

アリサ「その犯人が実は悪魔だったのよ…ある男の人が助けてくれたから助かったけど…」

デュオ「……………」

アリサ「でも今考えたらその悪魔…上級悪魔だったかもしれない…
…ごめん、話がそれたねとにかく私が悪魔を狩るようになったのは
それが理由よ。」

デュオ「まあ復讐みたいなものか…」

アリサ「ごめんね…黙ってて…!?!?」

デュオはそのまま抱き締めた

デュオ「この仕事は命懸けなのは承知してるよな…?」

アリサ「うん…」

デュオ「俺はお前を死なせたくはない…」

アリサ「大丈夫よ…」

デュオ「悪魔狩りを止めろと言っても無駄だよな…」

アリサ「当たり前よ…せめて私を誘拐しようとした悪魔を仕留める

まではね・・・」

デュオ「ならば・・・」

デュオは電波変換を解除した

ゼロ「（何をするつもりだ・・・デュオ・・・!!）」

デュオ「俺と・・・俺と戦え・・・!!」

ゼロ「（な!?!）」

アリサ「え・・・!?!」

ゼロ「デュオ!何を考えている!!」

アリサ「そんな・・・」

デュオ「この仕事はそれほどの覚悟が必要だ・・・さあ・・・!来
い・・・!」

アリサ「う・・・」

デュオ「来ないなら・・・俺から行くぞ!」

リベリオンを構え、斬りかかる

アリサ「やめてよ!」

回避しきれずに足に数発食らう

アリサ「これで終わり・・・！」

ロケットランチャーの引き金に指をかけ引き金を引こうとする

しかし

引けなかった

デュオ「・・・・・・・・・・。」

アリサ「もう駄目・・・・・・・・撃てないよ・・・・・・・・」

デュオ「・・・・。」

アリサはついに涙をこぼした・・・・

デュオ「・・・・・・・・それでいい・・・・・・・・それで・・・・・・・・いいんだ・・・・・・・・。」

アリサ「え？」

デュオ「お前はそのままでもいい。俺のように心を殺さなくていいんだ。」

アリサ「うつ・・・・・・・・うつうつ・・・・・・・・」

デュオ「悪かったな・・・・・・・・無理なこと言って・・・・・・・・」

デュオはアリサを再び抱きしめた

デュオ「覚悟は見せてもらったぞ・・・」

アリサ「足・・・だ、大丈夫なの？」

デュオ「ああ、もう治った。」

アリサ「嘘・・・無理しないでよ・・・」

デュオ「いや、本気で治ってるんだが。」

デュオはジーンパンを破って撃たれた部分をみせた

もう傷はなく何も無かったかのようにだった

アリサ「な…何で！？確かに当たったし血が出てたし…」

デュオ「俺の体が普通じゃないだけだ。気にするな。」

アリサ「それは気にするから！」

デュオ「？そうなのか？まあどうでも良いが……そんな事よりも、」

続
く
っ
！

第21話

次の日

と言うか朝

ってかもう昼

スバル「ん…」

スバル「早く起きてー！／／／／／（汗）」

ミソラ「ん……？」

スバル「……。」

ミソラ「な……なななななんで私ス、スバルに抱きついてたのお！？」

スバル「ミソラが寝ぼけて抱きついてたんでしょうがっ！」

ミソラ「う……ごめん」

本日は平和だったとき

で？物凄いややこしい話になってきた悪魔狩人達は…？

アクセル「で？これからどうするよ？せっかく4人も悪魔狩人が居るんだから色々と出来そうだが？」

デュオ「まあとりあえずこれまで出した情報を整理するぞ」

- ・悪魔を狩るようになったのは全員ほぼ同時期
- ・少なくとも全員5回は上級悪魔と戦っている
- ・天使と戦ったのはデュオとアクセルのみ

・デュオは魔界の覇王と天界の大天使5体を倒し、天界の門を一度閉じた

・アクセルはシオンと協力して魔帝を倒した。

ちなみに覇王＞魔帝

・強さは

デュオⅡアクセル＞シオンⅡアリサ

と言う感じ

・武装

デュオ

魔剣リベリオン

ゼロ装備セット＋自改造武器

（ゼットセイバー、バスターショット・ルーチェ&オンブラ、トリプルロッド、シールドブーメラン、チェーンロッド、リコイルロッド

ド、ゼロナツクル、チェーンショット)

アクセル

魔剣・斬魔刀

対悪魔用ショットガン
ブラックローズ

シオン

魔銃・ブラスト(意味・風)
(アサルトライフル)

対悪魔用剣・ヴァン(意味・風)

アリサ

魔銃・チュベローズ(意味・月下美人)
(ロケットランチャー)

魔銃・ガーベラ(意味・菊)
(サブマシンガン)

魔銃・アイリス(意味・あやめ)
(ハンドガン)

対悪魔刀・桜

アクセル「まあざっとこんなもんか…」

デュオ「他に言っていないことは？」

シオン「一つあるわ…」

デュオ「なんだ？」

シオン「アクセルには昔言っただけど……………」

デュオ「言い辛いなら言わなくても構わない。」

シオン「いや、いいの…今いっておいた方が良さだろうから……………
私は…………魔帝によって作り出された風を操る悪魔なの…」

デュオ「…それだけか？」

シオン「まあ…そうだけと…………驚かないの…？」

デュオ「ハア：アリサ、ハンドガン貸してくれ…」

アリサ「はい。」

デュオ「見てな。」

ハンドガンで自分のこめかみを撃ち抜いた。

しかし何事もなかったのごとくしゃべりだす。

デュオ「……この通りだ：俺もアクセルも普通の人間じゃない。」

シオン「貴方達…一体なんなの…？」

デュオ「そうだな…俺達は死神の血を継ぐ半分人間半分死神と言ったところか。」

アリサ「死神？」

アクセル「あんたは知らなくて当然だ。」

デュオ「と言うか俺もはつきりわからん。分かってるのは、親父が死神で天使と悪魔と戦ったと言うこととこのリベリオンと斬魔刀が親父の剣だったという事だけだ……後は何も知らん。」

アクセル「と言うかそれ以外の情報が存在しないんだがな…」この世界”には…」

とまあ…ややこしい話をしてたとき

続
け

第22話

暁「えーと…まず…この前のよく分からん奴らの分析結果だけだな。」

全員の表情が陰しくなる。

暁「あれは物質と電波変換した電波体だったみたいだ。」

スバル「物質？」

暁「そうだ。例えば砂とか石とか木とか。とにかく色々だ。」

ミソラ「そういえば倒した時に砂が飛び散ったような…」

暁「それは多分砂と電波変換してたんだろう……粉々になった岩って可能性もあるけど…」

ツカサ「他には、何か無いんですか？」

暁「奴らは恐らく何とでも電波変換はできると思われるが…その代償か電波変換自体が不安定だから攻撃で電波変換が直ぐ解除されるらしい。」

スバル「なるほど…だからハイキック一発で倒せたのか。」

暁「多分な……ってかお前よくあんな得体の知れない奴らにハイキック食らわそうと思ったな…」

スバル「それもそうですね…何も考えてませんでした…」

暁「お前な…」

ミソラ「あの…」

暁「なんだ？」

ミソラ「電波変換を解除させた後、していた電波体はどうなってるんですか？」

暁「分からん。調べようが無いからな。一体捕まえて調べるか事情

を知ってるヤツに聞けば分かるだろうけどな。」

で、その事情を知る奴らは…

デュオ「一つ考えなければならぬ事がある。」

アクセル「アイツ等に俺達の存在を示すかどうか…だな？」

デュオ「そうだ。で、全員の意見を聞きたい。」

アクセル「俺はどちらでも良いぜ？やることは変わらないからな。」

シオン「彼らの実力にもよるわね。ある程度なら、一部の情報を隠して協力すればいいと思うわ。」

アリサ「私は…協力したほうが良いと思うな…」

デュオ「決まりだな…次に悪魔が現れたら堂々と現れて戦う。それで良いな？」

アリサ「うん。」

シオン「ええ。」

アクセル「ああ。」

アクセル「ってか何で兄貴がリーダーみたいになってんだ？」

デュオ「知るか。」

アクセル「なら誰がリーダーやるか決めとくか？」
デュオ「なら誰がやる？」

「」「……………」

デュオ「おい待て…その”めんどくさいからよろしく”みたいな視線は何だ？」

アクセル「何って…なあ？」

シオン「ねえ…」

アリサ「うん…」

デュオ「最初から俺にやらせるつもりだったろ…」

アクセル「よく考えたらこのメンツの強さはどれくらいなのかねえ？」

デュオ「さあな。」

アリサ「じゃあ上級悪魔が出て来た時に全員でどれくらいで倒せるかを計ってみれば？」

シオン「それいいわね！」

デュオ「なんかお前ら楽しんでないか？………！！！」

アクセル「どうやら、お客さんのようだな。」

シオン「んじゃあ…さっきの話をすぐに実行できそうね。」

アリサ「じゃあ行こっか。」

デュオ「じゃあアイツ等に悪魔の出現場所の座標を送っておく。」

アクセル「OK！Let's go！！！」

スバル「ん？メール？」

メール

下記座標へ今すぐ行け

X 2 2 5 4 8 5 4 5 4 5 , 8 7 4 5

Y 4 5 4 7 8 5 4 7 5 8 , 5 8 9 6

Z 5 4 5 1 4 5 2 5 2 5 , 6 0 4 1

D u o . R a y

スバル「細かつ!! しかも意味が分からないっ!」

暁「……取りあえずパソコンに打ち込んでみるか……」

暁「なかなか出ないな…」

スバル「細かすぎて逆に出ないんじゃないんですか？」

暁「うーん……あ、出た。」

スバル「何処ですか!？」

暁「近いぞ!……ってかすぐ近くだ!電波変換すれば10分以内には行ける!行くぞ!」

「「「「了解!」」」」

続ける

第22話（後書き）

L e t ' s r o c k ! !

アクセル「H e y ! なんかもめちゃくちゃ細かいな！何だあの座標！？」

適当に数字並べただけ。

アクセル「そろそろ話が面白くなってきたそうだな！！」

当たり前だ！つーかそろそろやばくしていかなきゃ終わらねえ！

アクセル「H a — H a — H a — ! 最高だ！」

L e t ' s s t a r t ! t h e m o s t c r a z y p a r t y ! !
（イかれたパーティの始まりだ！）

L e t ' s r o c k ! ! （派手に行くぜ！！）

ポチッ↑ジュークボックスのボタンを押した音

…シーン……………

ポチッ、ポチッ、ポチッ、

…シーン……………

ポチッ、ポチッ、ポチッ、ポチッ、ポチッ、ポチッ、ポチッ…

…シーン……………

アクセル「オイ…このジュークボックスイかれて…」

ハアッ…!

バゴッ…!

アクセル「ちょ…おま…叩けば直る訳では…」



アクセル「直った——！？ってか凹んでるう——！？」

BGMは

Devils Never Cry

だ！

See you!

第23話（前書き）

あー…ちよいと遅れたなあ

第23話

スバル「この前のよく分からない奴ら！」

ミソラ「行くよスバル！！ショックノート！」

スバル「バトルカード、ソードファイター！」

高速で斬りつける。

再びスバル達と悪魔の戦いが始まった。

アリサ「そろそろ行く？」

デュオ「ああ、作戦はさっきの通りで頼む。」

シオン「分かったわ。」

アクセル「じゃあ行くか！」

デュオ「Let's rock!!（派手に行くぞ!!）」

崖からデュオとアクセルは飛び降りた。

無論、電波変換はしている

アクセル「今回は最初からクライマックスで行くぞ!! judge
ment slash!! 10cut!!」

デュオ「strike!! stinger!! drive!!」

超高速の突撃突きからの超神速連続突きへ発展させさらにその連続
突きを射出する。

デュオ「break down!（砕け散れ!）」

まず最初のstrikeで50体は悪魔が消し飛ぶ

stinger driveで250体は消え去る。

所要時間10秒足らずで300体の悪魔が消え去る

デユオ「斬鋭牙! drive! 斬鋭牙! drive! 斬鋭牙! drive!
ive! 斬鋭牙! drive! 斬鋭牙! drive! 斬鋭牙! drive!

リベリオンとゼットセイバーの両方からそれぞれ斬撃を飛ばしまくる。

これによりさらに多数の悪魔が切り裂かれる

「Illusion blade storm!!」
（幻影
アクセル
刀・嵐!）

高速回転した大量の幻影刀がアクセルの周囲を高速回転する

「GO!!!」

ザ シ ユ ザ シ ユ ザ シ ユ ザ シ ユ ザ シ ユ
ザ シ ユ ザ シ ユ ザ シ ユ ザ シ ユ ザ シ ユ
ザ シ ユ ザ シ ユ ザ シ ユ ザ シ ユ ザ シ ユ
ザ シ ユ ザ シ ユ ザ シ ユ ザ シ ユ ザ シ ユ

アサルトライフルにスコープを取り付けて狙い撃つ。

スバル「やっぱり数が多すぎる！」

ツカサ「残念ながら敵はまだ増えてるよ…！」

ヒカル「いや！急に減りだしたぞ！かなり速い速度だ！」

ミソラ「どうということ？」

ジャック「まさか他に誰か居たりするのか！？」

ヒカル「さあな。でも、戦ってりゃ分かるだろ…！」

バゴツ！

デュオ「…そろそろ派手に決めるぞ!!」

アクセル「All right!! 夢幻一閃・覇!!」

次元と空間を切り裂き、斬撃を一カ所に集中させる

派手にぶつかり合った斬撃は圧縮され、その後、爆発し、一気に斬撃を放出する。

デュオ「star light move・sowd master、double style shift change!!」

二つのstyleを同時発動する

そして

デュオ「royal straight flash!」

超神速移動状態で剣を振り、一振りで悪魔を5〜6体程切り裂きな

がら縦横無尽に動き廻る。

アリサ「もう！あんなに動き回ったら下手に撃てないじゃない！」
シオン「アクセルも、いくら派手にしろって言われたからって！あれじゃあ敵味方関係なく切り裂いちゃうじゃない！」

アリサ「でも撃たれても大丈夫でしょ、あの二人なら。」

シオン「それもそうね。もしかしたらよけてくれるかもしれないし。」

ガチャッ

昨日は撃つのをためらったが、撃たれても平気だと分かったせいか、スコープを覗き、巻き込んでレーザーをぶっ放そうとする。

シオンもブラストの弾速を加速させる調整をして、ねらいを付ける

「「狙い撃つぜ！」」

と

どっかのスナイパーのガ○ダ○マ○ス○ー（兄）の台詞を言いながらトリガーを引く。

デュオ「!！」

デュオは華麗に回転ジャンプでレーザーを回避

アクセル「ん?…Hoooo!!」

D a d a d a d a d a d a d a d a d a d a d a
d a d a d a d a d a d a d a d a d a d a d a
d a d a d a d a d a d a d a d a d a d a d a

アクセル「ぐげええええ!!！」

ブラストの弾直撃

シオン「あ…。」

アリサ「……当たっちゃったね…」

シオン「………」私は何も見なかった」

アリサ「いやいや…現実は見ようよ……」

シオン「…あれはわざと当たった…。」

D a d a d a d a d a d a d a d a d a d a
d a d a d a d a d a d a d a d a d a d a ! !

愚痴りながらブラストを連射する

アリサ「（アクセル君ってもしかしてMなのかな…？）」

シオン「いや、違うと思うよ……多分……」

アリサ「いや、多分って……」

続いてく

第23話（後書き）

Let's rock!!

ハッハッハッハッハッ!

ついにネタ切れだあ!

デュオ「そんな状態で大丈夫か?」

多分大丈夫だ、きっと問題ない。

アクセル「テストは大丈夫なのか?」

WAKARANよ、ぶっちゃけ微妙

アクセル「もしやヴァかったら:」

デュオ「O☆HA☆NA☆SHI☆…的な状況に追い込む:」

(。□。;)

テストは大丈夫だが：

何故貴様らがO☆H A☆N A☆S H I☆を知っている：

デュオ「お前がY o u T u b eで魔法少女リリカルなのはを見てたのはしってるからな。」

アクセル「ハーツハツハツハツハツ！」

……O☆S H I☆O☆K I☆D A☆

飛天御剣流奥義！天翔龍閃！！

「「グボアアアアア！」」

では

s e e
y o u !

ヒカル「なあ、ジャック————」

ジャック「死にさせコラアアアア！！！！！」

ドオンドオンドオンドオンドオンドオンドオンドオンドオンドオン……！！

ヒカル「スバル以上にイライラしているっ！？」

ツカサ「ミソラちゃんスバル君が————————」

ミソラ「あああああああああ！！多すぎだよオオ！！」

ドゴオン！！

バゴオン！！

ズガアン！！

ツカサ「って一番イライラしている！？」

ゴンタ「曉さんもイライラし始めてたぞ……」

ツカサ「ゴンタ君はイライラしないの？」

ゴンタ「いや、適当に暴れるだけでどんどん消えてくからむしろストレス発散になるぜ!!」

ツカサ「そ、そう…それはよかったね…」

以上 ツカサ君の苦悩?でした(笑)

まあなんやかんやで悪魔は全滅した

スバル「やっと終わった…」

デュオ「残念ながらまだ終わってはいない。」

スバル「デュオ…さん…？何で此処に…」

デュオ「悪魔を狩るのが俺達の仕事だからだ。」

暁「…詳しく話を聞かせてもらえないか？」

デュオ「分かった。だがあれを潰してからだ。」

指を指した方向には魔界門があった。

暁「なんだアレは…」

アクセル「魔界門。魔界とこの世界を結ぶ門さ。」

暁「君は…」

デュオ「俺の弟だ。」

全「「「「「…あんまり似てない。」「」「」「」

アクセル「……よく言われる…」

デュオ「そういうことd」「デュオ！」「来たか…」

アリサ「ふう……結構急な坂だったから時間がかかった。」

シオン「いや、あれは坂じゃなくて崖でしょ！ ほぼ90°。だったよ！？」

とか言ってる間に

$\vdash \dots$

デュオ「マズい……全員逃げろ!!」

「アクセル」「グダグダ言ってる暇はねえ!! すぐにここから離れろ!!」

デュオ「アリサ！ シオン！ アクセル！ そいつ等を頼む！！」

アリサ「分かった！」

シオン「任せて！すいません、どこかある程度安全な場所は有りますか！？」

暁「WAXAぐらいしかないな…」

アリサ「そこで良いから早く！」

アクセル「死にたくなかったら急げ！」

デュオ「チツ…俺のミスだ…」

魔界門から一体の悪魔が現れた。

その悪魔は

漆黒のマントと鎧に身を包み

灰色の片刃の大剣を手に持った

騎士だった

デュオ「やはり貴様か……」

暗黒騎士……

N
e
r
o
・
A
n
g
e
r
o
…
!
(ネロ・アンジェロ…!)

続
く
…

第24話（後書き）

L e t ' s r o c k ! !

まさかのネロ・アンジェロの登場

アクセル「モロパクリだな。」

だがな、こいつの登場は制作初期から決定していたのさ。

デビルメイクライ1で見てからピキーン！ときたからな

アクセル「中身は？」

ネタバレだバカタレ

アクセル「本家ネロ・アンジェロの技もパクると？」

当たり前だ

アクセル「そもそもネロ・アンジェロって何語で日本語でなんなんだ？」

ネロ　　がイタリア語で黒だったはず…

アンジェロは…多分これもイタリア語だろ…意味は天使と言う意味だが

アクセル「つまり——黒い天使——？」

そうだな

今回はこの辺で

see you!

第25話 暗黒騎士（前書き）

暗黒騎士登場

第25話 暗黒騎士

side Duo

まさか奴が来るとはな…

ネロアンジェロ（以下ネ） 「また貴様と戦う事になろうとはな。」

デュオ 「それはこっちのセリフだ。」

ネ 「あの中からよく生き延びたものだ。」

チャキツ

奴は剣を構えた

デュオ 「お互い様だ。」

チャキツ

ブンッ

そして俺もリベリオンとゼットセイバーの刃を発生させ、構える

ネ 「もはや何も言うまい。」

デュオ「俺と貴様は戦うのみ。」

ネ「いざ！」

バゴオオオン！！

奴は突っ込んできた

奴の居た場所にはクレーターが出来ている

ネ「ぬうん！」

ガキイン！

デュオ「ハアッ！」

ガァン！

フッ

俺はゼットセイバーをしまい　リベリオンを両手で構える。

ネ「…その緑色の剣はいらぬのか？」

デュオ「悪いが貴様の剣を片手で受け止めは出来んからな。」

ネ「ならば」

再び突っ込んできた

ギイン！！！！

ゴウツ！！

大剣を受け止める

周囲に衝撃波が発生する

デュオ「うおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！」

ネ「おおおおおおおおおお！！！！！！！！！！」

ガァン！ガキンガキンガキンガキヲガキンガキンガキンガキ
ンガキンガキンガキンガキンガキンガキンガキンガキンガキ
ンガキンガキンガキンガキンガキンガキンガキンガキンガキ
ンガキンガキンガキンガキンガキンガキンガキンガキンガキ
ンガキンガキンガキンガキンガキンガキンガキンガキンガキ
ンガキンガキンガキンガキンガキンガキンガキンガキンガキ
ンガキンガキンガキンガキンガキンガキンガキンガキンガキ
ンガキンガキンガキンガキンガキンガキンガキンガキンガキ
ンガキンガキンガキンガキンガキンガキンガキンガキンガキ
ンガキンガキンガキンガキンガキンガキンガキンガキンガキ

[illegible]

お互いの剣がぶつかり合う

俺が斬れば奴は防ぎ、カウンターを狙うが俺はその隙を与えずに次の攻撃を繰り出し

奴から斬りかかれば俺はその太刀筋を捌き、

その勢いで斬りかかるが高速で戻ってくる剣により防がれる。

お互いの一撃一撃が必殺級の威力を持ち、それがぶつかり合う

衝撃は並大抵では無い。

現にぶつかり合うたびに空間が振動し、周囲は衝撃波で吹き飛び、岩肌は削れ、近くに落ちていた巨大な岩が消し飛んで、でかいクレターがいくつも出来ている。

お互いに捌ききれなかったその必殺級の攻撃を食らいながらもまだ戦い続ける

デュオ「stinger!!」

俺は超神速の連続突きを奴に食らわせる

ネ「ヌウツ…」

さすがにこの突きは奴も捌ききれないらしい

ネ「ヌウン!!」

ゴウツ!!

ヤツが気合いを入れたかと思うと俺は吹き飛ばされた

俺は体を打ちつけた。

今で骨の一本くらいは逝ったかもしれない

だがそんな事は関係ない

ネ「そろそろ力を出させてもらうぞ。」

デュオ「ならばこちらもだ。」

ネ「フッ、ハアッ!!」

ゴウッ!

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……

奴は自分の剣を地面に突き刺した

ネ「ヌウン! うおおおおおおお!!!!」

ヤツの鎧から無駄が消え去り、剣が細長い長剣へと姿を変え、奴から力が溢れ出る

デュオ「とっておきを見せてやる……Angel trigger…
！（エンジェルトリガー…！）」

俺は

天使の引き金を引き

天使へとその姿を変えた

背中には四枚の純白の翼

左手には蒼い盾を装備し、

禍々しい程に黒光りする巨大な二連装のライフル、ツインバスター
ライフルを持ち

右手にはリベリオンが変化した片刃の長剣を握り

頭部は白に蒼と黄色のパーツのような装飾をつけ、

両肩は蒼、白、黄色、翠の装飾の大型のアーマーのような物を装備し

体の色は白と蒼を基調にしている

どちらかというと天使と言うより墮天使と言った方が似合うような
天使の姿だ

ネ「それが貴様のおきか。」

デュオ「その通りだ。」

ネ「ならば見せてもらおう！そのとおきの力とやらを！」

デュオ「第二ラウンドの開始だ！」

ドゴォン！！

ネ「どうした！とっておきはその程度か！」

ネ「ハアッ！」

思い切り蹴り飛ばされた

口から血を吐く

もしかしたら内臓に損失が有るかもしれないだが戦いは止まらない

俺は蹴り飛ばされながらもツインバスターライフルを発射する。

物凄いエネルギーの奔流がネロ・アンジェロを撃ち抜こうとする

が

ネ「ぬおおおおおおおおお！！！！！！」

奴が左腕を引くと、黒い炎のようなものが掌に現れる

ネ「ダークブラスト!!」

その炎のようなものを投げつけると巨大なレーザーになり、ツインバスターライフルのエネルギーを相殺させた。

ぶつかった事で爆発が発生し、周りが見えなくなっている

s i d e D u o — — o u t

s i d e — — —

ネロアンジェロは剣を構え、その場から動けなくなっていた

ネ「（奴はどこからだ…どこから来る…）」

デュオ「…」

上空5000m

デュオ「…break laser…charge…死ね…黒天
使…！」

ツインバスターライフルにエネルギーをひたすら溜めている

ネ「マズい…！！上か…！」

剣を掲げる

ネ「ダークネスフィールド！」

黒い結界で身を守る

ネ「さあ来い…」

デュオ「…Die！」

カチッ

引き金を引くと

今までの何倍ものエネルギーのレーザーが発射された

ネ「ぬうつ…！予想以上の威力だ…！」

デュオ「消え去れ…！暗黒騎士…いや…堕天使…！」

ついにやつのバリアをデュオのツインバスターライフルのレーザーが貫く

レーザーはネロ・アンジェロを直撃する

ネ「グアアアアアアアアあ…！！！」

ネロアンジェロの鎧がボロボロになっている

ネ「グッ…しかたあるまい…一度退くか…」

青黒い炎に包まれ消え去る

しかし炎は残ったままだった

デュオ「…逃がしたか…」

ツインバスターライフルを下げる

その瞬間

残ったままだった炎からブレイクレーザーが跳ね返されたのか、飛んできた

デュオ「……」

デュオは避けようとはしない

何故ならば

デュオ「Aegis。
(イージス。)」

彼にとっては

避ける必要が無いからだ

デュオ「style shift change knight guard。Aegis、royal sealed。」

左腕の盾を前面に出し、そこから青白いフィールドが出てくる

ワールドブレイカーがロイヤルシールドにぶつかった瞬間にワールドブレイカーそのものが消え去った。

コレこそがエンジェルトリガーにより天使になったデュオと左腕の盾、”イージスの盾”の力である。

イージスの盾はすべての攻撃を無効化すると言われる天界最強の盾である

さらにデュオのstyleのひとつ knight sealed は自身の防御力を徹底的に底上げし、さらに受けたダメージをそのまま溜め込み、跳ね返す事も出来るstyle

エンジェルトリガーの天使状態は防御力と遠距離攻撃とスピードの能力が跳ね上がる

その状態のデュオにあらゆる攻撃はほぼ効かないのである

デュオ「ハア…ハア…ハア…ハア…ハア…ハア…グハアッ！」
エンジェルトリガーと電波変換が解除されてしまった

さらに血を吐いている

デュオ「（やはりアイツの攻撃で出来た傷は高速回復が出来んな…
…）」

吐いた血を見ると赤黒かった

デュオ「（不味いな…これは…内臓が逝ってる…）」

デュオはそのまま気を失った

続く…

第25話 暗黒騎士（後書き）

Let's rock!!

ハイ今回は謎の暗黒騎士、ネロ・アンジェロについて

通常の姿は漆黒の鎧姿

兜は大きな角のような装飾に、顔の部分は鬼のような仮面のように
なっている

鎧パージ時は

マントとゴツい肩と脚と腰のアーマーが外れ、無駄のないデザイン
へ変わる

こいつの元ネタはデビルメイクライ1ボスネロ・アンジェロ

最高難易度 D a n t e M u s t D i e での強さはチート級

なにせ D M D は制作スタッフがクリア出来なかったらしいです

そんなチート騎士をさらにチート能力を与え、設定をいじり、この小説に登場させました

本家 D M C 1 のネロ・アンジェロの正体は主人公ダンテの兄、ヴァージルでしたが…さて…こちらの暗黒騎士の正体は一体誰なのか…
そもそも暗黒騎士は何者なのか…?

いずれ、わかります……

では今回はこれで

s e e y o u !

第26話（前書き）

台風こねえかな

第26話

side Duo

デュオ「……ハッ!」

目を覚ますと、見慣れない天井

薬品の匂い

一瞬で病院だと理解した。

左腕には点滴が刺さっている。

さらに

デュオ「この三人は何してんだか…」

アリサ、アクセル、シオンの三人がそばで寝ているのである

アクセル「ん…？ おお…起きたか…」

デュオ「どれくらいたった？」

アクセル「あ？」

デュオ「俺が気を失ってからどれくらいたった？」

アクセル「ああ…3日と…四時間ぐらいだな」

デュオ「今何時だ？」

アクセル「午前四時だ。」

デュオ「此処は何処だ？」

アクセル「WAXAの病室さ。昨日までは兄貴は集中治療室だった
が。」

デュオ「そうか…」

アクセル「何で傷がすぐに回復しなかったんだ？ってか何と戦ったんだ？と言うかどうやったら岩山がムチャクチャになるんだ？」

デュオ「……そう言えば全部話したのか？」

アクセル「ん？ああ、全部話したぜ。」

デュオ「そうか……ならいい………あゝ……！」

アクセル「どうした？」

デュオ「……作ってたゼリーにゼラチン入れんの忘れてた……」

アクセル「何じゃそりゃ……」

デュオ「ああああああ………最悪だ……」

アリサ「ああ……それなら私が入れておいたよ、冷やしてあるしね。」

デュオ「本当か……！すまん。」

アクセル「起きたのか。」

シオン「私もね…」

デュオ「…なんだ…全員起きたのか…」

アクセル「傷は大丈夫なのか？」

デュオ「ああ、もう完治している。」

アクセル「そうか、じゃあ単刀直入にきくぞ…何と戦っていた…？」

デュオ「”暗黒騎士ネロ・アンジェロ”と言って心当たりは有るか？」

アクセル「いや、知らんな…」

アリサ「私も…」

シオン「私…知ってる…！魔界最強の騎士にして、魔界の覇王、アルゴサクス・ディスペアーの右腕と呼ばれた悪魔…」

デュオ「そうだ…だが…アイツの力はもう覇王を軽く越えていた…昔ならギリギリ勝てたからな。それとアイツは厳密には悪魔ではない。」

アクセル「どう言うことだ？」

デュオ「アイツは”堕天使”だ。」

「「「堕天使？」」」

デュオ「字の通り、堕ちた天使だ。」

アリス「つまり…悪魔じゃない？」

デュオ「わからん。」

アクセル「いや、わからんって…」

デュオ「アイツが自分で言ってたんだから仕方ないだろ。それに敵に直接聞くわけにもいかんしな。」

シオン「え、なに？もしかして自分でも分かってないの？アイツ。」

デュオ「多分な。」

まあいろいろあつて

午前9時^{だいたい}

全員集合

デュオ「話はコイツ等からだいたい聴いてるだろうから俺からは補足だけにさせてもらおう。まず一つ、俺が閉じたのは魔界門ではなく天国門だ…」

アクセル「ん？なら何でこの前に天使が現れたんだ！？」

デュオ「……いや、閉じたって言う間違いだな…正確には向こうからは開かないようにしただけだ。こっちから呼び出すのは可能だ。」

スバル「あの…」

デュオ「何だ？」

スバル「向こうからは開かないようにしたと言ってましたけど…どうやったんですか？」

デュオ「そうだな…分かり易く言えば……夢を壊すが……神様と大天使を全員ぶっ殺したって事だ。」

「「「「「「「神様を殺した!?!」」」」」」」

デュオの規格外過ぎる発言に全員が焦る

デュオ「神はあまり強くはなかったな。魔界の覇王の方が100倍強かった。あと大天使と言ったが名前は神の名前だったな…名前は…何だったかな…たしか…
第一の大天使が…

天照

だったか？多分そんな感じた

第2が…

ポセイドン

とかいったと思う

第3が…

ゼウス

とかいってたような…

第4が…

素戔鳴尊
スサノオ

だと思うが…

第5が…

火産靈神
カグツチ

だったはずだが…

何せ弱すぎて覚えてないんでな。主神も大したことはなかった。はつきり言って見た目だけだな。……話がそれたな。二つ目だが…天使と悪魔の目的だな。少し長くなるが…天使も悪魔も遙か昔に戦争をしていた。そしてその戦場になったのがこの世界だ。その戦争が再び始まるうとしている…いや、”いた”、だな開戦は実質不可能だ。」

暁「何故だ？」

デュオ「さっきも言ったが、俺が神と大天使と魔界の覇王を倒して」

アクセル「俺とシオンで魔帝を倒したからな。」

デュオ「要はリーダー格を全て倒したからだ。」

暁「まで、話が分からなくなってきた…結局何なんだ？」

デュオ「三つ目。此処からが問題だ。……何者かが意図的に魔界門を開いて、何かをしようとしている。」

アクセル「で、俺たちはそいつ等を何としても止めなければならぬ。」

スバル「目的とか何か心当たりが有ることとかは無いんですか？」

デュオ「そうだな…俺にはないが親父なら何か知っていたかもしれないな…帰って親父のノートを見直してみる…何か手掛かりが有るかもしれない。」

暁「それは組織的なのか、それとも個人でやっているかは分からないのか？」

デュオ「おそらく組織的にだと思う。魔界門を開くとなるとかなりエネルギーが必要だからな。…まあそう言う訳で組織的な可能性

が高いから…協力を要請しに来たわけだ。」

スバル「もしかして派手に戦ってたのはそう言う事立ったんですか？」

デュオ「まあな。」

暁「わかった。協力はしよう。むしろこちらから協力を頼みたいくらいだ。そんなヤバイ話になっていたとは…」

デュオ「…感謝する………」

続けれる

第27話（前書き）

現在、感想制限を外していますので感想を書きたい方は自由にどうぞ

書いても書かなくてもいいです ハイ

第27話

帰る途中

スバル「まさか戦ってたのは悪魔だったとはね…」

ミソラ「いやいや…それよりも神様は死んでるって…夢が壊れたね…」

デュオ「残念ながら天使や神様は、はっきり言って悪魔より質が悪いぞ。何せ生きたまま殺されるからな。」

ミソラ「生きたまま殺される?」

アクセル「分かり易く言えば、肉体的は生きているが、意識が存在しない状態にされるのさ。いわゆる…植物状態に近い状態だな…」

スバル「近い状態って…何が違うんですか？」

デュオ「植物状態なら脳が死んでるがな、天使にやられると、脳は死なずに、体のどこにも何もない…つまり肉体的には何もないんだが、意識…いや…魂だけが奪い取られるのさ。まさに、覚めることのない永遠の眠りに尽かされるのさ。しかも魂は喰われてしまうので元には絶対に戻らない。まあ食われなければ元に戻せるがな。」

アクセル「悪魔だと、物理的に殺される分、まだマシだ。まだ死を認められるからな。それに、悪魔は見つけやすい。つまり未然に防げる可能性が非常に高い。天使は神出鬼没で、感知しにくいんだ。」

デュオ「だから鬱陶しい神様を殺したと言うわけだ。こうしておけば50000年ぐらいの間は呼び出さない限り向こうからこちらへは来られない。」

スバル「50000年で…長すぎやしませんか…」

デュオ「次の神が現れるのがそれくらいだからな。……多分。」

スバル「そこははっきりしたほうが良いのでは…」

デュオ「……………」

まあ皆さん帰宅された後

スバル「あゝ…その…ミソラ…？／／／／」

ミソラ「…なあにい？♪」

スバル「いい加減抱きつくのは止めていただけないでせうか？」

ミソラ「私の事嫌い？（上目使い＋涙目演技）」

スバル「いや…嫌いじゃ無いけど…その…ボクが精神的に…かなり…ヤバいんだけど…（しかも40分近く抱きつかれてるし！）」

ミソラ「仕方ないなア…」

そう言っで離れた……が…

ミソラ「その代わりに…一緒に…お風呂入ろ…／／／／／／／／／／」

スバル「…（…待て…ミソラは一体何を言っている？…ボクは何か変な夢でも見てるのかな？…いやそれはない、なぜなら現在午後8時で寝るには速すぎる上に寝たならミソラも一緒に寝ているはずだ。だったらやはりこれは現実なのか？いやそれはない。いくらミソラがボクと付き合ってるからって流石に男女が一緒に風呂に入るなんて非現実的な発言をするわけがない。いやでも彼女には何度も驚かされた。つまりやはりこれは現実？現実なのか？悪い冗談でしょ？いや、彼女の表情からやはり本気だ。これはどうすればいいんだあああああああ！）」

以上、思考終了まで約21.2秒

ミソラ「スバル…？」

スバル「うおあああ！…！…？…？」

ミソラ「うわっ！」

スバル「かかきくけききかきここかくきげこきぐこかかげかかごきごかごけげええええええ・・・・！」

あまりの痛さに奇声を上げながらぶつ倒れるスバル

ミソラ「ご、ごめん！ スバル！」

その後・・・二人は一緒に風呂に入ったとき。

続けたい

第27話（後書き）

crazy party!
Let's rock!

うオアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
あああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああ！！！！

デュオ「なにをさけんどるんだこいつは……」

アクセル「なんかスバルとミソラのあの後のシーンを書こうとして
恥ずかしさとかで挫折して発狂したらしいぜ。」

デュオ「なんだただの発狂か。」

「アクセル それですんだらいいな。」

ほあああああああああああああああああああああ！

「うおっ！ 刀振り回してやがる！」

デュオ「……。」

ポイツ

第28話

デュオ「……………」

アクセル「……………」

アリサ「……………」

シオン「……………」

アクセル「兄貴…本当は何処の何奴が門を開いて悪魔を呼び出しているのか…見当は付いてるんだろ？」

デュオ「ああ。だが確信が持てない。」

シオン「確信が無くても良いから、一応話してみてよ。」

アリサ「うん、もしかしたら心当たりが有るかもしれないからね。」

デュオ「分かった。……恐らく”ダーク”と言う組織が犯人だと俺は思う。」

アリサ「えっ？それって、デュオとデュオのお父さんで潰したんじ

や…」

デュオ「そのはずだったんだが…大方、復活したんだろう…」

アクセル「その組織なら知ってるぜ、何度か依頼を邪魔されたからな。」

シオン「私も、たまたまアクセルと別々に仕事してたときに邪魔されて、標的の悪魔をさらっていったわ。」

アリサ「それなら私も、ヨーロッパで悪魔と戦ってたら、突然悪魔を誰かがさらっていった事があったわ。」

デュオ「やはり…（あの時のあの装置…W・R・B・Sは悪魔を实体化させるための…だったら親父が言っていた人対人ならざる物を引き起こすと言ったのも分かるな…）……思ったより話がややこしくなってきたな…まあ…奴らが復活したとはまだ決まったわけではない…とりあえず、しばらくは後手にまわらざるをえないな。」

アクセル「だな。」

しばらくして

デュオ（まず情報を集めるか……）

ピッ

R R R R R R R R R R …

??? 「はいはい…」

デュオ「久しぶりだな、レオン。」

レオン「デュオ！久しぶりだな！みんな会いたがってるぞ？そうだ、みんなに代わる「残念ながら厄介な仕事の話だ。」…そうか…？何を調べて欲しいんだ？」

デュオ「“ダーク”と言う組織についてだ。」

レオン「お前もアイツ等を…」

デュオ「その様子だと、すでに関わった後のようだな。」

レオン「ああ、魔剣の反応の残留を感知してきやがった。」

デュオ「Bingo…！やはりか…！」

レオン「連中…たしかお前とお前の親父さんで潰したはずだったよな…で…その時の総統がお前の祖父…今度は誰がリーダーなのか…」

デュオ「そんな事よりむしろW・R・B・S・が問題だ…あれを使われれば…悪魔による被害が爆発的に増大する…」

レオン「…物質を直接電波化か…いや待て…悪魔は電波体なんだろう？何でそれを使われると被害が増えるんだ？」

デュオ「アインはああ言っていたが…恐らく当時から逆も可能だったのだろう…思い返してみれば、5つスイッチが付いていた…」

レオン「なるほどねえ…ま、一応こっちが入手した情報を教えとくぜ。」

デュオ「ああ、頼む。」

レオン「組織名、”ダーク”…まあ…これは今分かったんだがな…

次、奴らは悪魔を捕らえている。何に使うかは分からない。」

デュオ「それは知っている。」

レオン「そうかい。だったら最新の情報だ。奴らが集めている”もう一つの物”…”魔界物質”だ。」

デュオ「”魔界物質”か…」

レオン「何に使うかは分からんがな。まあロクな使い方はしないだろうな。」

デュオ「分かった…助かる。」

レオン「それと、もう一つ。未確認だが情報がある。」

デュオ「…?なんだ?」

レオン「残り2つの魔剣の在処だ。」

デュオ「…本当か!」

レオン「未確認だがな…古い書物を教会の地下で見つけてな、それを解読したらな……”斬魔ノ魔剣ハ東ニ、滅殺ノ魔剣ハ西ニ、封印ノ魔剣ハ北ノ最果テノ地ニ、鍵ノ魔剣ハ南ノ最果テノ地ニアリ””つー記述が有ったんだが…恐らく斬魔の魔剣ってのはお前の弟の持ってる斬魔刀の事だろう、で、滅殺の魔剣ってのはお前のリベリオンの事を指すと思う…」

デュオ「北の最果ての地に南の最果ての地…恐らくそれぞれ北極と南極をさす…のか…？」

レオン「俺もそう思ったんだが…あいにく調べには行けないんでな…長期間此処を離れるわけにはいかん。」

デュオ「分かった、それだけ情報があれば十分だ。後は俺が調べる。」

レオン「すまん、情報が少なくて。」

デュオ「いや、十分過ぎるぐらいだ。助かる。」

レオン「そう言ってくれと有り難い。」

デュオ「とりあえず、北極と南極に行ってみる。」

レオン「だったら、さっきの文の続きを聞いていってくれ。」

デュオ「分かった。」

レオン「読むぞ。」封印ノ魔剣ト鍵ノ魔剣ハ危険ナ物、魔界ト天界ノ扉ヲ閉ジ、マタ開ク剣。故ニ特殊ナ封印ヲ施ス。サラニ守護スル物ヲ置ク。ソシテ神殿ノ最奥部ニ置ク」と書いてある。」

デュオ「思ったより面倒な事になりそうだ…」

レオン「また、最新の情報が入り次第、連絡する。じゃあな。」

デュオ「ああ、じゃあ。」

プツン

デュオ「さて、どっちから行くか…」

続
け
ま
す

第29話（前書き）

あとがきを読んでもらえると有り難いです

第29話

午前8時

アリサ「デュオ、どこか出かけるの？」

デュオ「ん？ああ、ちょっと北極へ行ってくる。」

アリサ「そう、なるべく早く帰って来てね。」

デュオ「ああ、じゃあ行ってくる。」

アリサ「行ってるっしょーい。………ん？…北極………！？って、ちよつとまったあああああああああー！！」

デュオ「ん？どうした？」

アリサ「今北極って言ったよね！？」

デュオ「ああ。」

アリサ「ああ。じゃないよ！ノリ軽すぎ！！近所のスーパーに行く

感覚みたいだったじゃない！」

デュオ「star light moveを使えば、三日以内には帰れる。」

アリサ「だいたい北極に何しに行くの？」

デュオ「ちよっと調査にな。ちなみにその後南極にも行く。」

アリサ「何の調査？」

デュオ「一応北極から南極へは一度帰ってくる。」

アリサ「だーかーらー！何の調査なの！？」

デュオ「魔剣。」

アリサ「…！そう言うこと…分かったわ、こっちの事は気にせずに、行ってきた。」

デュオ「ああ、よろしく頼む。」

アクセル「Hey! 待ちな! 一人で両方行くよりは、2つを2人で同時に行った方が速いぜ? 俺が南極に行くぜ。」

デュオ「…何をしに行くか分かってるのか?」

アクセル「ああ、”鍵”と”錠”を回収するんだろ?」

デュオ「聞いていたのか…」

アクセル「悪いな、聞こえちまったもんでな。」

デュオ「…まあいい…とりあえず言っておくが…場所は分かってないからな? 自分で探すしかない。」

アクセル「わーってる。」

シオン「こっちの方に現れた悪魔は私達2人とあの子達で何とかしておくわ。」

デュオ「頼む。じゃあ行ってくる。」

アクセル「じゃあ俺も行くか。」

「行ってらっしゃい。」

「行ってきます。」

続きます

第29話（後書き）

crazy party! Let's rock!!

えー…重要？な話があります

デュオ「何だ？」

アクセル「気になるぜ。」

えーと…この小説…

次回で…

合計100話になります！

デュオ「ずいぶん多いな。」

アクセル「だな。」

俺の無計画さにより、とんでもないことになった…

まあ！そんな事はさておき！

合計100話突破記念に何かやりたいのだが…現在アイデアが全く

ないんだ…

デュオ「バカだな。」

アクセル「アホだな。」

と言うわけで！！この小説を、あとがきを見ていただいている方に
！何かやってほしい事が有る方は、感想に書いていただけると有り
難いです！

よろしくお願いします。

一応8月1日まで募集予定です。

よろしくお願いします！

第30話 北と南の最果てで（前書き）

合計100話！！ヒヤッハー！

第30話 北と南の最果てで

— — — — — 北極 — — — — —
— — — — —
— — — — —

デュオ「さすがに、少し寒いな。」

ゼロ「……北極でノースリーブとレザーパンツとブーツに指ぬきグローブ、いつもの蒼いコートだけで”少し寒い”で済む奴が言っても説得力は全くないぞ……」

スパイダ「同感だ……」

デュオ「さっさと見つけて帰るか、ゼロ、電波変換だ。」

ゼロ「了解。」

デュオ「では行くか。」

mission start

デュオ「北極には陸がない……と言うことは……水中か。ハッ！」

バ
シ
ヤ
ー
ン
！
！

そのまま海底へ……

南極

アクセル「ヘクシュ!! ちょっと寒いな…」

ちなみにアクセルの服

毛のズボン

ブーツ

指ぬきグローブ

真紅のラバーコート

だけ

つまり

コートの下は何も着ていないのである

アクセル「電波変換っ…と…さて…さっさと行きますか…」

続く
…

—
—
m
i
s
s
i
o
n
s
t
a
r
t
—
—

第30話 北と南の最果てで（後書き）

Let's rock!!」

デュオ「オイ作者アアアアアアア！！！！！合計100話目の話
がこの仕上がりって言うことだオイイイイイイイイイイイイ！
！！」

うるせえエエエエエエエエエエエエエエエエ！！次の話に
つなげるにはこれしか無かったんじゃああああああああああ
ああああああああああああ！！

デュオ「せめて1000文字くらい書けやアアアアアアアアア！！」

うつせえエエエエエエエエエエエエエエ！！伏線でどうやって1
000文字書けてんだよオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオ！！

デュオ「とりあえずくたばれ！！drive！！」

飛天御剣流！九頭龍閃！！

ドゴン！！

デュオ「グハッ！」

この俺に勝とうなど……10000000年速い!!

では

see you!

第31話

デュオ「…（さすがに…北極の海は…電波変換していても…寒い
な…早く見つけねば…）」

海底を走りながら、サーチをする。

デュオ「（…もう北極点か…ん…?）」

北極点の海底辺りに、でかい穴が開いている

デュオ「（Bingo!）」

デュオは何のためらいも無く、その穴に飛び込んだ。

穴に入って数分…

デュオ「……」

巨大な岩盤に先が覆われていた

デュオ「（どうするかな・・・）」

ゼロ「リコイルロッドのチャージならば碎けると思うが…？」

デュオ「修理中だろ…サウザンドスラッシュも仕方なくトリプルロッドで無理やりやってるんだからな…」

ゼロ「ゼロナックルでも碎けると思うが。」

デュオ「やってみるか…」

構えをとり…

デュオ「はああああ…タアッ!!」

バゴオオオン!!!!

左手で岩盤を殴りつけると一瞬で粉々になった

デュオ「よし、先に進むぞ…」

海底洞窟さらに深く進んでいく。

デュオ「（…む…今光が見えたような…）
」

そのまま進むデュオ

デュオ「プハアッ！」

海底洞窟の出口にたどり着いて、水から上がる

そこには

白と黒の神殿のような建物が洞窟の中に建っていた

デュオ「此処が…封印ノ錠がある場所…」

↓

N
e
x
t

m
i
s
s
i
o
n
⋮

—
—
m
i
s
s
i
o
n

c
o
m
p
r
e
a
t
—
—

合計100話突破記念番外編 A part (前書き)

や…やっとできました…

A partはスバルとミソラのデート編です

ニヤニヤできるかわかりませぬが…頑張りましたので…

ではドウゾッ!!

合計100話突破記念番外編 A part

8月2日

ミソラの誕生日だ

スバル「ミ、ミソラ!!」

ミソラ「ん? どうしたの? スバル。」

スバル「デ、デートに、い、行かない?」

ミソラ「うん。いいよ。」

スバル「本当に!？」

ミソラ「でも、何で急に？」

スバル「…今日は何月何日？」

ミソラ「えーと…今日は8月2日だったはず…」

スバル「…何の日？」

ミソラ「それは私の誕生日…あ、もしかして！」

スバル「そうだよ、もしかして自分の誕生日を忘れかけてた？」

ミソラ「そ、そんな事ないよ!!（本当は毎日スバルとイチチャイチヤしてるのが楽しくて忘れかけてたなんて言えないよ——!!）」

ハープ「ミソラ…顔真っ赤よ…まあ貴女のことだから…」毎日イチヤイチヤしてるのが楽しくて忘れかけてた——!!”とか考えてるんでしょうけどね？」

ミソラ「ソ、ソシナコトナイヨ——。」

ハープ「何で片言になってるのよ？」

ミソラ「ナンデモナイヨー（凶星だからだよ!!）」

ハープ「……………」

スバル「……………」

ロック「おwwwすwwwすwwwもwwwもwwwろwww」

ミソラ「まさか…声に出た？」

スバル「……………（コクリ）」

ミソラ「はううう………………」

スバル「そ、それより早くデートに行こう!!」

ミソラ「う、うん／＼／＼ど、どこに行くの？」

スバル「遊園地だよ／＼／＼／＼／＼。」

ミソラ「うん…き、着替えてくるね!!」

スバル「うん…じゃあボクも…」

数分後……

スバル「こ、これでいいかな…?」

スバルの服は

蒼のTシャツ黒い上着にジーパン

だった

ミソラ「どれが良いかなあ…」

ミソラは迷っていた

で

まあなんやかんやで
服決まりましたと

その服は

白のミニスカートに、青と白のストライプのノースリーブ、そして
ピンクの上着だった。

いまさらながら自分の服を選ぶセンスの無さに絶望している

作者は普段モスグリーンのTシャツに黒い半ズボンに黒いベストか黒いTシャツにオリーブドライブの半ズボンに黒いベスト、夏はこの二つのローテーションを中学時代からしていて、服のことなどポケットが多いか少ないかしか考えた事がない。

閑話休題

2人はそのままデートへ……………

で

遊園地に着きました

スバル「じゃあ行こっか」

ミソラ「うん！」

—mission start—
え！？

スバル「まずはどうしようかな…？」

ミソラ「うゝん…あ！スバル！あれ乗ろう！！」

ミソラが指を指した先にあったのは

巨大ジェットコースター

Σ（。□。；）

スバル「……マジ…デカすぎでしょ…？」

ミソラ「さ、行こう！！」

スバル「え、本当に乗るの？」

ミソラ「当たり前でしょ！（物凄い笑顔）」

スバル「（うぐおあっ!!）わ、分かったよ……い、行くよ……」

[illegible]

と座席に座りながら、明らかな死亡フラグのセリフで自分を落ち着けようとするスバル

ミソラ「ちなみにこのジェットコースター、20分近くあるらしいよ♪」

[illegible]

ガコン

ジェットコースターが動き出した……

で

スバル「……………」

ミソラ「……♪」

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ……！！！！！！！！

C r y o u t n o w ! ! (泣き叫べ!!)

とどこからともなく聞こえてくるほど速い

スバル「……………」

スバルは氣を失っていたww

まあそれでなんとか解放された訳だが

スバル「あううう……」

スバルはぐったりして出てきた

ミソラ「だ、大丈夫？ スバル……」

スバル「大丈夫大丈夫……さて……つ……次はどこへ行こうか……？」

ミソラ「（ホントに大丈夫かなあ…）…あれがいいかな？」

次に指したのはでかいコーヒークップみたいなのに乗って回転してるアレである

ちなみに俺はアレの名称を知らない

ホント何なんだろうアレ

閑話休題

ミソラ「アハハハッ！！」

ミソラが物凄い勢いで回転させる

スバル「うおおおおおおあああああああ！！？？？」

回転が早すぎて凄まじいG（と言っても実際はそうでもなく0.2 Gくらい）がかかる

スバル「……………」

さらに激しい所に行ったのでスバルはぐったりしていた

ミソラ「だ、大丈夫？ じゃないよね…」

スバル「…少し…休憩させてくれると…あ……………ありがたい…かな…」

つー訳で園内部にある公園みたいな場所で休憩中

スバル「ふう…」

ミソラ「落ち着いた？」

スバル「うん、ごめんね…」

ミソラ「い、いや！私が無理矢理激しい所に連れてったりしたから…」

スバル「そ、そんな事ないよ！ボクが……」

以下一時間近く同じような会話がつついた……………

…バカップルめ…

クソツタレ…

ミソラ「あ、もうお昼だ……」

スバル「どこか食べにいこっか…」

ミソラ「…うんっ！」

そう言って、ミソラはスバルね腕に抱きついて、歩き始めた。

そして、スバルもまた、その行為に逆らわなかった

顔は凄まじく真っ赤だったが

バカップルめが……………クソツタレ……………

ドゴオオオオン!! ↑作者がRising Dragon—《昇竜拳》で机と椅子と壁と本棚を同時破壊した音

閑話休題

とりあえずファミレスみたいな所で昼食を食べる事にしてみた

スバル「じゃあボクはハンバーグで。」

ミソラ「じゃあ私はミートスパゲティに、カレーに、ラーメンに…
…以下省略……で!!!!」

スバル「…た…食べ過ぎじゃないかなあ…?」

ミソラ「そんなことないよお♪」

スバル「そ、そう…」

で、まあ頼んだ料理が来たのだが…

ミソラ「はい、スバル。」

スバルにカレーの乗ったスプーンを差し出しているミソラ

スバル「…え〜と…な…何…?」

ミソラ「あ〜ん…」

スバル「（仕方ないか…）アーン…／／／／」

ミソラ「美味しい?」

スバル「うん、まあ…」

ミソラ「じゃあスバルのもちよつと頂戴♪あ、もちろん同じようにしてね♪」

スバル「…んなっ!?!?／／／」

Σ(＊□。＊)

ミソラ「あゝん…」

スバル「うっ…(仕方ない…やるしかないんだ…!!) あゝん…／／／／」

パクッ

ミソラ「んゝ!おいしー!♪」

その後、スバルは終始、顔が真っ赤だった…

バカップルめが…クソツタレ…

シャキンシャキンシャキンシャキンシャキンシャキンシャキンシャ
キンシャキン！！ドゴオオオン！！↑作者が飛天御剣流九頭龍閃で
自室をぶっ飛ばした音

午後…

ミソラ「ゴーカートのレース大会かあ…」

スバル「優勝すれば何かいい物が貰える……」

ミソラ「出してみよう、スバル」

スバル「うん、ボクもそうしようと思ってたし。」

ミソラ「じゃあ早く受付に行こう。」

スバル「うん！」

で、レース開始前……

スバル「性能が違うのから選べって言われても……」

ミソラ「分かんないよね……」

周りを見てもみんな分からないようで、迷っている。

??? 「フフフ…君達…よく分からないなら、これにするといい…コイツはハチロクを元に作られている…ハチロクはドライバーを育てる車だ…それともこれか、これにするといい…それぞれGT-Rとインプレッサを元にされている、まあどちらもこのコースではクセが強いがな…」

そこには黒い髪にサングラスをかけた男がいた

髪が黒なのに所々赤いが気にしない

スバル 「あ、ありがとうございます…」

??? 「いやいや、走り屋は車の性能なんか詳しいからつついね…」

スバル 「走り屋って…貴方は一体…」

??? 「俺は…そうだな……とりあえず拓海と名乗っておくかな…」

ロック（ちょｗｗｗｗそれ頭○字Dだろｗｗｗｗ会話の内容的にもｗｗｗｗ）

拓海「では少年、頑張りたまえ。」

スバル「は、はい！ありがとうございました！」

そう言って拓海は去っていった

拓海？「ふいゝ…やれやれ…デートを見守るのもラクじゃねえな…」
そう言ってサングラスを外し、髪を水で洗うと、髪が紅くなっていた

つまり、拓海と名乗る男の正体はアクセルだったのだ

アクセル「ったく…兄貴もめんどくせえ事引き受けやがって…」

シオン「あら、いいじゃない別に、おかげで私達もデートに行けるんだしね!♪」

アクセル「へいへい…わかりましたよ…んじゃ行くか…」

スバル「よし…行くぞ…」

ミソラ「頑張ってねスバル!」

スバル「うん!」

なんかかんやで準決勝まで行った

まあミソラは途中で負けてしまったが

ちなみにスバルはG T－Rを元にした車に乗っている

とか言ってる間に

s t a r t ! ! ! !

コースはダウンヒルとヒルクライム複合コースだが、まあ緩やかだ

スバル「クソッ…どうしても下りで負けてしまう…!! 早く登りへ
…!」

G T－Rは重いからね。
仕方がない

とか言ってる間に登りへ

スバル「これで…!!！」

一気に加速し、他の車を抜き去った

で、そのままぶっちぎりでゴール!!

見事決勝へ!!

で、決勝戦

スバル「ま…まさか決勝まで行くとは…」

アクセル「よお少年!まさかお前が決勝戦の相手とはな!」

スバル「アクセルさん…まさか貴方が相手とは……」

シオン「頑張ってよーー！」

ミソラ「スバルーーー！！頑張れーーー！！」

アクセル「まあ、気楽に行こうや。」

スバル「はい！」

で、

—
—
—
—
s t a r t
—
—
—

ブオオオオオン！！

二人は同時発車！

ちなみにアクセルはS2000元にした車に乗っている

アクセル「うおおおお！！」

曲がり角ではドリフト！！

スバル「おおおお！！」

登りでは加速！！

「「曲がり切れええええええ！！！！」」

ギャギャギャギャギャギャギャ！！！！

アクセル「オラアアアアア！！！！」

ドガガガガガガガガガガガガガガガ！！！！！！

スバル「うおわああああああ！！？」

アクセル「なん…だと…！？複線…ドリフト…！？」

作者…ってそれちがうだろ！！

アクセル「だが！俺の最速理論に！！揺うるうぎいはアアアアアつ！！ねえええええつ！！」

ギヤ ギヤ ギヤ ギヤ ギヤ ギヤ ギヤ ギヤ ギヤ ギヤ
ギヤ ギヤ…!!

[illegible]

そして…

スバルは…ギリギリで負けてしまった…

アクセル「フツ…さすが、俺の最速理論だ…」

そう言ってアクセルは去っていった

優勝商品を受け取らずに…

まあ優勝商品は此処の年間パス（何故か二人分）だったのだが…

そして夕方

ミソラ「スバル、最後にあの観覧車に乗ろう！」

スバル「うん、じゃあ行こうか」

で

ミソラ「うわゝ……！高いよ……！」

スバル「ミソラ。」

ミソラ「ん？」

スバル「今日1日楽しんでくれた？」

ミソラ「うん……！と言うか、スバルと一緒にならどこへ出掛けても楽しいしね……！」

スバル「あ、ありがとう：／／／／／／／／あ、そうだコレ：」

1つの小さい紙袋を差し出した

スバル「誕生日プレゼントだよ／／／／／」

ミソラ「ありがとう！開けてもいいかな？」

スバル「うん／／／／／」

ミソラ「わあ：」

中身は音符の形の髪留めだった

そしてミソラはすぐに付けた

ミソラ「どう？似合ってる？」

スバル「うん、良かった、よろこんでもらって…」

ミソラ「スバル」

スバル「なに？」

ミソラ「ありがとう」

観覧車が頂上に達した辺りで

二人の影は

重なった

その後…家に帰って行った二人だったが…

さてさて…どうなることやら…

B
p
a
r
t
へ続くぜっ!!

合計100話突破記念番外編 A part (後書き)

…なんか

最長記録…

約5000文字…

ちなみにB partは

二人がイチャイチャしてる間、他のメンバーが何していたか

そしてC part はAとBのストーリーが交差？します

合計100話突破記念 B p a r t (前書き)

デュオ「とりあえず何故更新が遅れたか言え」

作者…ネタ切れです

デュオ「それだけか？」

作者…お前らの絵を描いてた

デュオ「バカが…」

合計100話突破記念 B part

さてさて…スバミソがイチヤイチヤしてる間…皆さん何をしていらつしたのかな…？

少し前

深夜3…45

デュオ「ツトウア！！」

ザシュツ！！

グギヤアアア！！

デュオ「mission complete…」

ジャキン…

相変わらずデビルハンターの仕事をこなしていたデュオ

アリサ「お疲れ様。」

デュオ「ああ…お前もな……眠くはないか？」

アリサ「大丈夫、昼に寝たから。ってかもう慣れたしね。」

デュオ「そうか…なら帰るか…」

アリサ「うん♪」

そう言ってデュオの腕に抱き付いた

デュオ「…何で抱きつくんだ…?」

アリサ「別にいいでしょ?それとも私にこうされるのは嫌?」

デュオ「…嫌ではないな…」

アリサ「じゃ、いいでしょ?」

午前8時

暁「今日ってさあ…8月2日だよなあ…」

クインティア「ええ、そうだけど…何かあったの？」

暁「何か有ったよう無かったような…」

ジャック「アレだ、ミソラの誕生日。」

暁「ああ、それだ。」

ジャック「で？それがどうかしたのか？」

暁「いや、遊撃隊の仲間だからさあ、誕生日プレゼントの一つ位送ってやろうかと思ってな？俺は忙しくて直接渡せないが…」

クインティア「私も此処をあまり離れられないし…」

暁「…と言うわけでジャック、お前何か3人分として何か渡してやってくれ。」

ジャック「…渡すのは良いんだケドよ…何渡しゃいいんだ？」

暁「……うまい棒の詰め合わせだ…これ渡してこい…」

ジャック「バカか…」

クインティア「バカね…」

暁「いいだろ！？うまい棒は旨いんだからさあ！！名前に書いてあるだろ！！旨って！！」

二人「ダメだこいつ…早く何とかしねえと…（しないとね…）」

暁「よし！だったら勝負だ！勝った奴が渡す物を選んで渡せる！」

ジャック「どうするよ姉ちゃん…」

クインティア「さっさと殴り飛ばして普通の物を渡してあげましょう。」

ジャック「だな。」

暁「よーし！電波変換だー！ー！！」

しかし

暁「ぐふっ…」

何があったか

暁「行くぞ!! ロックオンソード!」

ジャック「グレイブクロー。」

クインティア「ハイドロドラゴン。」

ドゴーン!!

暁「ギャー————!!」

ジャック「アホだなWWW」

クインティア「真っ正面から突っ込んできたのが悪いのよ。」

暁、自爆!!

ツカサ「…暇だなー……………ラジオでもつけよ…」

ピッ

ガガガッヴィイイン…

『まもなく、午前9時を、お知らせします』

ピッ…ピッ…ピッ…ピッ…ピッ…ピッ…

ヒカル「何かやけに長いな…」

ピッ…ピッ…ピッ…ピッ…ピッ…ピッ…

ヒカル「うおい！ホントなげえよ！」

ピッ…ピッ…ピッ『さーて始まりした！貴方の朝のパートナー？
アフタヌーンラジオー！』

ツカサ「って時報は!？」

ヒカル「つーか朝か昼かはつきりしろよ!! つか聞くなよ!!」

『司会は私……ハイツ、まずは最初のコーナー!!』

ヒカル「誰だよ! 名乗れよ! 気になるだろ!!」

『一発芸のコーナー!! このコーナーは、私の特技を自慢するとい
う、画期的なコーナーです。』

ツカサ「公共の電波でそんな事しちゃダメでしょ……」

『今回は腹話術を駆使した、時差をやります。……あれあれ?……
声が……遅れて……聞こえるよ? 不思議ですねー。』

ヒカル「ラジオじゃわかんねーよ……」

『うるせえ、文句有るならかかってこい。』

ヒカル「…俺の声聞こえてんのかよ…」

『きこえてねーよ』

ヒカル「きこえてんじゃん…」

『ばっかじゃねーの？これラジオだぜ？会話出来るわけねえじゃん。
』

ヒカル「でも今会話成立してたじゃねえか！」

『……チツ…次のコーナー…』

ツカサ「何でふてくされてんの…」

『スポーツニュース！』

ヒカル「次はまともだろうな…」

『先日、世界軽量上げ大会で新記録が出ました。』

ツカサ「軽量上げてってWWW何それWWW」

『軽い物をいかに重そうに持ち上げるかを競うこの競技、以前は、アフリカ代表のポチヨムキン選手の”3時間22分かけて綿棒を持ち上げる”でしたが、同じポチヨムキン選手によって5時間18分かけてマツチ棒を持ち上げると言う大記録が出ました。』

ヒカル「もう意味がわかんねえ…」

『記録を出した後のポチヨムキン選手のコメントは、「いやあ…：軽かった〜」だそうです』

ヒカル「当たり前だろwww」

『ここで、天気予報です！』

ヒカル「唐突だなオイ！」

『今日の午後から、北極圏付近は、大吹雪に見舞われるでしょう。お出かけの際は、傘を持って十分注意を。』

ヒカル「んなとこ普通誰も出かけねえよwww」

『続いて日本の天気、沖ノ鳥島の天気は雨』

ツカサ「無人島じゃんWWW」

『関東地方の天気は』

ヒカル「この辺だな」

『うあああ！！………ハイツ最後のコーナー…』

ヒカル「言えよ！！！」

『占いのコーナー。このラジオを聞いている人の今日の運勢は』

『降水確率は50%』

ツカサ「それコーナー違うだろWWW！！」

『ラッキーナンバーは102』

ツカサ「微妙WWW中途半端すぎるWWW」

『ラッキーカラーは、黄ばみ』

ヒカル「黄ばみってWWW色じゃねえだろWWW」

『ラッキーパーソンは火星人』

ヒカル「会えねえだろWWW！ってか火星人っていんのかよWWW
」

『ラッキーアニマルはチョウチンアンコウ』

『ラッキー病気は偏頭痛』

『ラッキー決まり手は上手投げ』

『ラッキー犯罪は、万引き』

ツカサ「もう意味分かんないよWWW」

『ちなみに、アンラッキーな行動は、激しい突っ込みを連発、です』

「「アンラッキー全開だ……」」

『それでは、さようなら〜！！』

デュオ「わかった。」

スーパーにて

デュオ「…よく考えてみれば今日の買い物当番はアクセルではなかったか？」

アリサ「そこは気にしない！」

デュオ「…りょ…了解…」

デュオ「で、何で俺達が買い物に来てるんだ？」

アリサ「ちょっと頼まれ事を…ね…」

デュオ「頼まれ事？」

アリサ「ミソラちゃんが今日誕生日らしいから、ケーキ作って欲しいってスバル君のお母さまから頼まれたからね…」

デュオ「…初めから俺に作らせるつもりだっただろ…」

アリサ「…バレた…？」

デュオ「本当だったのか…適当に言ったのだが…」

アリサ「あ……！」

デュオ「普通に頼めば、作ってやったのに。」

アリサ「い、ごめん…」

デュオ「いや、別に良いが…とにかく材料をさっさと買って、作り始めよう。」

アリサ「うん！」

デュオ「チョコか…生クリームか…どっちがいいだろうか…：…アリサ、何か響ミソラの好みなどは聞いていないか？」

アリサ「うーん…多分どっちでもいいんじゃないかな…ただ…：…」

デュオ「ただ？」

アリサ「物凄く食べるみたいなの…」

デュオ「それは…アレか…？某任○堂の某ピンク玉のごとく大量に食べるのか…？」

アリサ「…多分…」

デューオ「……よし、フルーツは有るから生クリームで作る……早く作って料理を作るのを手伝いに行った方がいいだろう……多分……」

アリサ「うん……」

歸宅！！

RRRRRRRRR!
!

アリサ「ハイ……あ……ハイ……わかりました、聞いてみます。」

デュオ 「…どうした…？」

アリサ「スバル君とミソラちゃんデートに行ったから、どれくらいイチャイチャしてるか見てきて欲しいって…」

デュオ「俺はケーキを作らねばならない……よし……アクセルに行かせるか……」

アクセル「……………!!」

シオン「…どうしたの？」

アクセル「わからねえ……だが何故だか……このドアを開けば厄介な事態に巻き込まれると俺の第六感^{シックスセンス}が感じている……」

シオン「何よそれ……」

アクセル「…神は言っている……このドアを開けるべきではないと……!」

シオン「神様は貴方の兄が殺してるでしょ。」

アクセル「とにかく…俺はちょっと逃げr『アクセル、居るのは分かってるからさっさと入れ、厄介な事には巻き込まんから。』Jesuss…」

ガチャ…

アクセル「ハア……で？俺は何をすればいい？」

デュオ「簡単だ。お前ら2人デートしてこい」

アクセル「は…？」

デュオ「条件付きだな。」

アクセル「条件？」

デュオ「”Shootingstar”（流星）と”Divas”（歌姫）のデートの様子を見てくることだ。」

アクセル「そりゃ…何でまたそんな事を…」

デュオ「頼まれた」

アクセル「誰に」

デュオ「Shootingstarの…な…」

アクセル「なるほどな…あの人なら頼みそうだ…WWW」

デュオ「じゃあ頼んだ」

シオン「はい♪任せて♪」

アクセル「ちょ…俺は引き受けるとは…だいたい兄貴が行けばいいじゃねえか。」

デュオ「俺はケーキを作らねばならん」

シオン「と言うことで行くよ♪」

アクセル「え、ちよっ…待て…あああああ………」

デュオ「さて…始めるか…」

デュオはケーキを作り始めた

アリサ「凄い…」

デュオのケーキを作る様子は力強く、繊細だった。
フルーツを斬る時の包丁さばきも、高速過ぎて手が分身して見えそ
うだった

まあ普段から70kgもある大剣を振り回してるのだから当然と言えど当然なのだが

ちなみにフルーツを斬る時に最初、リベリオンをしようとしたが、アリサに「そんなの使ったらキッチンが真っ二つになるでしょー！！！」と怒られたので止めた

ともかく、

ケーキは完成した

様々なフルーツを使用し、さらに中央のチョコレートには

H a p p y B i r t h d a y H i b i k i M i s o r a

と書かれている

まさに職人技

デュオのチートっぷりがよく分かる

デュオ・レイ

何処までも

チートなヤツである

デュオ「さて……しばらく休憩したら、持って行くか………」

ガチャ…

冷蔵庫からフルーツ入りゼリー（相変わらず自作）を二つ取り出し、
食べ始めた

アリサ「ホント、ゼリー好きだよね。」

デュオ「ああ。（パクッ）」

アリサ「そもそもなんでゼリー好きなの？」

デュオ「栄養などを混ぜて効率良く素早く摂取するのに最も適しているからな。」

アリサ「そんな理由で…」

デュオ「まあこれはゼリーが好物になってしばらくしてから知ったんだがな。一番の理由は親父が昔作ってくれたフルーツゼリーが最高に旨かったからなんだが。」

アリサ「ふーん…そのデュオが最高に旨かったって言うゼリー一度食べてみたいなあ…」

デュオ「食うか？」

そう言って取り出しておいたもう一つのゼリーを差し出した

アリサ「え？」

デュオ「このゼリーは親父のレシピ通りに作ってある。だから味は同じだ……………多分……………」

で

デュオ「”で”使うのは久々だな」

作者…まあな

閑話休題

で

デュオ「じゃあ行くか…一応、食材も少し持っていくか……」

アリサ「じゃあケーキは私が持っていくね。」

デュオ「頼む…」

アリサ「こんにちは！」

茜「あら、もうできたの！？」

デュオ「はい。最高の出来にしたつもりです。…見てみますか？」

茜「ええ、お願い。」

箱を開けると

—Happy Birthday Hibiki Misora—

と書かれたチョコレートに数種類のフルーツで出来たケーキ

圧倒される出来だった

デュオ「そういえば俺^{アクセル}の弟から連絡はちゃんと来てますか？」

茜「ええ、ちゃんときてるわよ、少し写真付きで。」

デュオ「それは良かった：アイツ：アイツ^{シオン}の彼女に半ば拉致られたようなものだったので…」

茜「あらあら…」

デュオ「あ、そうだ。響ミソラがかなりの量を食べると聞いたのですが…：具体的にはどれくらいなのでしょう？」

茜「そうねえ…大体…値段はひと桁は上ね」

デュオ「…：料理作るの手伝いしましょうか？ いや、むしろ数人いないとマズイ気がするので手伝わせてください。食材少し持ってきたので。」

茜「じゃあお願いしようかしら。」

デュオ「では、何を作れば良いですかね？」

アリサ「私も手伝います。」

茜「そうねえ…じゃあ…何が作れるのか教えてくれる？」

デュオ「世界中どこの料理でも作れますね。たとえばつかの原住民とかが食べるようなアブノーマルな料理でも作れます。…色々食ってきましたんで…。」

アリサ「私もだいたい同じです。…まあ…普通の料理なら…ですが…。」

茜「じゃあ…2人にお任せしようかしら。」

デュオ「分かりました。」

アリサ「任せてください!!。」

デュオ「よし、何を作るか……」

アリサ「うーん……」

デュオ「……シンプルに鶏の唐揚げでも作るか……」

アリサ「一体何がシンプルなのか分からないけど突っ込まないでおくね……」

デュオ「……アレ……?」

アリサ「……アレ……?」

デュオ「……俺達普通に唐揚げ作ってたよな……?」

アリサ「うん。」

デュオ「途中何も変わった事はしてないよな？」

アリサ「うん。」

デュオ「では何故……一口大に切ったはずの鶏肉が……
…でかいフライドチキンになってるんだ？」

アリサ「……さあ…？ 錬金術でも発動したんじゃない？」

デュオ「…俺は錬金術などは会得していない…」

アリサ「アクセル君が何かしたんじゃない？ 自動で発動する錬金術とか。」

デュオ「いくらあいつが赤いコート着てるからと言って、某鋼の錬金術師みたいな事は出来んだろ…と言うか何故にそんなに錬金術にこだわる？」

アリサ「わかんないけど何故か言わなきゃ無らない気がする…」

デュオ「……………」

茜「…で…………いくつか料理を作ったら何故か別の似た料理になってしまったと……………」

デュオ「…ハイ…」

変化リスト

鶏の唐揚げ↓少しかいフライドチキン

カレー↓ビーフシチュー

色々な天ぷら↓色々なフライ

チャーハン↓パエリア

普通の味噌汁↓赤出汁

一体何をしたらこうなるのやら

だがしかしそこはデュオ

意味不明な事態が起こっても料理は超美味かった

デュオ「…さて…そろそろ帰るか…」

アリサ「そうだね、もうそろそろあの二人も帰スバルとミソラってくるだろうし。」

デュオ「アイツ等《アクセルとシオン》もな。」

茜「あら、もう帰るの?」

デュオ「はい、あまり、長く居すぎない方が良いでしょう。もうじきあの二人も帰ってこられるでしょうし。」

茜「そう、ありがとうね。」

デュオ「いえ、お邪魔しました…」

∴C
partへ続く!!

合計100話突破記念 B p a r t (後書き)

さて、次回で記念は終了です

お楽しみに

合計100話突破記念 C p a r t (前書き)

最初に謝ります

申し訳ありませんでしたッ!!

ではどうぞ

合計100話突破記念 C p a r t

スバルとミソラは家に帰って………くる前に

ジャック「おー！お前ら！よかった間に合ったぜ！」

スバル「あ、ジャック。」

ジャック「ほいミソラ、これは俺と姉ちゃんと暁からの誕生日プレゼントだ。」

ミソラ「ありがとうジャック君！」

ジャック「どういたしまして。」

スバル「…暁さんってまさかうまい棒を…」

ジャック「大丈夫だ、問題ない。暁シドウあのバカの暴走は俺と姉ちゃんが阻止した。」

スバル「…暴走って……」

ジャック「アイツ大量のうまい棒（およそ100本）をプレゼントしようとしやがったからな…」

スバル（暁さんは一体どれだけうまい棒を持っているんだ…？）

などと考えるスバルであった

そしてジャックと別れ、家に帰った

あ、ちなみにジャックとクインティアと一応入れておく暁のプレゼントは星形のキーホルダーでしたとさ

暁「一応入れておくってなんだ一応って!!」

作者..アンタ気絶してんだろ。しかも内容は知らん訳だし。

閑話休題

スバル達は帰宅した

「「ただいま。」」

「おかえり。」

スバル「うわっ！なんか凄い料理がっ！！」

凄まじい料理の数々に驚くスバル

ミソラ「美味しそう……」

スバル「よくこんなにたくさん作れたね……」

茜「勿論私一人でやったわけじゃあないわよ？助っ人が居たのよ助っ人が！」

スバル「…誰？」

茜「それはね……」

茜は言いかけたが、
デュオに

「とりあえず、ケーキ食べるまでは俺が関わった事は秘密にしておいてください。」

と言われていたので

茜「後で教えてあげるわ。」

スバル「あ…そう…」

ミソラ「スバル！そんな事より早く食べようスバル！」

その後…大悟が帰ってきて、ご飯を食べ始めるのだが…

言うまでもなく

ミソラ一人で6割は食べたのだった

ロック（あ：ありのままに今起こった事を話すぜ：ミソラが料理を食べ始めたと思ったら、あり得ない速度で料理が減っていったんだ：ゲシュタルト崩壊みたいだとか、ダム決壊みたいだとかそんなちゃちなもんじゃねえ：もっと恐ろしいモノの片鱗を味わったぜ：）

以上、ウォーロックのジョジョ風解説でした

ちなみにスバル達は見ているだけで満腹になりそうだったとき

で

お待ちかね？のケーキだっ！！

とか言ってもただ箱開けりゃあ良いだけなのだが

スバル「？母さん、箱の中に何か紙が張り付いてるよ。」

スバルはその紙をはがした

そこには

Happy birthday Hibiki Misora
from Duo. Arisa. Axil. Xion.

と、書かれていた

ミソラ「て…ことは…さっきの料理とケーキを作ったのは…」

スバル「デュオさん…！」

で…そのデュオは…

デュオ「……スウ…」

~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

パチパチパチパチパチパチパチパチ…

展望台でオカリナを演奏していた

アリサ「それ、なんて曲？」

デュオ「これは一終わらない円舞曲 《エンドレス
ワルツ》」

アクセル「だが…曲調は円舞曲^{ワルツ}…とは…少し違う…何でだ？」

デュオ「知るか…まず親父が作った曲だしな…どんな意味が有るのかは知らない…」

（（（ホント何でも有りな父親だなあ…）））

C h a n g e

スバルとミソラは展望台へ向かっていた

すると

♪…♪…♪…♪…♪…♪…

ミソラ「音楽が聞こえる…」

スバル「何だろう…これは…何かの歌かな？」

ミソラ「違うよ…これは…^{ワルツ}円舞曲…？あ…でもちよつと違うかな…」

スバル「…とりあえず行ってみよう。」

デュオ「…誰か来たな。」

アクセル「ああ。」

シオン「うん。て言うかすぐそこに立ってるね。」

アリサ「誰だろうね。大体分かってるけど。」

スバル「……」

ミソラ「……」

「（気配を消してこっそり近づいたのに何故に気付いたし！？）」

デュオ「ちなみにお前らでは俺達を欺く事は不可能だ。一般人ならある程度誤魔化せてもな。星河スバル、響ミソラ。」

「（そこまでばれてるッ！？）」

アクセル「ちなみに全員気付いてるからな。」

スバル「す…すみません…」

デュオ「何故謝る？お前は何もしていないだろう？と言うか邪魔だな俺達は。」

アクセル「よし、じゃあ帰るか。」

デュオ「じゃあな。」

アクセル「A d i o s b o y.（さらばだ、少年よ。）」

ミソラ「あ、あの！料理と、ケーキ、ありがとうございました！」

デュオ「ああ、気にするな、俺達からのプレゼントだ。」

アクセル「そしてそんな君にさらに俺とシオンからプレゼントだ。」

アクセルは胸ポケットから写真を取り出した

スバル「えええっ!？」

ミソラ「うにゃっ!？」

その写真は二人が手をつないで歩いている瞬間とベンチで寄り添ってくっ付いている瞬間とキスしている瞬間だった。

スバル「な、なななななななななな何でこんな写真がっ
!!!!!!!!!!!!?????」

デュオ「詳しくは自分の母親に聞いてくれ。じゃあな。」

アクセル「Good night.」

アリサ「じゃあね」

シオン「バイバイ。」

二人の隣を通り過ぎる瞬間、こっそり

デュオ「(大事にしてやれよ)」

アクセル「Good luck.」

スバル「はい。」

アリサ「(頑張ってるね)」

シオン「（ちゃんと捕まえておいた方が良くもね、だから頑張つて。）」

ミソラ「はい。」

とそれぞれ言って展望台から飛び降りて行った

「「飛び降りた！！！？？？」」

で…まあこれで
この話はお終い

なに？この後二人が何したかって？

そいつあ…

ご自分で妄想してくだせえ…

合計100話突破記念

Fin

合計100話突破記念 C p a r t (後書き)

作..申し訳ありませんでしたッ!!

スランプになり、話の結末がムチャクチャになってしまいました!!

デュオ「作者:G o t o h e l l!! (地獄に落ちろ!!)」

ガキィン!

作..H O O!!危ねえ!!

デュオ「さあ:お前の罪を数えろ:!!!!」

作..8742162996587451個だな

デュオ「マジで数えやがった:」

作..つかそのセリフは色々とマズいからやめれ

デュオ「まあいい、とりあえず死ね:」

ガキィン!!

作..H e y H e y H e y H e y! W h a t' s u p! ?
(どうしたア! ?) I s t h a t a l l y o u g o t! ?
(それがお前の本気か! ?)

ガキンガキンガキンガキンガキン

デュオ「Y o u s h a l l d i e ! (殺してやるっ! !)」

ガキンガキンガキンガキンガキンガキン

作..C a n y o u k i l l m e ? (お前に俺を殺せるかな?)

ガキンガキンガキンガキンガキンガキン

デュオ「I k i l l y o u ! (お前を殺すっ! !)」

ガキンガキンガキンガキンガキンガキン

作「その程度か! Y o u c a n' t k i l l m e ! ! (お前に俺は殺せねえよ! !)」

ガキーン!!

デュオ「グアアアア!!」

作..I say again.

You can't kill me.

Do you understand?

(もう一度言う。お前じゃ俺を殺せねえ。理解したか?)

と言うわけで

次回もよろしくお願いしますッ!

そしてもうじき再開するノビハザもよろしくお願いしますッ!!

では!!

See you!!

第32話

デュオ「…行くか…」

デュオは門をくぐった。

— mission start —

デュオはまずまっすぐ進む。

しばらく進むもの、一本道で何もない。

デュオ「…何だコレ…」

とにかく一本道で何も無い。

だが、異常なまでに長い

もう10km以上進んでいるはずなのに終わりが見えないのである。

デュオ「どうなっている……一度引き返すか……」

後ろを向いて入り口に引き返し始めた

するとものの三分とかからないうちに、たどり着いたのである。

デュオ「どうなっている……ゼロ、俺は今まで何分走り続けた?」

ゼロ「約一時間だ。」

デュオ「引き返してここにたどり着くまでは？」

ゼロ「およそ三分だ。」

デュオ「……なんだこの時間差は……どうなっている……

……

……

……まさか……」

チャキツ

何もない空間にルーチェを向け

B a n g ! !

デュオ「外したか……だがしかし予測は当たったな……」

チャキツ

B a n g ! !

デュオ「…またか…」

今度は腕を広げ、ルーチェとオンブラを左右反対側に向け

B a n g ! B a n g ! B a n g ! B a n g ! B a n g !
B a n g ! B a n g ! B a n g !

バリッ！

デュオ（撃ち抜いた…！）

右に何かの機械の残骸が残っていた

そして、一瞬風が吹いた

デュオ「親父にしてはいきなり手の込んだ仕掛けだ…やはり此処には封印ノ錠がある…」

そうつぶやいてまた歩き出した

しばらく歩くと今度は崖になっていた

デュオ「ゼロ、チェーンロッドを。」

ゼロ「了解。」

デュオの手にはチェーンロッドが握られた。

さらにデュオは後ろに下がり

デュオ「Flash dash!!」

超高速移動の助速から飛び出した

デュオ「ハアッ!!」

しかしそれでも届かない

デュオ「タアッ!!」

だがチェーンロッドを対岸の壁に突き刺し、なんとか届いた

デュオ「ギリギリだな…」

そして扉を蹴り飛ばし、また進んでいった

今度は

ガシャン ガシャン ガシャン…

床、壁、天井からトゲが突き出てくる廊下だった

デュオ「…H a a a……D r i v e!! O n e! T w o! T h r e e!! F i n s h! (…ハアアア…ドライブ!! もう一発!! もう一発!! さらにもう一発!! これで終わりだッ!!)」

連続Drive、Quick Driveにより、全てのトゲを一掃した

デュオ「よし。」

次は

巨大な扉だった

デュオ「……イイイイイヤツツ!!」

ガキイン!!

stingerを放って扉を吹き飛ばそうとしたが弾き返された

デュオ「チツ：style shift change, Gun
aster! Gun change, Twin baster
ifle!

ツインバスターライフルに銃を換装し、エネルギーをチャージする

デュオ「Fire!!」

跡形もなく扉は砕け散った

デュオ「よし、行くか…」

デュオ「…ここが最深部か? やけに広いが…」

そのまま円形の部屋を中心へ歩いていく

デュオ「…!!」

グオオオオ!!

デュオ「チツ…やはり簡単にはいかないか」

??「何者だ…ここまでたどり着くと言うことはかなりの手練れだろう…しかし此処から先には絶対に行かせるわけにはいかん！」

そこには体長5mはありそうな人型の狼がいた

デュオ「悪魔か…それも最上級悪魔クラス…」

??「今すぐ此処から立ち去れ!! すぐに立ち去るなら命は助けてやろう…」

デュオ「悪いが俺の探し物はどうやらこの先にあるらしいんでな、お前を倒してでも進まさせてもらおうぞ！」

リベリオンを構えて叫ぶデュオ

?? 「此処から先には絶対に行かせるわけには行かん!! 敵は全てこのベオウルフが消し去る!!」

デュオ「悪いが、先に行かせてもらおう!!」

— WARNING —

ベオウルフ「死ねッ!!」

ベオウルフが左手で殴りかかってくる

デュオ「…」

デュオは右に移動し、回避する

ベオウルフ「ぬうううん!!」

今度は右手の爪で切り裂こうと来る

ガキン！

デュオ「クッ…」

リベリオンで受け止める

ベオウルフ「隙ありッ！！」

すかさず左手の爪で切り裂かんと、振りかぶる

デュオ「チッ：Trick move！」

突然デュオの姿が消え、ベオウルフの背後の頭上に現れる

デュオ「タアアアッ！！」

頭上から真つ二つに切り裂かんと剣を振り下ろす技
Helm ヘルムスラッシャー sra sherを繰り出す

ベオウルフ「甘いッ！！」

ベオウルフは振り向きながら右手に光を集め、放つ

デュオ「ッ！！ハアッ！！」

H e l m s r a s h e rで光弾を切り裂こうとする

が

デュオ「く…切り裂けない…ぐあああああ！！」

ベオウルフ「ハアッ！タアッ！ティヤッ！」

さらに

右フック、左アッパー、回し蹴りを連続でくらう

ドゴオオオオオン！！

デュオ「ガハアッッ！！」

壁に叩きつけられるデュオ

頭から血が出ており、恐らく内蔵もやられているのか、血を吐く

デュオ「…Is that all your got?（それが
お前の本気か?）」

ベオウルフ「……（バカな…今は本気では無いにせよ…殺すつもりで放ったはずだ…何故やつは生きている…?）」

デュオ「…今貴様が考えている事を当ててやろう『殺すつもりで放ったはずだが何故やつは生きている?』違うか?」

ベオウルフ「クッ。」

デュオ「凶星か…まあいい、答えを教えてやろう。俺は人間ではないッ!!」

叫んだ瞬間Zセイバーとリベリオンを突き出し、突撃した。

ベオウルフはあまりの不意打ちに、対応しきれず、斬撃を喰らう。

ベオウルフ「グオオオオオオオオオオ!!」

運動神経リンク―――クリア

中枢神経リンク―――クリア

末梢神経リンク―――クリア

精神リンク―――クリア

肉体強化リンク―――クリア

全リンク―――オールクリア

Perfect Victory System Version.
Z.E.R.O. Drive Ignition.

デュオの視界がクリアになり、部屋全てのあらゆる情報が頭に入ってくる。

カッと見開いた瞳の色が蒼から鮮やかな水色へと変わる。

デュオ「本気で行くぞ！」

ベオウルフ「ウオオオオオオオオ！！！」

ベオウルフが両手に光を纏った状態で殴ってくる

それをわずかな動きで回避する

ちなみにデュオとベオウルフの腕との幅は約20cm

さらにデュオは

デュオ「Ha!!」

ベオウルフの腕を伝って肩まで走り

デュオ「死ねッ!!」

リベリオンを人間で言う鎖骨付近に突き刺した

ベオウルフ「グオアアアアアアアアアアア!!」

デュオ「クッ…」

デュオは暴れ狂うベオウルフの上で突き刺したりベリオンに捕まる

デュオ「チッ…」

そのまま剣を抜き飛び下がる。

————我が翼よ!!

我が爪よ!!

我が力を解放し、敵を滅せよ!!

破壊、粉碎、滅殺!!

checkmateeeee!! (チェックメイトオオオオオオオ!!)「」

右腕全体が銀色の光を纏った巨大な籠手のようなものに覆われ、その拳を振りかぶる

デュオ」

――――我が剣は魔を滅する。

――――剣には魔と天と死の力。

――――全てを切り裂き、貫き、滅殺する！！！！

Darkness Over Drive！！！！
（ダークネスオ
ーバードライブ！！！！）

禍々しいまでに青黒い光にリベリオンが包まれ、青黒い雷が刀身の
周りに発生し、そのまま剣を振るう。

白銀に輝く拳と青黒い剣がぶつかり合う

—
—
—
—
—
—
—
—
瞬間—
—
—
—
—
—
—

「???」
「そこまで!! ベオウルフ!! デュオ!!」

何者かが、互いの間に割り込み、双方の攻撃を片手で受け止めた

続
く
っ
!
!

第33話

???「お前らやりすぎだ…」チェックメイト」と”ダークネスド
ライヴ”をぶつけたら此処が消し飛ぶだろうが、全く…」

「「親父…!?!?／ボス…!?!?」」

アイン「久しぶりだな…二人とも…元気だったか?ベオも命令は守
ってくれていたようだな。」

ベオウルフ「当たり前だボス!俺はあんたに従うからな!!ボスの
命令は絶対に守る!」

アイン「そうか、ありがとう…:デュオ…どうした…なんだ…:思
ったよりリアクションが無いな…」

デュオ「一度死んだと思った人間が実は生きていた、なんてことは
とつくの昔に慣れている。よくあったことだ。」

アイン「オイオイ、せっかくの久々の親子の再開だ…もう少し嬉し

そうにしろよ……”彼女”と再会した時みたいに。」

デュオ「やっぱり見てやがったか……やはり上空から感じた気配は……」

アイン「気付いてたのか……やるな……上空から見てたからな……」

デュオ「引っかかったなクソ親父。」

アイン「………Ha……Hahahaha……お前は本当にすげえよ……
hahahaha……!!この俺が引っかかるんだからなあ……!!かつて誰1人として引
っかからなかったことは無いしな……!!」

デュオ「で？クソ親父はこんな北極の海底で何をしてるんだ？」

アイン「クソは止めろクソは……まあ……ちょっと俺の剣の様子が気
になってな。」

デュオ「嘘付け、ずっと俺を監視してただろ。」

アイン「そんな事はないぞ。」

デュオ「洞窟の岩盤の一部を破壊しただろう。」

アイン「…ばれていたが…ちくせう…orz」

デュオ「とにかく…何故生きている…」

アイン「ん？あー…まあ…今俺は…まあ魂だけの存在なんだわ。まあほぼ死んでるな。」

デュオ「つまり何時消えるか分からないと言うことか…」

アイン「ご名答。だから消える前に色々やっつくことがあるんだ。まず…デュオ、お前に封印ノ魔剣は使いこなすことは恐らく出らん。」

デュオ「…何故だ…」

アイン「この剣は特殊で、使用者を剣を握った者の記憶の中から生きていくかつ戦闘に慣れている者をランダムで選ぶ。まあたまたま握ったヤツが使用者になる場合もある。」

デュオ「なら…反応を感知すれば問題ない。」

アイン「まあ、そうなんだけどな。けどそれを言っちゃあお終いだぜ…」

デュオ「事実を言ったまでだ。…そう言えば肝心の封印ノ魔剣はどこだ？」

アイン「…ベオ、出してくれ。」

ベオウルフ「All right boss. ハッ!!」

ベオウルフが部屋の中央を殴りつけた。

そこには穴が開いていた

アイン「よし、デュオ、ついて来い。ベオ、監視を頼むぞ。」

ベオウルフ「All right.」

アインは穴に飛び降りた。

デュオも穴に飛び降りた。

アイン「これだ。これが封印ノ魔剣、シーリングソードⅡセブンスセイバーだ」

デュオ「……」

一つの剣が円形の台座に刺さっており、それを囲うように六つの大小様々な大きさで特異な形状の剣が刺さっている。
そして中央の剣の側に大型の盾が置いてある

アイン「7つの剣を同時使用する剣。封印の際には錠となり、さらに鍵で施された封印を六つの剣でさらに強固な物へと変える。そして盾で完全に塞ぐ。」

デュオ「封印ノ魔剣、シーリングソードⅡセブンスセイバー……」

デュオが中央の剣に近づき

アイン「さあ。手に取れ。そして抜き放て。」

デュオ「……ああ!!」

ガシッと剣の柄を掴み、躊躇わず、勢いよく抜き放つ

刹那、凄まじい光が放たれ、視界が真っ白になる

デュオ「クッ…」

光が収まった時、剣は消えていた

デュオ「…。」

アイン 「さあ…次だ……エンドレスワルツ終わらない円舞曲の楽譜、有るか？」

デュオ 「ああ。これだ。」

アイン 「この曲を完成させる。」

デュオ 「未完成だったのか。」

アイン 「完成させるといふより、もとの有るべき形へ戻すと言った方がいいな。この曲、円舞曲ワルツにしては微妙に変だろ？」

デュオ 「ああ…確かに…違和感がある。」

アイン 「そもそもこの曲は3拍子ではなく4拍子の曲。それを無理やり3拍子にしている曲だからな。違和感は当然だ。だから今から4拍子に戻し、有るべき姿へ戻す。」

デュオ 「そもそもこの曲は何なんだ？普通の曲でないことはわかるが…」

アイン「いづれ分かる。曲名は教えてやる。この曲の本当の曲名はラストファンタジー最後の幻想：真の意味は：輪廻の終焉：。これが何を意味するかは：悪いが俺の口からは言えん：だがいづれ分かる：」

デュオ「3拍子の意味は”封印の解除”、”戦い”、”再封印”：曲名はそれが永遠に続く事を意味する：4拍子は”封印の解除”、”戦い”、”封印”、そして”変革”……これは絶対に解除できない封印の事を指す。曲名の意味はもともと繋がることの無かった世界を力を求めた人間が繋いでしまった世界、力を求め、何度も繰り返された輪廻を、絶対的な力を手に入れられると言う幻想を終わらせる。：俺の想像だが……さすがに違うか？」

アイン「……だ、だから俺の口からは言えないって言ってるだろうが……」

デュオ「：Hum：まあいい：俺は上に戻るぞ。」

アイン「あー待て、もう終わるから……よし、完成だ。行くぞ。」

デュオ「もういいのか？」

アイン「ああ、大体は…な…」

デュオ「まだあるのか？」

アイン「これで最後だ。ベオ。」

ベオウルフ「なんだ？」

アイン「マスター認証を俺からこいつに…デュオに変更してくれ…」

デュオ「…？」

ベオウルフ「ボス！本気か！？」

アイン「ああ。こいつなら…俺の息子ならお前を安心して託せる。それにお前もこいつと戦って、何百年かぶりに魂が震えたのだろう？」

ベオウルフ「まあ…そうだが…」

アイン「力も申し分ないだろうし、魂も十分だろう？頼む。」

ベオウルフ「わかった。それにボスの息子なら、もっと楽しめるかもしれないねえ。」

アイン「ああ、確実に楽しめる、俺が保障してやるよ。」

デュオ「”魔装具”か？」

アイン「ああ、ベオ。」

ベオウルフ「行くぞ

My power is your sake. (我が力は貴方のために)

My fang tears all. (我が牙は全てを引き裂く)

My nail tears all apart. (我が爪は全てを切り裂く)
These wings smash all. (この翼は全てを打ち砕く)

Power is held down by power. (力で力をねじ伏せる)

My power that is mainly destruction. (我が主に破壊の力を与えん)

My name is Beowulf! (我が名はベオウルフ!)

My power and all are entrusted
! (我が力、その全てを託す!)

┌

呪文のような物を言い終わった瞬間、ベオウルフが光になり、その光にデュオは包まれる

しばらくして、光が収まった

光の中から出て来たデュオの手足には漆黒の籠手と具足が装備されていた

籠手には鋭い爪が付いており
全体に白いラインが入っている

具足にも爪が付いており、白いラインが入っている

ベオウルフ「凄いな…適合率100%だ…ボスを超えてるぜ…」

籠手から声が聞こえてきた

アイン「俺で確か96%だったか。」

ベオウルフ「ああ、しかしボスを超える適合率とは…すげえ…」

アイン「おいおい、もう俺はボスじゃ無い、お前のボスはデュオだ。」

ベオウルフ「…だがクセでな…何て呼べばいいか…よし、デュオはボス、アインは旦那で行くか。」

アイン「まあ…いいか」

デュオ「好きにしろ…」

アイン「……!!」

デュオ「…これは…!!」

アイン「悪魔…だな…それもかなりヤバイ…数は……軽く一万を超えてるな…」

デュオ「場所は…不味い…ニホンだ…!!」

アイン「…ベオ。」

ベオウルフ「…分かってる。」

アイン「頼む。デュオ、速く行け。」

デュオ「分かってる。だが…」

アイン「どれだけ急いでも時間がかかりすぎる…か？」

デュオ「ああ。」

アイン「ならば飛んでいけばいい。」

ベオウルフ「俺の破壊の翼なら10分ありゃあ地球の何処から何処へでもひとつ飛びだ。破壊の翼、展開と言え。」

デュオ「…破壊の翼、展開。」

漆黒の四枚で二対の翼が背中に現れる

ベオウルフ「飛ぶには翼を動かして羽ばたくことをイメージしてみてください。」

デュオ「こうか…」

羽ばたくと、体が宙に浮いて空中移動をする

ベオウルフ「そうだ、流石に速いな、適合率100%の事はあるぜ。」

デュオ「もう行けるか？」

ベオウルフ「いつでも。」

デュオ「親父。」

アイン「行ってこい。俺もしばらくしたら追いつく。」

デュオ「ベオウルフ！」

ベオウルフ「All right!!」

デュオ「うおおおおお!!! Divine dragon!!」

回転しながらアッパーを繰り出し、天井をぶち抜いてそのまま上がって行く

アイン「Good luck…」

続くッ！！

第33話（後書き）

This party's getting crazy!!
Let's rock!!

デュオ「デイベインドラゴンて元ネタわかる人いるのか？」

作者…わからん

ゼロ「確か似たような技を俺も使えたはずだが……何故記憶がないのに分かるんだ俺……」

作者…ゼロ、それは戦士の勘だ。戦士として戦い続ければ頭が覚えていなくても体が覚えているものだ。昔お前も言ってただろ

記憶は無くともカラダはかつての友を覚えているようだ

エックスはもつと強かった

って。

ゼロ「なら俺は使えたのか……」

作者…さあ？

続けたい

P.
S

ゼロは昇竜拳をロックマンX時代るとき使えました。
どの作品かは忘れたけど。

第34話（前書き）

あとがきにてお知らせあります

第34話

アクセル「ぶえっくし!!」

— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —

アクセル「こんなところにホントにあんのかよ…ま、さっさと探すか
…」

つぶやいた瞬間、 アクセルの姿が消えた

アクセル「これは…洞窟か?…全部氷かよ…いや…何か違う…これはただの氷じゃあねえな…自然の氷にしては…冷たすぎる…」

氷に触れながらつぶやいている

アクセル「……どうやら、ここのようなだ…タアツ!!」

アクセルは目の前の氷を斬った

そこは行き止まりではなくまだ奥に続いていた

アクセル「Bingo…！」

そのまま奥へ入っていった

しばらくすすむと、広い場所にでた

そこには氷付けの城のような建物があった。

アクセル「Hum…もしかしてこれが氷付けの城か…？フローズン・キャッツル噂に聞いたことはあったがまさか本当にあるとはな…ま、とりあえず行くとするか。」

— mission start —
— — — — —

一歩踏み出した瞬間

ツルツ

アクセル「ウオワアアアアア！？めっちゃめっちゃ滑るウウウウウウ
ウウウウウ！！！！」

ドーン！！

滑りすぎてこけてさらに壁に激突しよう

アクセル「いてて…どうすっかなあ……」

滑るのでどうするか 考えていたアクセル

B a n g . B a n g . B a n g . B a n g . B a n g .
B a n g . B a n g .

二挺ショットガン、ブラックローズで四体分全て撃ち落とす

アクセル「B l a s t o f f ! ! （吹っ飛べ!）」

最も近くにいたヤツを吹き飛ばし

アクセル「D i e ! ! ! !」

シャキイイイン!!

次元斬で切り裂く

アクセル「I l l u s i o n b l a d e . s l a s h s h i f
t !」

六本の幻影刀を出現させ、橇円軌道で全てのフロストを切り裂いた

アクセル「相変わらず大したことねえなあ!!」

この状況下でアクセルは気が付いた

斬魔刀の力、幻影ノ領域を自分にかけて、氷がないようにすれば楽なんじゃねえ？

と

アクセル「よし、やってみるか！！…幻影ノ領域・覇。」

周囲の空間が白黒に反転する

そしてまたすぐに消える

しかし氷は何も変わっていなかった

アクセル「駄目か…やはりこれは悪魔の氷……………めんどくせえ…斬って進むか！！」

壁を蹴って、滑り、次元斬で壁を全て斬り捨てながら進む

アクセル「オラオラオラァ！！死神様のお通りだァ！！雑魚は道開けなァ！！」悪魔が現れるが全て斬り捨てて行く

そのまま直進

無駄にトリプルアクセルを決めていたが気にしない

さらに直進

悪魔が現れるが全て斬り捨てて行く

そのまま直進

再び無駄にトリプルアクセルを決めていたがやはり気にしない

さらに直進

最深部へ直行！！

「アクセル yaaaaaaahaaaaa」

シャキーン！！

ドゴオオオオン！！

「お！広いな！最深部か？」

歩いて行くと

シャツ！

アクセル「ツ！！」
キンキンキンキン！

氷の刃が飛んできた

アクセルは跳んで回避する

アクセル「親玉のお出ましか？」

???「…何者…」

そこには青と水色のボディの、忍者のような悪魔がいた。

アクセル「悪いが、鍵をもらっていかなきゃならねえ。」

「…ならば、ここで凍てつき、永久に眠れ。それが主の命だ。」

———WARNING———

アクセル「Ha！」

斬魔刀を横薙に一閃する

「…氷刃…」
ひょうじん

氷の刀のようなものを抜き放ち、氷をさらに纏わせ、受け止める。

アクセル「Illusion Blade！」

幻影刀が飛んでいく

「氷飛刃」
ひょうひじん

氷の刃を形成し、射出して幻影刀を迎え撃つ

アクセル「チツ…judgement slash!!」

次元斬で斬り捨てようとする

「氷河創造！（アイスエイジ！）」

アクセル「うおおっ!?!」

突然足下から氷の柱が発生し、足場を崩され、次元斬を外される

アクセル「クソッ!」

「永久なる凍土にて凍てつけ、無限の氷。絶対なる氷の力。絶対零度!!!」
ユートゼロ アブソリ

アクセル「うあッ!」

悪魔は腰に付けていた巨大な手裏剣のような武器に強烈な冷気をまとわせ、投げ飛ばした

アクセル「ガアアアアアアアア！」

アクセルは氷付けにされた。

「終わった…」

アクセル（――――俺は…

死ぬのか…

こんなところで!!

氷付けで!

まだだ!

まだ!

俺は死ぬわけにはいかないッ!!

生きて帰るっ！！！
）

バリーイイイイン！！！！

「……！？」

アクセル「やってくれるじゃねえか…死にかけたぜ…さて…本気で
”殺しに”かかるか…」

刹那、アクセルの姿が消えた

瞬間、悪魔の背後に現れ、斬りつける

再び姿が消え、右側に現れ、斬りつける

再び姿が消え、

左、上、下、背後、正面、右

連続で斬り付けられる

「バ…バカな…何だこの速さは…！さっきまでと段違いだ…！」

アクセル「…言ったら、”殺しにかかる”って。」

「…氷河創造！」
アイスエイジ

自分の周囲に氷の刃を床から発生させる

しかし

アクセル「無駄。」

シャキンシャキンシャキンシャキンシャキン！！

次元ごと斬り裂かれる。

そして

首を狙い、仕留めにかかるアクセル。

アクセル「You shall die.」

人型の悪魔の首を切り落とさんと斬魔刀を振りかぶる。

ガキン！

??? 「危なかったわ…良かった、間に合って…」

続く！

第34話（後書き）

えー…すいません

単刀直入に行きます

この小説がスランプに陥りました

話の終わりは見えてはいるのですが、なかなかうまく繋がらなく、
続きません。

だからしばらく更新は超遅くなります。

申し訳ありません。

では。

第35話（前書き）

はあ…まだスランプだあ…

第35話

アクセル「…なんでアンタが此処にいるんだ…？母さん…」

「…あなたに鍵を渡しに来たの。」

アクセル「…まさか母さんが持つてるとかじゃないよな…」

「有るには有るわ…半分ね…」

アクセル「半分？」

「鍵は二つに別れ、それぞれ別に場所に隠された。あの本読んだから此処に来たんでしょ？…書いてなかった？」

アクセル「…全く知らん…」

「本当に？まあいいわ。グレイシア…氷を溶かしてくれる？」

「御意…」

アクセル「…魔装具…だっけか…？」

「そうよ。この子は私の魔装具で、グレイシア。」

「…やはり貴女のご子息でしたか…」

「あら、気付いてたの？」

「戦い方がそっくりでしたから…」

「まあ私が戦い方を全部教えたからなんだけどね…」

「いえ…そう言うのではなく…もっと根本的ななにかが…」

「まあ…よく似てるっていわれるわね。…氷はどう？後どれくらいかかる？」

「後僅かです…」

ピシッ…

アクセル「おっ。」

「できました…」

部屋の中心に穴が開いていた

アクセル「ここに行けばいいのか？」

「そうよ」

「グレイシア、よろしくね。」

「承知しました…」

アクセル「これか…」

「そうよ。」

アクセル「名前とか、あるのか？」

「無いわ。」

アクセル「どう見てもバカでかい鍵なんだが…」

「一応剣としても使えるるからね…ちょっと下がってて。」

アクセル「わかった。」

「管理者権限、二つに分かれし鍵よ、再び一つに戻れ…key」
——return.」

二つに分かれていた鍵が輝きだし、周囲を光が包む

一体どのくらいの時間が過ぎたのだろうか

アクセルは眼を開いた

そこには斬魔刀くらいの巨大な鍵が浮いていた

「さあ：受け取りなさい：この鍵が：この物語の：世界の鍵よ。絶
対に貴方がデュオが持っておきなさい。」

アクセル「わかった。」

」

アクセル「…悪魔が出たなそれも尋常な数じゃねえ…」

「コダマタウンね、あそこはなぜか悪魔の発する特殊周波数…魔力が他の場所より圧倒的に濃いよね…」

アクセル「やはりか…なぜあそこだけやけに悪魔が出現するから何かあるとは思っていたが…」

「これは一筋縄ではいかないわね…グレイシア。」

「はい…わかっております…」

「さすがね。ならお願い。」

「はい…マスター認証、譲渡確認…新マスター、アクセル・レイ…登録。」

アクセル「…。」

「完了しました…新たな主、アクセル、ご命令を…」

アクセル「…ここから急いでコダマタウンにいけるか？」

「氷の道を作れば、最短で戻れます。」

アクセル「母さん、俺行ってくるわ。」

「急ぎなさい…私も後を追うから。」

アクセル「行くぞ！ 그레이シア！」

「承知！」

그레이シアは二つのチャクラムに姿を変えた

アクセル「氷結創造！」
アイスエイジ

氷の道を作り出し、その上を

” 見えない速度 ” で駆け抜ける

アクセル「間に合ってくれ…！」

続くッ！！

第35話（後書き）

	p v	ユニーク
累計	129,588	
アクセス	14,290	人

いやったああああああああああああああああ！！！！

デュオ「久しぶりの投稿かとおもえば内容はこれか…」

第36話（前書き）

久しぶりの投稿

第36話

———コダマタウン———

スバル「ちょ…こんなのアリ？」

ミソラ「いくらなんでも…これは多すぎ…」

大量の悪魔が町中に出現し、人々を襲っている。

暁「二人とも！デュオを呼んできてくれ！」

スバル「解りました！」

アリス「残念ですけど…デュオは今遠くに出掛けて居ませんよ…」

シオン「アクセルもね…」

暁「こんな時に限ってか…」

アリサ「仕方ありません…ですが今、こっちに向かってくれますよ…二人とも…」

シオン「だから、私達で時間を稼ぐの。あの二人が来たら、一気に終わるから…」

ミソラ「じゃあ…それまで…」

スバル「ボク達でなんとかしなければ…」

アリサ「急ぐよ！」

アリサは展望台から飛び降りた。

シオン「貴方達も急いでね。」

「「…えーーーーーッ!?」」

二人とも生身で飛び降りたのだった…

アリサ「まず、一発…」

ロケットランチャーを悪魔が集合してる場所に撃ち込む。

シオン「吹き飛びなさい…」

突風を発生させ、鎌鼬を飛ばして悪魔を切り刻んで行く

アリサ「…ターゲット…ロックオン…」

トリガーを引き、ミサイルを撃つ。

さらにミサイルの先端部からグレネードが打ち出され、爆発をさらに広げる。

直後、銃をサブマシンガンに切り替え、乱射。

悪魔が頭を吹き飛ばされ、消し飛んでいく。

スバル「ボク達も行くよ！ ロック！」

ロック「おうよ！」

スバル「バトルカード、マッドバルカン！」

連続的に弾丸を打ち出し悪魔を撃ち抜く

が

スバル「弾が…聞かない!？」

弾全てが悪魔の体にふれた瞬間に吸い込まれるように消えたのだ

ロック「クソッ！どうなってやがる！」

シオン「対消滅電波よ！特定の周波数の電波で打ち消して攻撃を無効化するのよ！魔界門が長く開きすぎたわ！コイツ等にはもうバトルカードも標準装備攻撃もきかないわ！」

ミソラ「じゃあ、同ずれば…」

シオン「物理的に攻撃するのよ！そうすればダメージを与えられる！」

暁「だったら…！」

暁は近くにあった少し大きめの石を悪魔に全力で投げつけた

直撃した悪魔は体をくの字に曲げて吹き飛んだ

暁「お、効いた。」

スバル「ちょ…仕方ない…この鉄パイプで…ミソラは下がってて！」

ミソラ「スバル！退いて！」

スバル「なん…だと…」

バカでかいガレキを持ち上げて投げていた

ミソラ「オリヤーーッ！！」

ズガアアアアン！！

悪魔数体が押しつぶされた

アリサ「門は…どこかな？」

シオン「さあ…？とにかく、悪魔を倒せばわかるんじゃない？」

アリサ「だったら、これで行くしかないね…」

ロケット弾を射出し、三発同じ軌道に撃ち込む

一発目は悪魔の集合している真ん中に、2発目はその弾に当たり、三発目は爆発に巻き込まれ誘爆した。

これにより、悪魔は一気に数百体は消し飛んだ

アリサ「よっし！」

シオン「さあ、風よ…暴れなさい…」

暴風が周囲に発生し、悪魔を吹き飛ばす

吹き飛ばされた悪魔は壁や瓦礫、地面に叩きつけられ、消え去っていく。

シオン「少しずつ…減ってきているわね…」

アリサ「うん、けどまだまだ居るし、そろそろ上級悪魔が出て来る頃合いかも…」

シオン「ッ！どうやら噂をすれば、みたいね…」

けたたましい叫び声と共に、黒いマントで体を覆い、巨大な鎌を携えた巨大な骸骨が現れた

スバル「で…でかい…」

ちなみに身長、10m前後

シオン「どっか行きなさい!!」

ゴウツ!

足を踏み鳴らした瞬間、風が吹き荒れて悪魔を吹き飛ばした

アリサ「ついでに!食らいなさい!!」

ランチャーからレーザーを撃つ

スバル「…強っ…」

シオン「……!ダメ!まだ倒せてない!」

ミソラ「えっ!じゃあどこに…」

アリサ「…さあ…」

周囲には何も見あたらない

逆にそれが全員の不安を煽っていた

スバル「…ハッ!? ミソラ! 後ろ!」

気付いた頃には遅すぎた

巨大な鎌が既に振り下ろされ始めていた

ミソラ「キャアアアアア!」

スバル「ミソラ! ミソラアアアアアアアア!」

続く
…

その手は届くことは
なかった

スバル「あ…ああ…あああ…」

目の前の悪魔に七本の剣が突き刺さり、地面に倒されていたのだから…

その瞬間、世界が白一色に染められた

『…アオキリユウセイヨ…』

スバル「え？」

スバルの目の前には蒼と黒、刀身は鮮やかな翠の剣があった

『チカラガホシイカ？』

スバル「え…？」

『チカラガホシイカトキイテイル！』

スバル「…うん…」

『ナラバ！コノツルギヲテニトレ！キサマニハソノシカクガアル！
コレハ…キサマニチカラヲアタエルツルギダ！』

スバル「…僕に…力を…？」

『ドウシタ…チカラガホシイノダロウ？ナカマヲマモデルダケノチカラガ…！』

スバル「……」

『だああああ！！このしゃべり方疲れるからさっさとしやがれコノヤロー！とつと目の前の剣を取りゃあいんだよ…！！』

スバル「は、はいいいい！！」

言われるがままに剣の柄を握った

刹那、蒼白い光が剣から溢れ出した

『おせえんだよ！！見ろ！周りにさっきと同じ奴らが集まってんじやねえか…！！』

光が晴れ、元の場所に戻った瞬間、声が聞こえた

スバル「……」

『チツ…まあ、この程度なら10秒ありゃあ十分だろう…ホレ、さっさとやっちまいな…！！』

スバル「…」

無言のまま剣を振るい、背後に迫っていた一体を一閃

右側から現れた悪魔の腹に剣を突き刺し、左側に居た悪魔に投げ飛ばす

上側から火炎弾が飛んで来るが、左肩にいつの間にか装備されていた巨大な盾で防ぎ、剣を頭上に投げつけ悪魔に突き刺さった所で飛び上がり、柄を掴んで地面に叩きつける

叩きつけられてなお生きている悪魔

スバルが剣の柄についていた引き金のようなモノを引いた瞬間、剣の向きが横になり、柄が折れて銃口が出てきた

刃が刺さっているまま、銃へ変形させた剣の引き金を躊躇いもなく引く、

—
—
—
—
—
—
—
一
発
—
—
—
—
—
—
—

—
—
—
—
—
—
—
二
発
—
—
—
—
—
—
—

三 発

四発目を撃った瞬間、悪魔は砂になった

銃を剣に戻している瞬間、残り6体の悪魔が鎌を振りかぶりながら同時に飛びかかって来た

が、

スバル「…セブンスソード…」

スバルが左手をかざした瞬間、悪魔の体から刃が飛び出し、砂へとなった

ついさっき地面に刺さっていた6本の剣が背後から悪魔を突き刺

したのだった

瞬く間に悪魔は全滅させられた

上級悪魔複数が僅か10秒たらずで…だった…

続く
⋮

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1057s/>

流星のロックマン4 Operation Shooting Star

2011年11月29日13時45分発行